

特263  
335



始





特

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

西鶴全集

第八

武家義理物語  
西鶴織留

正宗敦夫

編纂  
校訂





## 西鶴全集第八解題

古典全集「西鶴全集」第八篇として「武家義理物語」と「西鶴雜留」を採録した。

### 武家義理物語

西鶴の武士氣質を書いたのは「武道傳來記」と此の「武家義理物語」と二篇で有るが、共に西鶴の得意の作でも有るまいし、物變り星移れる昭和の今日では武士氣質其の物に對する考も人も我も相違して來た事であるから、他の諸作品とはかはりて餘り面白く讀む事が出來ない。西鶴としてもどちらかと云へば失敗の作で有ると斷じてよからう。水谷不倒氏の研究に

武家義理物語 大本 六册

版行 貞享五（戊辰）年二月

挿繪 吉田半兵衛

製本 竪八寸五分 横五寸九分

本文 梓竪六寸二分 横四寸八分

行數 十一行

西鶴全集第八 解題



本書の表紙には薄曇色のものと、濃花色のものとの二種を見る。墨表紙のもの初版にして、花色表紙は後摺である。初版には序文に「鶴永、松壽」の二印の次に左の如く（貞享五<sup>戊</sup>辰年樓月吉日 四 四）記せど後摺には此年月日が削られてある。

と有る。是れで本書の形の上の事は盡きて居る。

西鶴が何故に武士物に筆を染めるやうに成つたかと云ふに、専門家には種々研究も有り、議論も有る事有らうが、私共素人の考では、西鶴が好色本で一人氣を博したから、目先を變へて武士物語の剛強な處を書いて人氣を取つてやらうと位に思つたので、其で「武道傳來記」のやうに強剛を題材にし、又義理物語の遺念に執したる武士の意氣地を書いて見たのである。私は西鶴が武家物語を書いたのは結局讀者本位で筆を執つたので、外に深い考は無かつたと思はれる。其で其が成功せざりし爲にさつ／＼と外の方面に筆を轉じて、つまり雑話集のやうなものを書くやうになつて、武家物は此二書で筆を斷つた事と思はれる。

西鶴が「武家義理物語」を書くに當つて、其材料を青砥藤綱、明智光秀、石川丈山、石田三成、嵯川新右衛門と云ふやうな歴史上の人物を多く材料に用ゐた。何故に斯く題材を古きに遡上つたかと云ふに、其處は西鶴が實驗或は見聞を材料にした、好色物のやうには行かぬ處で、西鶴は直接は無論間接にも當代に材料を得るのは困難で有つたので有らう。彼れが大阪人で有つて、所謂義理固い武士と接觸する事はほとんど無かつた事有らうから、自然材料は古い時代に求むるより外、すべが無かつたので、作品も他の作品の如き光を

持た無かつたので有る。しかし、西鶴としてこそ失敗の作と云へ、此物語が雑話集の味を豊かに帯びて種なる逸話類を率直に描き出した處には、さすがに、西鶴ならではと思れる處が多い。よく人々の話題に上ることであるが、「約束は雪の朝食」と上田秋成の「菊花の契」と同じやうな題材で、何れも優れた作品で有ると云はれるが、成る程何れも義理物語、同じ趣向なれど、秋成の味噌濃きにくらぶれば此の雪の朝食、味噌の味の淡々として自然なる、到底問題では無い。さすがに西鶴で有ると誰にでも感服せられる。

因に云ふ。近代懸懸者は西鶴作としてとかくうたがはるゝもので有る。げに文章も大に好色本などは相違して居るが、此武家義理物語の書き出したそのあたりはやはり匂ひに似通へる處が有る。参考すべきで有る。

### 西鶴織留

「西鶴織留」は西鶴の遺著の内の一種で有つて團水の序に其の成立ちは明かに書かれてある。即ち西鶴は生前所謂町人物として永代蔵に次いで「本朝町人鑑」「世の人心」と云ふ二種の作をする考で有つたが「永代蔵」以外の二書は完成に至らずして、其草稿を幾分残して此世の人では無く成つた。其草稿を取り合せて「西鶴織留」と云ふ名を付して大本六冊として出版したので有る。水谷氏云。

版行元祿七（甲戌）年三月吉日



「世の人心」是れは「町人鑑」とは全く別種の物語で有る。「世の人心」と云ふ題は「色は常座の無分別」中に「されば世の人心、何時となく替り行き定め難し。」と有る處から取つたので有らう。是れこそ西鶴があらゆる人世を見渡し、何れにも片寄る處無く、好色物でも無く、町人物とは云ふものゝ、胸算用、永代蔵に出て來るとはことなり、色を離れた人でも無ければ、金のみの人でも無い。ほんとうの此の世の人を書いたもので有る。こゝに到つて始めて西鶴の世相描寫は渾然として総合的になつた觀が有る。即ち大成の域に到達したと云ふべく、實にいゝ作品で有る。彼れ此れ言を加ふべき必要も有るまい。

影板  
繪入

武家儀禮の譜



それ人間の一心、萬人ともに替れる事なし、長劍させば武士、烏帽子をかづけば神主、黒衣を着すれば出家、鎌を握れば百姓、手斧つかひて職人、十露盤おきて商人をあらはせり、其家業面々一大事をしるべし、弓馬は侍の役目たり、自然のためにし、知行をあたへ置かれし主命を忘れ、時の喧嘩、口論、自分の事に一命を捨るは、まことある武の道にはあらず、義理に身を果せるは、至極の所、古今その物がたりを聞きつたへて其類を是に集むる物ならし。

永 鶴

壽 松

武家義理物語 卷一

目録

一 我物ゆるゑに裸川

一文惜みの百しらす  
夜のたいまつは心の光

二 猿子はむかしの面影

後がさきとは妹の縁組  
抱槍の神もうらみず

三 衆道の友よぶ衛の香爐

都を山居にする親仁  
頼まれて心の外の念者



四 神のミがめの榎木屋敷

つよき人には古狸も  
古き狸がいきてはたらく

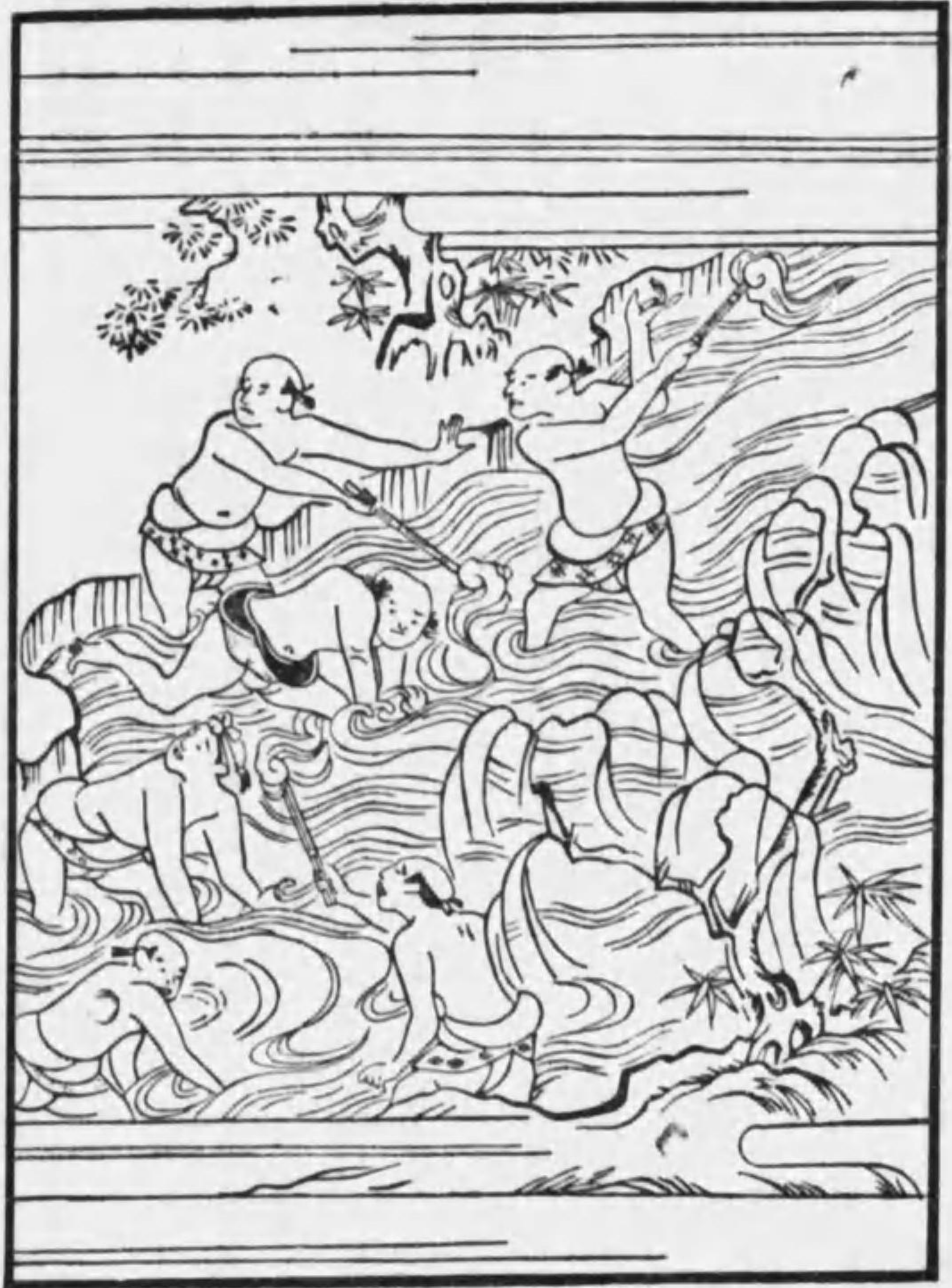
五 死なば同じ浪枕とや

大井川は命のわたり  
一度に六人俄坊主

① 我物ゆゑに榎川

口の虎身を喰、舌の劍命を断つは、人の本情にあらず、憂ふるものは、富貴にして愁ひ、樂む者は貧にして樂む。嵐は雲ふき晴れて名月院の詠、鎌倉山の秋の夕暮を急ぎ、青砥左衛門尉藤綱駒をあゆませて滑川を渡りし時、聊か用の事ありて火打袋を明るるに、十錢にたらざるを川浪を取り落し、向ひの岸根にあがり、里人をまねぎ、僅かの錢を三貫文あたへて是をたづねさせけるに、あまたの人足松明を手毎に、水は夜の錦と見え、足手は柵となつて瀬々を立ち切り捜しけるに、一錢も手にあたらずして、難儀する事しばらくなり。たとひ地を割き、龍宮までも是非にたづねて取り出だせと下知する時、一人の人足仕合せと三錢さがし當り、其の處を替へず、又は一錢二錢づつ、十錢ばかり取り出だせば、青砥左衛門勘定あはせて、よろこぶ事かぎりなく、其男には外に褒美をとらせ、これ其まゝ捨て置かば、國土の重寶朽ちなん事本意無し、三貫文は世にとどまりて人のまはり持ちと、下人に語りて通りける。此の斷聞きながら、一文をしみの百しらずとぞ笑ひしは、智惠の淺瀬を渡る下々が心ぞかし。兎角は夜のまうけに思ひよらざる事なれば、今宵の月に集錢酒呑まんと各勇みをなせり。其中に物の才覺らしき男のいへるは、いづれにも心よく酒事さすは、我に禮をいふべし、其仔細は、青砥が落せし錢にたづね當べき事は不定なり、時にそれがしが理發にて、此方の錢を手まはしして、左衛門程、世に賢き者を偽りすましけるといひければ、皆々横手をうつて、扱は其方







がはたらきゆゑ、樂遊びのおもしろやと、盃はじめけるに、又ひとりの男興を覺して、これ更に青砥が心ざしにかなはず、汝が發明らしき貌つきして、人の鑑となれる其心を働かせけるは、ならびなき曲者、天命もおそろし、我れ老母をはごくむたよりに此錢嬉しかりしに、今の有増を聞き、なんぞ其れを取るべし、其上母此事聞かば、まことをもつて養ふとも、中々常も満足する事あらじと、其座を立ちて歸り、母に語るまでもなく、朝にとく起きて、馬の沓を作りて、けふをなりはひに暮しぬ。此男はいはねど、自然と青砥左衛門聞きて、其人足をとらへて、きびしく横目を付け、身を丸裸にあらため、落せしまことの錢にたづね當るまで、毎日過大をいひ付けるに、秋より冬川になる迄、いかばかり難儀して、世間もおのづから水かれてやうく眞砂に成る時、九十七日目に彼錢残らず搜し出し、あやふき命をたすかりぬ。はおのれが口ゆゑ非道をあらはしける。其後正道を申せし人足の事を竊に尋ねられしに、千馬之介が筋目、歴々の武士にて、千馬孫九郎といへる者なるが、仔細あつて、二代まで身を隠し、民家にまぎれて住みける。流石侍のころざしを深く感じて、青砥左衛門此事を時頼公に言上申して、首尾よく召し出だされて、二たび武家のほまれ、ちとせを祝ふ鶴が岡に住みぬ。

② 猿子はむかしの面影

明智日向守の巳前は十兵衛といひて、丹州龜山の城主につかへて、やうく廣間の番組に入り、外様につと

めをせしが、朝暮心ざし常の人には各別替りて、奉公にわたくしなき事、自標と天理に叶ひ、ほどなく弓大將に仰せ付けられ、同心二十五人預り、武家の面目、此時、具足金拾兩有りしに、はや一國の大名にも成りぬべき願ひ、生れつきての大氣、其身の徳也。十兵衛今に妻のなき事を見および、息女持ちたる人乞舞の望み、彼是内証をいひ入れけるに、妻は近江の國澤山何がしに美なる娘の兄弟ありて、いづれか花紅葉、色くらべのすぐれて姉の見よげなれば、十一の年よりいひかはして、身體極まりて之をむかへる約束、それよりは七とせあまりも過ぎぬれば、世の哀れ人の情もしるべき程なり、近々に呼びむかへんと、妻女の親のもとへ狀通いたせしに、世には移り替れる歎あり、兄弟の娘一度に抱齋の山をあげしに、美なる妻の姉むすめ、貌いやしげに、さりととはむかしと替りぬ。妹娘は巳前にすこしも變らず、面影うつしく育ちぬ。十兵衛に約束せし姉が形の各別になれば、是を人中におくりて醜き形を耻ぢさせ、我が娘と沙汰せらるゝもよしなしと、夫婦内談して、いまだ妹は何方へも契約なければ、何となく是をつかはし申すべしと、此事を語れば、更に身の事を歎かず、自ら此姿にて十兵衛殿に見ゆる事は思ひもよらず、まして此形を勘忍すべき者あればとて、外に男を持つべき心底にあらず、妹は我等がむかしに風俗もかはらず、よろづに賢く、心ざしもしほらしく生れつきぬれば、何國に行きても二親の御名は下さじ、是を十兵衛殿へおくらせ給へ、我等は兼ねて出家の願ひ、諸佛をかけて偽りなしと、手馴し唐の鏡をうちくたきて、浮世を捨つる誓文を立てしを聞き、父も母も感涙袖にあまりて、暫らく思案せしが、角いひ出だして返らぬ事ぞと、妹に何の仔細もなく、





龜山におくる縁付の事を申渡せば、何とも合點まゐらず、姉君より先立ちて、道の違へる所なり、姉の御身かたづきて後とはともかくも申上げける。最至極、それは世間の順義ながら、姉はつね々々出家の心ざし深く思ひこめしゆゑ、兎角は望みにまかせ、近々に南都の法華寺へつかはしける、そのかたは龜山におくる也、女にうまれても其身の仕合有り、明智十兵衛といへる人は、まづ武藝すぐれて、殊更理にくらからねば、諸事に皆明けにして、一生つれ添ふ夫妻の樂み深し、しかも次第に出世の侍なれば、我々老後のたよりとも成りぬべき人ぞと、さまざまいひ聞かせけるに、女ごころに嬉しく、親達の仰せにまかせ、吉祥日を擇び、相應よりは美々敷仕たて、龜山におくられける。十兵衛も縁のはじめを祝ひ、松竹の臺の物を調べ、數々の盃事までも、振り分け髪に見し姉むすめとおもひしが、其後寢間の燈火ちかく、互に面を見合せし時、十兵衛むかしの脇腹に氣をつけて、其時は此女に咎むる程にはあらぬ疵子ひとつありしが、おとなしく成りて其れもはちて取り失せけるかと、いはずして耳のほりを視しに、娘もはや心を付けて、是にはくるのましますはわたくしの姉君なり、麗はしき御姿抱擁にて變らせ給ひ、さりとは女の身にしては御いとほしき事なり、さし置きて自らの縁組は逆なると斷申せど、二親の命をそむくなれば、是に送られけるも心騒りのやむ事なし、今思ひあはせば、こなたさまの御約束は姉君にうたがひなし、いかにしても道のたたざる事なれば、何事もゆるし給はれ、わたくしは今日より出家と、守刀にて黒髪切るを留めて、其方形をかへても世間濟むまじ、人しれず内證にて、某が分別あり、五日に歸るまで待給へ、武士の息女の心底と深く感



じて、それより二たび貌をも見ずに隔たりて、里歸りの時、段々状態にしるし、右もらひしは姉なれば、難病は世にあるならひ、たとひむかしの形なくとも是非におくらせ給へ、一命にかけても夫妻願ひの所存、ことに此たび妹の心入、女ながら道理につまりけると、心中の程いひやりしに、親里にも此事満足して、十兵衛願ひにまかせ、また姉娘をつかはしけるに、うちとけて不便をかけ、此の中長くもがたと祈りける。女はひとしほ男の情を忘れもやらず、萬心にしたがひぬ。此妻美女ならば、心のひかる所も有るに、義理ばかりの女房なれば、只武を勵むひとつに身をかためぬ。此女形に引きかへて心猛く、刺なき中にも外を語らず、明暮軍の沙汰して、廣庭に眞砂を集め、城取せしが、自然と理にかなひて十兵衛が心の外なる事も有て、そもそも此女武道の油断をさせずして、世に其名を揚げしと也。

③ 衆道の友よぶ衛香爐

京都將軍東山殿御時、世のもてあそび事始めて取立てさせられ、萬人花車風流になりて裕に暮しぬ。中にも名香の煙を好かせ給ひ、諸國より集まりて六十種の名のみ面白かりき。折ふし霜夜の更行くまで此木の御沙汰有しに、明けがたの嵐につれて聞きも馴れざる薫に、いづれも心をすまし給ひ、御屋形のうちをたづねさせられしに、御門を離れて外なれば、丹波守利清に、仰付けられ、此ゆかり如何なる方ぞ、たづねまるれよし、手まはりの侍二人めしつれて、其匂ひにひかれて行くに、柳原はるかに過て、賀茂の川原になれ

ば、次第にかをりも深く、淺瀬をわたり越えしに、十一月末の六日の夜、いつよりは闇く、物の色あひも見えず、星影のさざれ水に移り、是をたよりに向ふの岸にあがれば、汀の岩の上に簀篋置たる人の、香爐を袖口に持添へ、氣を靜にして座したる風情の心憎し。いかなる事有りて、かく獨りはおはしつるぞと問ひけるに、ただ何となく千鳥の音をのみ聞くとこたへぬ。さりとは替りたる境界、是各別の樂み凡人とは思はれず、いかなる御方とたづねしに、僧にあらず、俗にあらず、三界無庵同前にて、六十三に成りける我、いまだ足も立ちけるといひ捨て、岡野邊の並松わけて立歸る。扱も氣散じなる返答やと、なほしたひ、それがしが便るは其木のゆかしく參るなり、何といへる名香ぞと聞きしに、むつかしや老人はしらず、すがりたれども聞分け給へと、香わたして行方しらす成りにき。利清立歸りてあらましを申し上げしに、其身の取置うらやましく覺しめされて、其人を色々たづねられしに、更にしれざる事はいなくおぼしめされ、彼香爐を衛と銘をうたせられ、名物と成りぬ。其頃關東侍の一子とて、美形都の花にまさり、櫻井五郎吉といへる人、今年十六にて姿ゆゑ召し抱へられ、近う御前を勤めけるが、衛の香爐見しより物おもふ景色、人も見とがめける程に包みかねしを、或人ひそかに問ひしに、はじめの程はいはざりしが、いつとなく次第弱りの身と成り、死ねば言葉成形身と語りし、此香爐のぬしとは、兄弟の約束深く出合ひしに、我出世のためにならずと、古里を出で、都のかたに上られしを、忘れもやらず、いとしさに其跡をしたひ、此御家に住む事、もし其人にあふ事も有なんと思ふ折ふし、香爐は縁に見知りてたづぬる事の成り難き病氣におかされしは、是







非もなき我身と、袖に玉ちる泪川、しばしも乾く事なし。此哀れを問ふ人は、同じ小姓仲間の樋口村之介といへる人なるが、つねにも情深く語りあひしが、自然の事もあらば、よき友ひとり失ひけるをなげきぬ。かくて日數ふるうちに五郎吉頼少く成て、息も絶えぬの時にいたりて又もなき無心を申出しぬ。我れ相果ての後彼人にたづねあひ給ひて、其身それがしに替りて、兄弟念頃かへすくも頼むといへり。此義は少し斟酌成事ながら、何事も命かけてと申しかはせし義理にせめられ、此事請合ければ、嬉しげに笑みて、是を見をさめの貌ばせ變りて、つひに空しく成りぬ。生死は世のならひとて、なげく人も有り、又身にかからぬ人は、そこ／＼にかなしみて鳥部山の夕煙となし、朝は白骨と消えぬ、世にこれほど果敢なき事はなかりき。五郎吉がなき跡の事、病家の反古までも取隠して念頃仕廻、それより村之介は五郎吉が遺言にまかせ、千鳥を聞きし隠者の事をたづねしに、今出川の藪垣のほとりにわづか成隠家、組戸さし籠めて、夢の心になせるうちにも、東に別れける五郎吉が事ども忘るる日もなく、けふは時雨れて一入淋しき折ふし、村之介ひそかに入りて、五郎吉最後の次第を語れば、随分をさめたる身を取亂し、是ばかりは世の偽りになれかしと、男泣きの有さま、見るめも共になげかしく、しばしは物語すべき事もやみけるが、いはねば五郎吉が草のかけなる恨みもうたてく、此隠者の御をつく／＼と見しに、六十にあまれる人の形もいやしかるに、若念の契りを結ぶは何とやらはづかしき事にぞあれど、死人といひかはせければ、是非なく仔細をかたり、五郎吉になりかはりて、今より兄弟分と覺しめして可愛がらせ給へといへば、此男なげきの中に驚き、是はお

もひもよらざる契約、ゆるし給へと、中々同心せざりき。村之介申出だしての赤面、さては一分立ち難しと身を捨つる覺悟に、兎角は五郎吉の申残せしにまかせ、又戀をとりむすび、世に長く語りなくさまんと言葉をかためて、其後は夜毎にしひびて通ひぬ。わけなき事を頼まれ、心には染まされども、義理ばかりの念友、村之介が心底まこと成哉と是を感じぬ。

④ 神のとがめの榎木屋敷

江州淺井殿の時、屋形町の末に古代より枝葉さかえたる榎木あり、むかしは神やしろ立たせけるといひ傳へて、石の玉垣の形残れり。所はんじやうなれば人家立てつづきて、是も榎木屋敷とて、藏の奉行役諸尾勘太夫といへる人申請けて新作りいたせしに、神のとがめにや、世間はしづかなる夜更けて、醒き風吹きかよひ、人の身にあたるといなや、むつける程に草臥れつきて、爰に住居の勘忍しかね、仔細を御断申上げ、此屋敷をさしあげける。其後是を望みて住みしに、間もなく、病死、又は悪風にたいくつして、幾たりか替りて、今は明屋敷と成りて、門は唐蔭閉ちて、見ねども此内すさまじ。有時若手の武士ども密合語りける次手に、榎木屋敷にすむ人なきと咄しけるに、此座に長濱金藏といへる人の申されしは、いかに神社跡なればとて、人に崇り給ふ仔細なし、それは住める人の愚かなるゆゑなりと、世の人あさましく申しぬ。其座に以前此屋敷に住みたる人の親類、内縁の方も有りて、金藏の言葉を耳にかけ、いづれ貴殿はあれに住みながらへ



給はんと、すこし氣をもたせければ、申出だして是非に及ばず、老中へ内意を申せば、望むを幸ひに早速賜はりける。金藏此屋形に移りて、第一此榎木曲物成りと、枝葉を抛がせけるに、神のとがめもなかりき。是を思ふに、惣じてかやうの事はあるじの氣のつよきにしがひ、かならずやむ事と、物に馴れたる人の語りぬ。有雨夜に金藏家來集まりて、世におそろしき物語にて明しぬ。此内のひとり雪隠に行くを見かけて、才覺なる小坊主古き鞆をさげ出で、壁のくづれよりさし入れ、其ものゝ腰をなでけるに、此におどろき逃げ歸るを可笑しく、其後たび／＼おどしければ、誰がいふともなく、毛のはえたる手して抓むといひふらして、暮れては自由に行く人絶えて、是も又氣味の悪き事ぞかし。是をしらざる人外よりきたりて、かの雪隠へ行きしに、くだんの鞆片隅より踊り出で、生きたる物のはたらき、おの／＼不思議を立て、ためしみるに、人さへ行けば鞆の狂ひ出づるを段々申し上ぐれば、金藏何とも思はず、扱て是にて誰か初めの程腰を撫でける、人のおちぬる心たま是に入りて、かくは動きける、おのれは矢がらを入るゝ役なるに、無用のはたらき、其科今おもひしれと燃捨てけるに、煙の中にて最期わかまへ、狂ひぬ。物のあやかし、かやうの事ぞと、皆人に安堵させて、此屋敷にて八十餘歳まで堅固に勤めける。金藏人中の一言、その義理たがはず、爰にすましけるは、天晴武士の一心と、世の人ほめにき。

⑤ 死なば同じ浪枕みや

人間定命の外義理の死をする事、是弓馬の家のならひ、人みな魂にかはる事なく、只その時にいたりて覺悟極むるに見ぐるしからず。其頃額州伊丹の城主荒木村重につかへて、神崎式部といへる人横目役を勤めて、年久しく此御家を治められしは、筋目たゞしきゆゑなり。有時主君の御次男村丸、東國蝦夷が千島の風景一覽の覽しめし立、式部も御供役仰付けられしに、一子の勝太郎も御供の願ひ叶ひて、父子ともに其用意して東路にくだりぬ。比は卯月のすゑ、日數かさねて、けふの旅泊は駿河なる嶋田の宿に兼て定めしに、折ふしの雨ふりつき、殊に其日は佐夜の中々をだやみなく、菊川わづかの道橋も白浪越すかと見えて、しかも松吹く嵐に、すゑ／＼の者は袖合羽の裾かへされて、難儀の山坂越えて、金谷の宿に人數を揃へ、大井川の渡りを急がせられしに、式部は跡役あらため來つて、川の景色を見渡し、水嵩次第につのれば、けふは是に御一宿あれと、襪々留めまゐらせけれども、血氣さかんにましまして、是非をかなが給はず、御心のままに越せよとの仰せ、いづれも大浪に分入り、流れて死骸の見えぬもあまたにて、渡りかゝらせての御難儀、跡へかへらず、漸先の宿にあがらせ給ひぬ。式部は跡より越えけるが、國元に出でし時、同役の森岡丹後一子丹三郎、十六歳成るが始めての旅立、諸事頼むとの一言爰の事なりと、我子の勝太郎を先に立て、次に丹三郎を渡らせ、人馬ともに吟味して、其身は跡よりつきしに、程なく暮におよび、川越瀬を踏違へて、丹三郎馬の鞍覆りて横浪に掛けられ、はるか流れて沈み、是を歎くにはや行方しれず成りにき。しかも岸根今すこしに成りて、ことに歎深し。我子の勝太郎は仔細なく汀にあがりぬ。式部十方にくれ暫く思案し







すまして、一子の勝太郎をちかづけいひけるは、丹三郎儀は親より預かり來り、爰にて最期を見捨て、汝世に残しては丹後手前、武士の一分立ちがたし、時刻うつさず相果てよといさめければ、流石侍の心根すこしもたるむ所なく、引きかへして立つ浪に飛び入り、二たび其佛は見えずなりぬ。式部は暫く世を觀じ、まことに人間の義理程悲しき物はなし、故郷を出でし時、人もおほきに我を頼むとの一言、其まゝには捨てがたく、無事に大川を越えたる一子を態と最期を見し事、さりとは怨めしの世や、丹後は外にも男子をあまた持ちぬれば、歎きの中にも忘るゝ事も有りなん、某はひとり勝太郎に別れ、次第による年の末に、何か願ひの樂みなし、殊に母がなげきも常ならず、時節外なる憂き別れ、おもへばひとしほ悲しく、此身も爰に果てなんと思ひしが、生命の道をそむくの大事と、面に世間を立てて、内意は無常の只中を觀念して、若殿御機嫌よく御歸城を見届け、何となく病氣にして取籠り、其後御暇を乞ひて、首尾よく伊丹を立ちのき、備州の清水に山深くわけ入り、夫婦形をかへて佛の道を願ひ、それまでは仔細を人も知らざりしが、勝太郎最期の次第、丹後つたへ聞きて其心ざしを感じ、是も俄に御暇乞ひ請け、妻子も同じ墨衣、式部入道の跡をしたひて其山にたづね入り、憂き世の夢を松風に覺し、泪を子どもの手向水となし、ふしぎの縁にひかれて菩提に入りし山の端の月、心の曇らぬ語らひ、たぐひなき後世の友、行ひすまして、年月を送りしに、其人ものこらず、今又世に有る人もものこらず。

### 武家義理物語 卷二

#### 目録

- 一 身體破る風の傘  
阿波の鳴渡に氣が立つ浪  
うらみは富士を磯貝氏の事
- 二 御堂の太鼓打つたり敵  
東武より飛ぶが如く雁書内見  
露は花屋が門に命の事
- 三 松風計や残らん脇指  
身がな二つ月の夜雪の夜  
兵者もよはものも御用に立つ事



四 我が子をうち替手

相手をよくもきれとの文殊  
分別の外の屋敷の事

① 身體破る風の傘

幾春か身をいはひ、若松の城主加藤肥後守殿に勤めて、本部兵右衛門とて、武の道けなげなる人なりしが、侍は住居定めがたし、奉公さかりの花の時、俄に落花のごとく、會津を惣並に立ちのき、浪人ほど悲しきはなし、妻子はかゝる節の難義、又身體を穢ぐうちに、兵右衛門病死をなげき、惣領はおもふ仔細有りて、一子兵右衛門と申せしを、三番めの弟武州にて磯貝何がしの家を繼いで磯貝藤兵衛といへり、此かたへ養子につかはし、其身は高野に隠し、二尊院の門前に幽かなる草の庵、うき世の月を餘所に見なし、いつとなく胸も晴れて、廟前の杉むら、心の針のとがりをやめて、今は千本楡の露を拂ひ、觀念の朝勤、夕は岩上にたずみ、後の世を願へるの外なし、さて名を岡本雲益とあらためける。雲益さしつぎの弟本部喜介と申せしは、蜂須賀の家に有りしが、眼病氣にて暇申請け、阿州の片里に引籠り、世を際にして暮しぬ。一子は磯貝藤介といひて、是も牢人分なり。喜介弟は出家して、同國眞言寺源久寺にすわりぬ。又源久寺弟は本部實右衛門と申して、是も阿州に安留次左衛門といへるは親兵右衛門と古傍輩なるゆゑ、其よしみにて是にかゝり人と成りて、年月爰に暮しぬ。實右衛門有時新橋をわたり行くに、折ふし雨風はげしく、前後も見えざりし時に、むかふより嶋川太兵衛と申す人、是もわたりかゝりぬ。兩方ともにさし傘かたふけて行き違ひしに、橋の中ほどにて、實右衛門傘を太兵衛さしがさに振りあてしに、太兵衛、是は慮外とつきのけしに、實右







衛門、隙外といはれては断りも申されず、其方何者にて推参なる言葉といふ。すゑさんとはいかに、見れば安留次左衛門が家來のぶんとして、詫びて通るべき事本意なるに、かへつて難言申す段爰は堪忍なりがたと、抜けば抜きあはせて、しばらく切り結びし、實右衛門運命つきて終に討たれける。其時節、磯貝兵右衛門、同名藤介、此兩人、太兵衛をねらひしに、又者分の御沙汰にきはまり、討つ事成りがたく、是非におよばず所を立ちのき、武州にくんだり、同名藤兵衛方に居て、國元の様子聞合せけるに、太兵衛事すこし手を負ひ、御奉公成りがたく、御断申上、弟惣八に家を繼がせ、其身は遠州の山里にひっそくして、名を本立と替へて、かしらも散切に成り、醫道を心がけ、むかしの如く榮花の望み絶えて、世のまじはりをやめられける。兵右衛門は江戸に罷在うち、世間の事どもうち捨て、たゞ一念に伯父の敵うちたき願ひばかりに、朝暮武藝はげみ、毎日兵法の師の許に相勤めけるが、何とぞ武運にかなひ、嶋川太兵衛にめぐりあひたき諸願をかけ、しのびく阿州の内證を聞くに、國を出でざれば何とせん方つきて、氣をなやみしに、其里の人年ごろ別して語り、殊更内縁のよしみ成りけるが、長病にて所の療治竭きて、次第にたいくつの身と成り、上方の醫にあひて相談有りたき願ひ、一門同心して、養生のため大坂にのほれば、本立も是を見捨てがたく、氣つかひ絶えざる身なれども、常々念比の義理をおもひて、病人はしんしやくすれども、船中の氣分心もとなしと付添ひ、大坂に着船して、南の御堂の前に借座敷をととのへ、あるじは四季折々の草花商へる見世にして、これも心の慰みなれる處とて、萬づに氣を付け、本立も随分ひそかに町ちりきして、人しれず

逗留いたせしに、右の仔細をしる人は無用の沙汰しける。

② 御堂の太鼓打つたり敵

悪事四十里をはしり船、大坂の様子阿波に聞こえて、鳴渡の浪風もなく、磯貝藤介が方より人を仕立て、東武にありし兵右衛門方へ文通せしに、此狀貞享四のとし五月十四日につきて、兵右衛門内見して、其夜身ごしらへせしに、舟越九兵衛といへる浪人聞きつけて、兼ねて語りしはかゝる時の事なりと、助太刀の事たのもしく申すを、色々たい申せども、是非同道といひかゝつて退かざれば、よろこび兩人のぼりしが、九兵衛存知人の有りとして、脇指ひとつになつて家來ぶんにて道をいそぎ、廿四日に京都に入りて、右の段を御郡代衆へ御断申上げ、廿五日の朝大坂へくだり着き、成るほど密にたつね見廻り、六月朝日に藤介阿州を發足して、同二日に難波の舟着にあがり、兵右衛門藤介に出で合ひ、是はと勇みをなし、兩人敵打の御帳に付いて、首尾よく御屋敷罷り立ちて、はや其日より、もしも人立ちの所にあるべきかと、道頓堀の芝居の果を心がけ、一人は嵐三右衛門が木戸につき、又一人は大和屋甚兵衛が表に立ち、一人は荒木與次兵衛が追出し太鼓の鳴りしまふまで、田舎らしき人に氣をつけ、或ひは笠のうちに心を配り、出羽平太夫が淨るりのはてたち、又太夫が舞を聞く人、竹田がからくりの見物、雨水が太平記をよめる所、其外酒芝居の小見せ物、水茶屋の客までを吟味して、それより寺社の遊山所を見めぐり、町筋の隣横、人家のするゝくまでも見わたし



けるに、此津の廣き果しなく、いつあふべきも定めがたく、なほ又濱邊々々をさがし、御堂の前を通りけるに、物には天理有り、嶋川本立其日國元にくだりふね、幸ひの日和、夕暮の風待つ人もありて、又舟よりあがり、同道三人に立ちかへりぬ。此船其まゝに出で行き、國里に歸り居らば、時節を待つとも知れ難し。兎角は道理にせめられ、立戻りしを、兵右衛門藤介ほのかに見付けしが、しかとはいまだ極めがたく、殊更つれたる人々の迷惑をかへりみ、足場見合はせけるに、借宿の花屋がうちに入りぬ。いよ／＼見定めて付けこみ、躍りあがりてよろこび、けふこそ恨みの晴し所なれ、すこしもせく事なかれ、爰は往來のしげし、外の人にあやまちなきやうにと申し合ひ、出づるを待つに久しければ、旅宿にふんごみ討つべきといふ。是も病人をあはれみ、今しばらく待請け、大道にして討つべきと、あなたこなたに立ちかくれ、とかく内談をするを、近所の町人ふしぎ立つるもあり。さる小家に入りて、我々は待つ人あるよしいひて水などもらひ、けふの暑さをしのぎ、三人とも立替り／＼様子見せなる草花に心をよする風情して、敵はやがて測るゝ糧粟の如し、我等はさかりの萬浦太刀、風に花をちらすべしと思ふ色外に見えて、後には亭主も異な事とおもひ、目を付けぬれば、すこしまた南のかたへよけて待つに、日影も西にかたふき、お入ツの知らせ太鼓うちぬれば、浮世をぬすみたる男、頭は夏の夜の霜をいただき、緞の肩衣かけて行くも有り、嫁のいやがる祖母もひとつに、七八人づつ、置籠、手拭、あふぎに珠數を持ち添へ、後世の場にも座をあらそひ、我おくれじといそぐ足音をかし。これらは皆行く先近く、佛を細むも斷なり、若盛りの男の隙ならば、あそび所も有るに





無用の御堂まゐり、仔細らしくは見えてから、偽りのやうにおもはれける。世はさまざまと見しうち、大勢の中にまぎれて本立もまゐりける。三人氣をつけて、おさんだん半ばに數多の人を見わけしに、佛前のおそれも無く柿の夏頭巾をきたる頭、來迎柱の順にちらりと見えけるを、北の椽側に廻りて能く見届けしに、嶋川太兵衛に紛れなし。各歡び客殿にまはり、御寺預の人に右の内通して、騒きたまはぬ心得の爲めを申せば、神妙なる附扇を感じける。さりながら御佛前にての事は、御用捨と頼まれければ、其段は請合ひ、然らば裏御門は鎖し固められ、門一つの出入と申しけるに、其段はまた請合ひて、はや裏の門は固めおかれぬ。三人は御門前の町に出で、三方へ手分をせしに、まづ兵右衛門は東への路筋あれば其角に控へたり、藤助は北の方の門を固め、九兵衛は南の門に着きて、是ぞと待請し有様、天を翔る鳥も竄るべきやうなし。さあ今果つると心得べきものなり、あなかしこの壁聞けば、惣立に人の山見ゆる中に、本立編笠冠り出づるを、兵右衛門かけつけ、其方は嶋川太兵衛と見請たり、伯父の敵やらぬぞと言葉をかくれば、本立も聞きもあへず、心得たりと笠ぬぎかけ、手ばしかく刀抜き合せて直し合ひぬ。本立身軽く、天晴はたらきけれども、兵右衛門利の劍もつて開いて切込み、兩方ともに早業、手を盡して戦ふ時に、本立編笠の緒首筋にかかりて、少しははたらきの邪魔にもなりぬ。されども中を飛ぶ如く、かひなくしく切りむすぶ所へ藤介駆け寄り、切つけ、是に大かた利を得て、疊みかけて切り立てける。時に所の町人おどろき、商賣の見世戸をさし騒ぐ。九兵衛是に下知して、さわぎ給ふな、敵うち成ぞ、只今首尾よく討ちとめたるを、おのく見物し給へと、扱も落

付きたる男なり。其内に太兵衛を切りふせ、心靜にとどめをさし、其身を見れば深手淺手二十一ヶ所、さりとは是まではたらき、六月三日の入相の鐘に、御堂のまへの花は散りけると眺めし。兵右衛門は今年廿六歳、血氣さかの時を得たり。藤介は十八歳、前髪さかりの美少、薄手のちしほを自ら拭ひ、太刀を杖につきながら腰掛にやすらひ、三人貌を見合せ、息をつきて、禮義のべ、諸事のつめひらき見るさへ武士の本意といさめば、其身も嬉しさ限りもなく、先づは町に入りて養生いたしぬ。藤介一ヶ所、兵右衛門は五ヶ所の疵、平癒して、當分何の仔細もなく高野の方へ立ちける。

③ 松風ばかりや残るらん脇指

人の心ざしほど各別違ひ有る物はなし。信長公の御時、すのまたの川屋敷とて、夏を棟とつくらせられ、風の松涼しく、御かよひ舟、御寢間のほとりまでさし入り、御物好のおもしろく、絹緞の障子の中に、京女蘭の美しくきを、あまた召しよせられ、折節の御遊興所にあそばしける。中にも月の夜、雪の夜とて、二人の女郎、美形によつて、ひとしほ御不惑のかかり、兩の御手に花紅葉の御寵愛、春秋も是ゆゑ、御樂み深かりき。是をおもふに、兩人姿をあらそひ、御奉公仕りがちの心も有るべき事なるに、世間とは各別の事にして、中々御機嫌のよろしきを、はぢあひ給ひ、殿たびかさなりて、御入りませば、俄に作病して、雪の夜は風そらぐしく申上ぐれば、是をいたはり給ひ、月の夜に入らせ給ひ、明暮御前よろしければ、身にさ







はりあるなどを申して取り籠り、わざと御機嫌をそむき、兩人ともに同じやうに、年をかさねて、御奉公をつかふまつり、女のかかる事はためしもなく心底、前代末聞の名女なり。流石俗性いやしからず、雪の夜は、西國の國主のむすめ、月の夜は、さる貴人の息女なるが、二人ともに仔細あつて、町人の子分に成りて御奉公には出でられしとなり。是をみるに、筋目ほどはづかしきはなし、いやしき者の娘は、無用のりんきに、我氣をなやまし人の身をいため、又の世のくるしみも構はず、悪心胸に絶えず、これらは、なさをかけても、うるさき所あり。又松風とて、尾州鳴海あたりの濱里に、獵人のむすめなるが、浦そだちにはめいよるはしく、古代須磨の蟹の、松風の女には劣るまじき風義なれば、いやしくも御前勤めを望み、是も川屋敷に有りしが、近くは召されながら、ついに御枕をなほさぬ事を恨み、兎角雪の夜月の夜が、あしくも申しての事ならんと、女心に思ひこみ、此二人をねらひ、時節待つうちに、年めづらしき明ぼの、御膳初二日の夜、又川屋敷に御成とて、嶋臺かざりて、御酒宴かさなり、女中もつねよりは酒すごして、前後しらざりき。松風今宵とおもひ定め、萩の戸のかけに身をかため、うちかけ姿は人並に、國づくしの間に居ながら、夜のふけゆく首尾うかがひけるに、此女の立ちふるまひ、ともし火の影に見させられ、局かしの梅垣をひそかに召され、あの菊ながしの衣装の女、懷中に仔細あり、捕へて詮議仕れとの上意を請けて、松風といへる女を、はたくと取りまき、懷中をさがしけるに、あんのごとく肌刀をさして有り。是は曲者なり、いかなる存念あつて、かく御吟味の御前へ、双物はさし給ふぞ、是非いはずしてはおかじ、身の難儀にあ

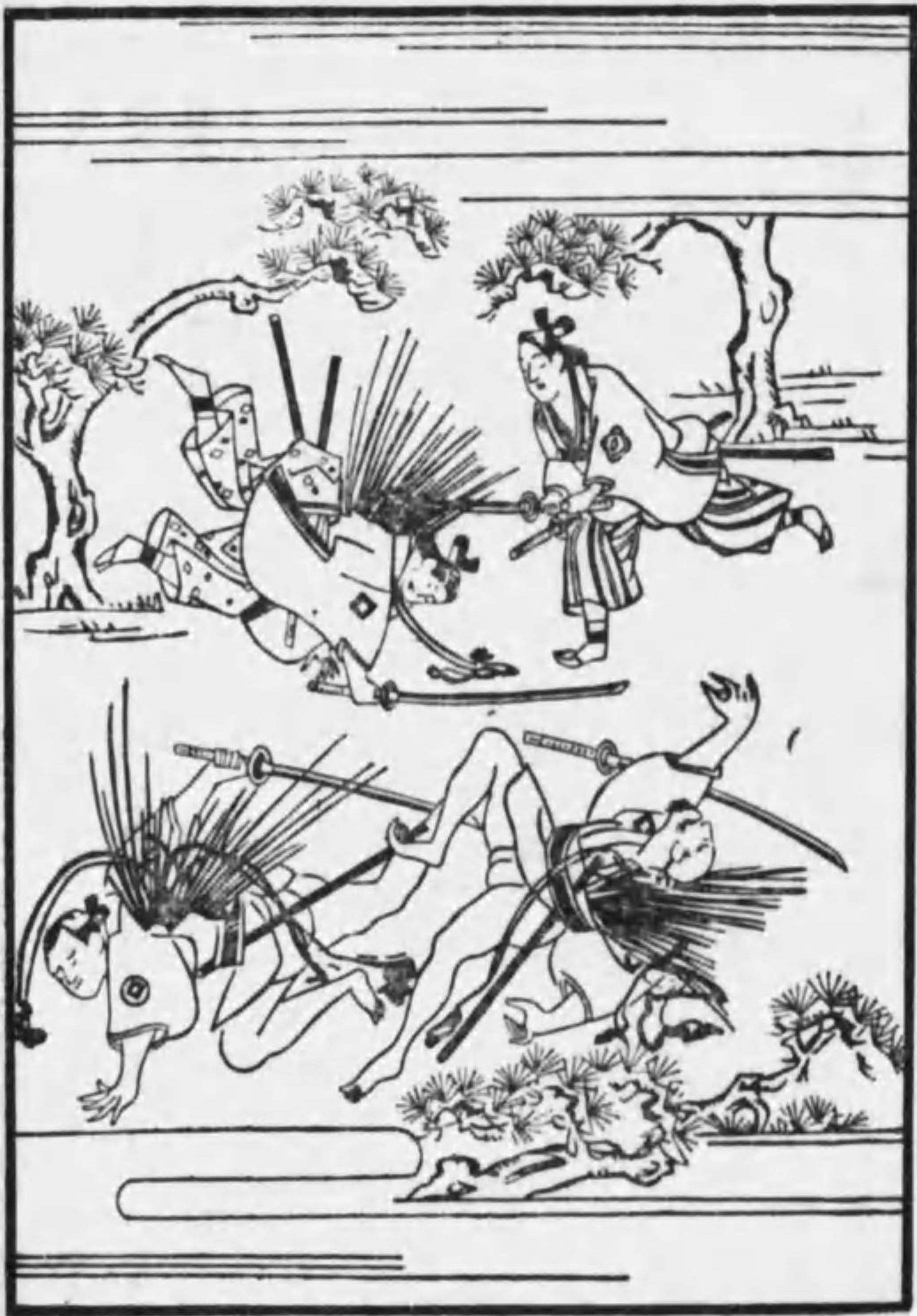
ひ給はぬさきにと、いろ／＼せめても無念とばかりいひて、中々申さるる氣色はなし。是には様子有るべしと、此女の局をさがして見しに、だれ箱にうち入て書置あり。次第をせんさくすれば、月の夜雪の夜、ふたりの女鰐にうらみをふくみ、命をとるべきおもひ立ち、さりとはおそろしき女と、沙汰極りて、みせしめのため、御仕置になりぬ。是我心からの悪事にて一命を捨てける。其後彼の女の執心かよひて、人をなやませ女中は難病請けて是を歎きぬ。いづれの女鰐にも、額に鹿の袋角のやうなる物生出で、美形をかしげに成りて、外科本道も傳へ開きたるためしもなく、此療治にあぐみぬ。表向の番組の役人は、のこらず取殺され、其後は久しく明屋敷にあそばされ置かれしに、有時仰出だされしは、此川屋敷のうちに、一夜を明して見てまゐれと、世にかくれなきふへん者、太平丹藏といへる男と、まぎれもなきおくびやう者、柳田久六、此二人を同役に仰付けられ、申合せて一夜をつとめしに、彼松風の女むかしの形は貌ばかりにのこし、身は三丈あまりの蛇體となつて、二人にとりかかれれば、久六は前後忘れて死に入りけるに、丹藏くみふせて、正しくとらへたりしが、其のまま消えてなかりき。其跡に松風が小脇さしありて、是をしるべに兩人立ち歸り御前へ右のだん／＼言上申せば、御機嫌よろしく、手柄せし丹藏に、千石の御加増、又死に入りたる久六に、千五百石御加増くだし給はれば、御年寄中此上意を合點つかまつらぬやうたい御覽あそばし、丹藏は是ほどの義、仕りかねまじき者なり、又久六は兼ねてしられたる腫病男、主命をおもんじ一夜を勤め、死なずに歸る事、丹藏にはましたるふへんものと仰せられけると也。其後は此御屋形仔細なく、女中の難病も



つねの面に成りぬ。

④ 我子をうち替手

丹後のきれとの文珠に、廿五日のあけぼのより、國中うつつして参詣す。爰に大代傳三郎一子に傳之介十五歳に成りしが、小者一人めしつれて詣でける。かかる折ふし、同じ家中に新座者七尾久八郎と云へる人の子に、八十郎と申せしは、今年十三歳になりしが、是も草履取一人つれて、此所はじめてなれば、浦めづらしく天の橋立の松の葉越しに、月夕影うつるまで、あなたこなたを詠めめぐりて、立歸る折ふし、傳之介に袖すれて、たがひに鞘とがめして、ぬき合せ、はなやかに切むすび、八十郎首尾よく傳之介をうちとめ、前後を見合せ立ちのきける。兩方の小者はあひうちして、むなしくなりぬ。傳之介親これを聞つけ、其所に行きて、せんさくするに、相手の行方しれず、小者も夜中なれば見分けがたく、先づ傳之介死骸を取りかくしけり。八十郎は屋敷に歸り、親にはじめを語れば、是まで歸る處にあらず、最後の覺悟仕れと、書狀添へて八十郎を乗物にて、傳三郎方へつかはし、此ものそれにて、何やうにも御こころまかせと申入る。傳三郎請取り、先づ屋敷に置けば、八十郎が敵とよろこび、母親長刀をとり、かけ寄るを、傳三郎押へ、あれより見事につかはしけるを、むざむざとうつべき仔細なし、ことに我子は十五歳、是は十三にて、武道も各別にまされば、申請けて此家繼にすべし、是同心ならずば、其方離別といはれて、男にしたがふ女心。傳三郎よろこ





び、段々御願ひ申上ぐれば、ためしなきしかた、大望にまかせ、八十郎を傳三郎にたまはり、親子のむすびをなせば、母にも孝をつくし、まことの親には二たびおもてを見あはす事もなく、傳之介と名もあらため、日毎に武の道に心ざし深く、成人の後傳三郎娘とあはせ、むかしの恨みなくて、母もこれに不慮をかけた、大代の家を繼ぎて名をのこしぬ。

武家義理物語 卷三

目録

- 一 發明は瓢箪より出づる  
今の世に油斷のならぬ物は出家言葉とがめは浪に聲有る事
- 二 約束は雪の朝食  
賀茂山の片かけに隠者有り  
 むかしの友の身上咄しの事
- 三 具足着て是見たか  
物の氣にかかるは病中の床  
 陣立の物語いさぎよき事



四 思ひ寄らぬ首途の躰入

親仁殿にけいやくの娘  
執心かよひて助太刀打つ事

五 家中に隠なき蛇嫌ひ

せまじきは武士の座興  
極めては世におそろしき物なき事

① 發明は瓢箪より出づる

近代は武士の身持、心のをさめやう、各別に替れり。むかしは勇を専らにして、命をかるく、すこしの鞘とがめなどいひつりの、無用の喧嘩を取りむすび、其場にて打ちはたし、或は相手を切りふせ、首尾よく立ちのくを、侍の本意のやうに沙汰せしが、是ひとつと道ならず、子細は其主人、自然の役に立てぬべきために、其身相應の知行をあたへ置かれしに、此恩は外になし、自分の事に身を捨つるは、天理にそむく大悪人、いか程の手柄すればとて、是を高名とはいひがたし。御代靜かなる江戸詰の、西國大名の家中に、竹嶋氏の何がし、瀧津氏が何がし、此兩人一所に、御役首尾よく勤めて、生國に歸る。道中申合せて、たがひに機嫌よく、日をかさね、參州岡崎の泊りの夕ぐれ、水風呂をたかせ、二人ともに入仕舞。明衣を着ながら、折ふしの暑さ、しばし端居して涼み、瀧津氏の人、鼻紙喰ひさきて、灸の蓋をこしらへ、慮外ながら是ひとつ腰へと頼む。竹嶋氏其蓋をしてやる時、少しの疵を見付け、何心もなく、是逃疵かといふ。いかに心やすくても、武士はいふまじき事なり。瀧津氏は氣にかけて、此疵は先年狩場のはたらきにて、かくは成りけれども、證據なければ是非なく、兎角國元にぐだり着き、其時分療治いたせし外科をよびて、一通り申、其うへにて打果せば濟む事なりと、心中を極め、其色見せず道を急ぎ、伏見の濱に着きて番所に斷り申し、五十石舟を借りきり、荷物あらためさせ、舟を出せといふ所へ、六十ばかりの侍、十二三の美少をつれて、此







舟に乗りたしといふ。船頭かし切りといへば、残念の貌つきして、彼子が手を引き歸る有様、いかにしても見かねて、逆も先の間は明いて有るなれば、乗せてしんじませいといふ。船頭酒手とよろこび、座をこしらへて乗せけるに、又三十ばかりの旅僧、ゆたん包を提げて、此舟見かけてはしりくるを、是も情にて乗せければ、出家侍二人ともに、數々の御禮を申しつくし、廣き所に自由になり枕をよろこぶ。やうく淀の小橋を過ぎ、水車の夕波おもしろく、是を肴にして吸筒取り出し、二人さし請けもせはしければ、後に乗りたる兩人も呼びまぜて、酒事をかしく成りぬ。彼少人に小話、出家も座興にはやりぶしの小歌、ひとしほ慰みと成る。其後深くともし火の影にして、なほ汲みかはし、いつとなく大盡になし、龍津氏の人にまはれば、いかなく是ではならぬと立ちのかれしに、竹嶋氏袖をひかへ、又逃げ給ふかといはれければ、此言葉聞きとがめ、最前岡崎にてにげ癖といひ、今又堪忍ならずと、刀ひつさげ立ちかかる。竹嶋こころえたりと、そばに置きし刀を取るになかりき。龍津しばらく待ちて、刀見えぬとはふしきなり、心静かにたづね給へ、それまでは相待つといふ。色々僉議するに、いよく見えぬに極りければ、竹嶋覺悟して、是武運のつき一分の立たぬ所なれば、相手取るまでもなし、自書をまづさし留め、後にのりたる侍の申せしは、此刀の有る所、それがしのすゝりやう大かたは違ふまじ、私の望みに申す處、聞き入給はば、其刀出ださせ申すべしといへば、竹嶋は元より、龍津氏も御指圖はもれじと、誓言にて申しける。其刀是なる出家が盗みたるといへば、氣色をかへて、法師をあなどりていふやといかる。彼侍さわがず、其方が酒なかばに、腰より長緒の

付し、へうたんを取り出し、山辨をつみける、其瓢箪ありや、ないにおいては、おのれとせんぎつめられ、せつなく川中に飛び込み、おのれと自滅いたせり。既に其夜も明け、舟さしもどし、瀬々見渡し行くに、鶴野のかれ蘆の中に、小さきへうたん浮きて、流れもあへず見えけるを、是そと取りあげしに、刀のうけに付けて、酒もり半ばに沈め置きしと見えたり。人の氣のつかぬ所を、さりとは名譽の勘者と、彼侍の事を感じける。彼さむらひ、最前刀出たらば頼むと申す願ひは、兩人の中事と首尾能くして別れける。

② 約束は雪の朝食

石川や老の浪立つ影は耻かしと讀み捨、今の都もろき世と見なし、賀茂山に隠れし丈山坊は、俗性歴々のむかしを忘れ、詩歌に氣を移し、其體あらはるる道者なり。さるによつて、心になかなふ友もなし。有時小栗何がしといへる人、是もへつらふ世を見限り、形を替へて京都にのぼり、東武にてしたしく語りし床しさに、この草庵を訪ねて、すぎにし事ども、今の境界の氣散じなる身の程、心にかかる山の端もなく、梢は落葉して、冬氣色のあらは成月を、南おもての竹櫓に、つる居詠めながら語りしが、此客何となく風と立ちて、我は備前の岡山に行く事有りといふ。今宵は是にと留めもせず、勝手次第と別れさまに、又いつ頃か京歸りと聞けば、命あらば、霜月のすゑにと云ふ。然らば廿七日は我心ざしの日なれば、是にて一飯かならずと約束して立行きぬ、兩人ともに世を捨てし、心のままなるは朝を待たぬ旅衣、夜露を肩に結び、枯野枯葉の藤





の森に成る時、海道つづきの人家寝しづまりて、伏見戻りの馬かたの聲絶えて、竹田寺の半夜の鐘の鳴る時、丈山其人の跡をしたひて、しる谷越えにいそがれしに、神無月八日の夜の、月かすかなる松陰より、人の足音せはしきに、立どまりて、丈山かといへば、いかにもみおくりには是までといひけるに、都に友もあまたなれど、心ざしは其方ならではあらじと、立ながら暇乞して別れぬ。其後備前に着きたよりもなく、日數ふりて、十一月廿六日の夜降りし大雪に、寛汲むべき道もなければ、また人貌の見えぬ曙に、丈山竹箒を手づからに、心はありて心なくも、白雪に跡を付けて、踏石のみゆるまでと思ふ折ふし、外面の笹戸を音信れし、嵐の松かせなど聞き耳立つるに、正しく人聲すれば、明けわたる今、小栗何がし、たづねたるに、其さま破紙子ひとつまへ、門に入るより編笠ぬぎて、互の無事を語りあひ、しばらくありて、此たびは寒空に、何としてのほり給ふぞといへば、そなたは忘れ給ふか、霜月廿七日の一飯たべにまかりし、それよくと俄に木葉焼き付け、袖味増ばかりの膳を出だせば、喰仕廻うて其箸も下に置きあへず、又春までは備前に居て、西行が詠め残せし、瀬戸のあけぼの、唐琴の夕暮、晝寝も京よりは心よしとて、取りいそぎてくだりぬ。扱は此人日外かりそめに申しかはせし言葉をたがへず、今朝の一飯喰ふばかりに、はる／＼の備前より京までのぼられるよと、むかしは武士の實有る心底感ぜらし。

③ 具足着て是みたか

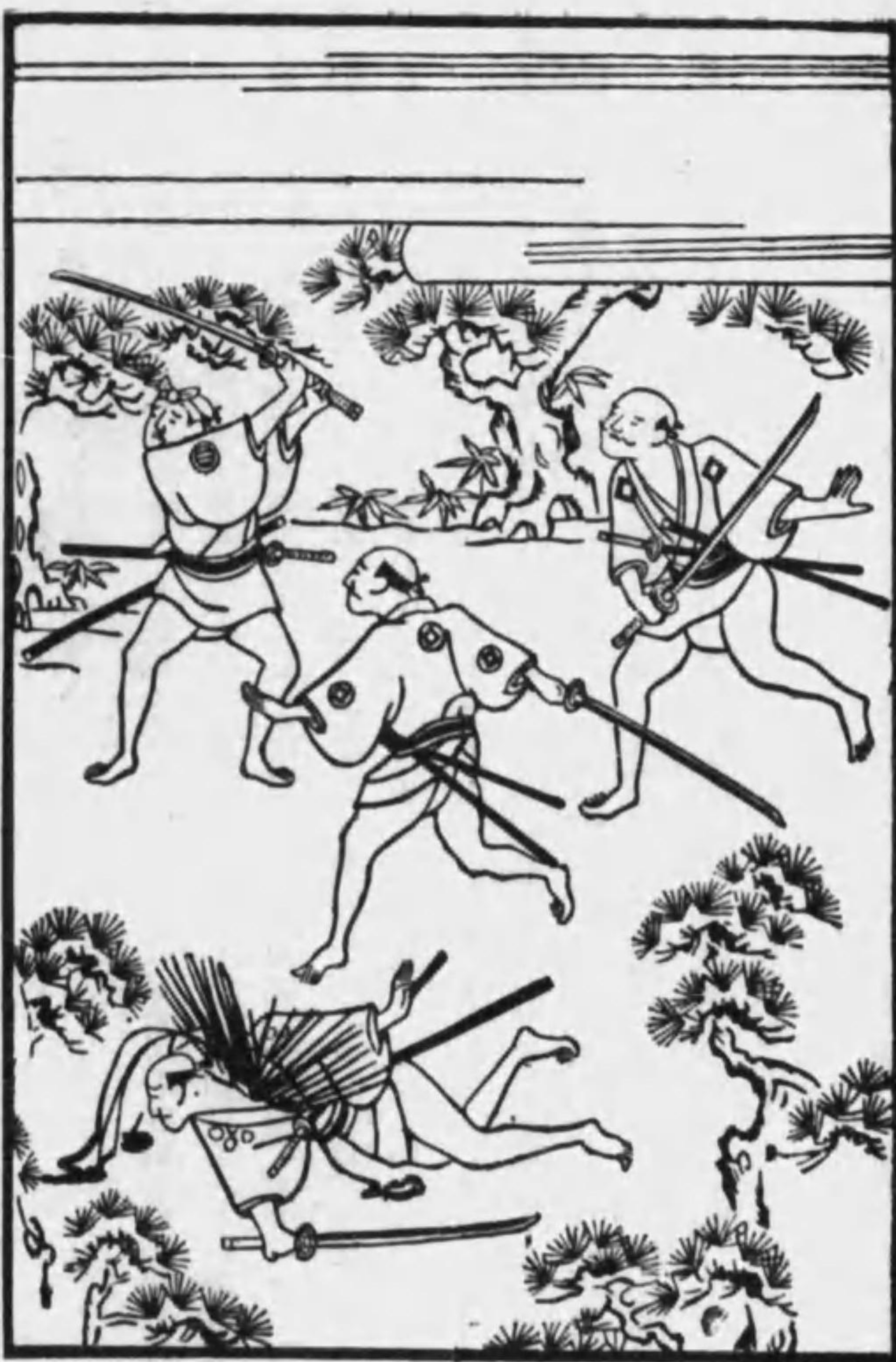


武士は人をあなどる詞、かりにもいふまじき事ぞかし。有時嶋原の後陣を、西國の大名に仰せ付けさせられ、人数を揃へられしに、五十五歳より老人十五以下の小人は赦免有りて、此外物忌病人は各別、残らず出陣の御供觸有りしに、爰に中小姓四人、同じ部屋住ひして勤めし中に、壹人長病にてけふをうき世のかぎり見えしが、いづれもいかめしく軍立の用意とていさむを聞いて、たよりなき枕をあげて、我此節かく煩ひけるは、武運のつきし所なり、先祖具足は譲りおかるる鎧一筋ひつさげて、天晴御馬のさきに立ち御目通りにて高名感状取るべき此たび、扱もく口惜しやと此事いひもやまざれば、おのく耳かしましく思ひながら、一所に住めば是を聞かぬ貌もなりがたく、今もしれぬ病人の無用の願ひはれずとも、息のかよふうちに念佛申し、後世の一大事を心がけ給へ、具足は重き物なれば、是着て死出の山越え御太義なり、かるき經帷子を着給へと、三人小語きて笑へるを聞いて、いよく無念かさなり、今一たびの命を、諸神に立願せしに、不思議に快氣して、手もはたらき足も立つ程になりぬ。時に日外の遺恨やめがたく、段々筆に残し、具足甲を着ながら、鎧取りまはして、相手は三人と名乗りかけ、鎧着ながら、死出の首途といへば、皆々是非なくぬき合せども、思ひ込みたる一念の鎧先、嶋原に行ての働き見せんと、三人ともに突留め、其死骸のうへに腰をかけて、いさぎよき自害。書置の子細、道理至極に沙汰して、此人を惜みぬ。さる程に三人は難言ゆゑに、あたら身をうしなひ、大事の前の用に立たずと、是を笑ひける。

④ おもひもよらぬ首途の聳入

治まる國の守の弓大將に、隼人といへる有り、又鐵炮大將に、外記といへる有り、此兩人當番同日にて語りあひ、おのづからしたしくなりぬ。ある時隼人煩ひて、代番頼み引籠りしに、外記はるくの屋敷より、病中の見舞たびくなり。此心ざし嬉しくおもふ折ふし、又雨風はげしき夕暮に、玄關に来て、けふの機嫌のほどをたづねられしに、此事奥へ申通じけるに、幸ひ氣分もすぐれ、はじめて枕をあげ、病居もあらため、友なづかしき時なるに、外よりひとりも間はねば、ひとしほ淋しく、其御かた御目にかかりたき斷り申し、内證迄通し、御見廻の一禮申しのぶれば、氣色の様子念頃に聞き合せ、すゑく養生の身もち迄申されければ、隼人よるこび、勝手口の杉戸あけさせ、妻女呼び出し、外記に面をあはさせ、親類のかたらひ同前になりぬ、心の闇からぬ武家のつきあひ潔し。南をうけてあかり窓のもとに、藥鍋かけて、十四五と見えし娘の其さま艶なるうちかけ小袖、ゆたかに顔形色つくるともなく、美女に生れつきたる、手づから火ばし取りまはし、煎じやう平生のごとくかと、年寄りたる女にたづねられし、物ごしのやさしく、あまた見えわたりて、腰もとづかひも有るに、是は大事と、孝をつくせし心ばせを見請け、娘の子も又ありたき物ぞ、病家のあつかひは是ぞと、殊勝に頼母しくおもはれ、又戸をさして、外には人なく只ふたり、世の事ども病氣にさはらぬ咄しの次手に、外記は息女の事をうらやみ、私は男子ばかり三人まで持ちけるが、此内一人娘なら







ば、女房どもが言葉にたよりに成りぬべき物をといへば、隼人聞きて、世はかならずおもふまゝならず、我等は只今の姉にして娘ばかり四人あり、女の子御望みならば、奥の御茶のかよいに、やとせ置くべし、琴を好き、歌をよむなどいひて、京だよりに中院殿へつかはしける、雀小弓、名譽に一筋もはづさず、女のいらざる四書迄も讀みて、此ほどは古文聞きに氣をつくしける、すこし娘自慢なれども、何がさて、こなたへならばといへば、外記淺からず悦喜、しからばわたくしの惣領龜之進十九に罷りなれば、向後御自分の子と覺しめしめされと、外には聞く人もなく、祝言いひかはして、屋敷にかへりぬ。外記内證へは、いまだ是を語らず、其明の日の夜半に、同役の方に宵よりはなし居て歸るを、門の片陰に三四人立忍び、兩方よりまん中に取込め、聲をまかけず、闇打。外記こゝろえてぬき合せ、四人を相手にしばし切りたすぶに、覺悟にあらねば、初太刀にいたみ、三人までに手は負はせしが、終によわりてうたれぬ。供は小坊主なれば、屋形にはしりて、此事しらせける。龜之進刀ひつ提げ追ひかけしに、はや行方しれず成りにき。しかも道筋四つにわかれる計の事なれば、さまざまにまよひて、先脇道の根柢を分けて身をもみ、二十町あまりもたづねしに、人影もなく無念の胸をしづめて立歸り、此打手を愈議するに、外記軍法の弟子に隼人有しが、己れがはげみうすく、同學の者に隨意ゆるされしを恨み、同じ悪人をかたらひ、師をうつてのく、天命何國にかがるべしと、身をもだえて進めど、心にまかさぬ主命なれば、敵うちたき願申しあげしに、首尾よく御暇を下し給はり、本意とげての節、先知相違なしと、老中仰せわたされ、上意有がたく、御前を罷り立ち、屋

形にかへらず、母の義は親類に頼み残し、其身は達者なる家來一人めしつれ、外よりの助太刀をさし留め、生國和州を立出づる時、隼人病氣の用捨なくかけつけ、いひわたする仔細有りとして、我屋敷へ龜之進を申し入れ、其方はしり給ふまじ、御父とけいやくしての乞聲なり、貴殿女房は目出度歸宅有るまで、此方にあづかり置くと、娘よび出して、夫婦の盃事をさせて、關和泉守の刀一腰、金子百兩はなむけして、心よく暇乞して別れぬ。兼わたの約束人はしらざりしに、此時にいたつて、隼人の心底を感じける。龜之進は諸國をしのびめぐりて、二とせ過ぎての彌生山、江州の浦里に身を隠して、ある夜是を付け出し、名乗りかけて切り込む。つねづね覺悟して浪人五六人有り合せ、又すけ太刀すれば、龜之進あやふく誦太刀に成りて、武運のつきと口惜しき時、相手ふしぎや後髪ひかれて、残らず打とめ、本人が首器物に入れて、本國に歸りぬ。和州に有りし隼人は、龜之進首尾事明くれ心もとなく、夫婦いひ出し給ふ時、娘嬉しげに笑みて、先月廿九日の夜、敵うたれしにうたがひなし、其仔細はみづから一心に諸神を祈りしに、此めぐみにや、夢ながら其場にゆきて、後詰して残る處なくうちとめさせ、よろこび歸るとみしが、覺めての明の日寢まきの小袖だんだんに切れて血に染りしと、語りも果てずそれを二親に見せければ、心よく龜之進を待ちかねしに、程なく立歸り、御前よろしく數々の御褒美、先知に二百石の御加増有りて、隼人をめされ立出づる時の段々、至極におぼしめされ、縁組の事仰せ付けられ、世のほめ草をなびかせ隼人が家風をふかせける。其後夢物がたりせしに、刻も時もたがはず、目に見ぬ助太刀、思ひあたれる事ありと、其はたらきを語り慰み、兩家ともに



繁昌してかたらひなしけると也。

⑤ 家中に隠れなき蛇嫌ひ

人によつて人喰ふ狼には怖れずして、何の事もなきひき蛙を嫌ふも有り、是其生しやうによるなり。江州田土川たつがわの瀬にかはりて、古代稀なる洪水、岸根の松柳もほれて、田地でんち荒野なれば、其比の國の守まもこれをあはれみ、百姓をすくはせ給ひ、堤ふしんも、里へは掛け給はず、手まへの人足、數千出だして、鋤鎌の音、湖水にひびき渡りて、龍女もおどろくべき多勢たせなり。此奉行役人、家中の利發人りはつじんさゝれて四人立合たちあひし中に、小林氏の何がし、武家かたぎにうまれつきたる人にて、心のたけき事世にすぐれたれども、常に蛇をおそれて、其咄はなを聞くさへ身をちぢめけるに、同じ奉行、小さきくちなはをとらへて、是それへなぐるといへば、忽ち面おもての色へんじて、刀のそりうつて、弓矢入幡やはずなげて見よ、壹寸もそこをのかせじと怒れば、おのゝ中に立ちふさがり、兩方へ押分け、當分何の子細もなく濟みぬ。其後いづれも蛇うちかけんとせし人のもとに行きて、今日の首尾、其方向の心もなき事ながら、先づあやまり給へ、日比おそるゝ人を存じられての座興、よくよく思へばせまじき事なり、兎角此義は堪忍と、言葉をさげ、むかしのごとく語り給へと内證申せば、此男流石侍りきじにて、いかにも此方の卒爾そつじ千萬至極しやくの所なり、おのゝお詞はもれじ、何やうにも頼み入ると申せば、いづれも此一言を聞くから、神妙のいたりなり、此上は其方そのかたの手をさげさす事にあらずと、皆々小林氏





のかり屋に尋ね入り、今日の義はさぞく御腹立たるべしと、いひもはてぬに、されば、厭物を見せかけ、さりとは困りたる所、餘りおそろしさに、刀のそりをうつて見せしが、それは何の心もなし、我等はあれほど恐ろしき物なしと、大笑ひにて此事濟みぬ。心中を色に出ださず、つねの事にして、其時を明けられける、是ぞ發明なる取りさばきと、思案ある人は感じぬ。其後小林氏、世の無常定めがたく、一とせあまりのうちに、妻子残らずうしなひ、何の願ひもたえて、御前よろしく御暇申請け、長劍やめて、身を麻衣にかへて、かくれ家もあるに、人倫のかよひなき、海中のはなれ嶋、笹ふねのたよりに身を越えて、竹生嶋の北なる、竹嶋といふ處に草葺をむすびて、爰を出でぬ事三とせあまりになれり。すぎにし頃したしき人々さそひあはせ、一夜どまりに定め、此嶋へたづねしに、むかしの形はなくて、おこなひすまして、殊勝さかぎりなかりき。取りまぜて昔の事ども、今の身のうへを語り、落葉かき集めて茶をせんじ、有合に米うち込みでもてなされ、其日も浦浪に影うすく、三井の晩鐘かすかに、鶴もいづち飛びうせ、松に嵐のみ、是れより淋しさ又何國にか有るべし。けふは我人十二人、常は庵住、ひとりはよく暮されける。おのづから觀念の南窓も聞く成りて、朽木其まゝの袴を焼けば、此火のうつりにはひ集まる蛇幾かぎりもなく、人を恐るゝともなくひざ懐に入りてうねくり、又は裾より入りけるを、はじめの程は取りのけしが、中々數千筋なれば、おのく氣をなやみて、是はいかなる事ぞとたづねしに、元より此嶋蛇ある所と傳へ聞きて、身をこらして佛心の大願と語られければ、おのく横手をうつて、年頃は嫌はせ給ふに、今此中に住ませ給ふは、悟りの眞實

あらはれけると、夜もすがらうるさく、明くるを待ちかね、おのく城下にたち歸りて、此事を語りぬ。



武家義理物語 卷四

目録

一 なる程ほどかるい縁組えんぐみ

せまき所ところをかりの世よの中なか  
一日いちにちに二度にどのかけ梶原かぢのら増りまの事こと

二 せめては振袖ふりそで着て成りなりこも

元服げんぷくはむかしに歸かへり花はな咲さく  
犬いぬのかよひち心こころざし深ふかき事こと

三 恨うらみの數讀かずよむ永樂えいらく通寶つうほう

是こゝろぞ雨あめの日ひの長物ながものがたり  
幽靈うりやう身みの上うへを訴訟そしやうの事こと



て、住みろき事も忘るゝ程になりぬ。いつまでひとりには、寢覺も淋しかるべしと、春日の里にかよひ商人申し出だして、よき事あり、後家の娘二十三なるが、其形美くしく、しかも利發者にて、母にも孝をつくせば、人皆夫妻の望みあれども、浮世はあきはてしと、此事を取りあへず、さては一たび男持ちけるかと聞くに、さもなくて、花の盛りをいたづらに振袖留めて、人見られたき風情なかりき。然ればわけなき病氣もありやと、内證せんさくするに、さもなく、あたらし日敷をふる程に、こなたの事を語り出だして、當分は浪人衆なるが、すゑなく頼みある御方といへば、母人よりは其娘聞き届けて、其おちめなる侍ならばのぞみなり、先様に御合點あらば、身をまかせ、お茶のかよひ、つかふまつり申すべしと、したしく我にかたりける。手前よろしき人のいへるは取りあへず、貧家を好み参るべしとは、縁なりと、押し付けわざに取り持ち、夫婦にかたらはせけるに、此女男の氣をとりにて、何事もそむかざれば、今の身にして嬉しき限りなく、小升横櫛ならべ枕のちぎり、錦のしとねにまさり、たのしみふたりが中に、何か包む事なく、折ふし春雨しづかにふりて、外より尋ぬる人もなく、寢酒呑みかはして、つまり看に鹽鯛のかしらを、なたふりあげて打割り、いさぎよき貌つきして、此のごとくいづぞ見付け出だしてと、つぶやかるゝを聞きとがめ、何事ぞと女に問はれて、今はかくさず、親の敵此所に立ちのけば、それをうつべき大願と、くわしくかたれば、扱は大事の御身と、なほく念頃につかへて、心中に春日へ立願して、やすくとうち給ふ事を祈りぬ。それより二十日も過ぎて、亭主しのびて、南都のかたへ行くとして、夜の明けがたに宿を出でしが、しばしあつ

て立歸り、件の相手をけふ見付け出したり、是は天理にかなふ所と踊りあがり肌に着込み、くさりの鉢巻、女は刀の目釘をあらため、口に入參をかませ、盃事してうち笑ひ、本望とげ給ひて、追付け歸宅を待ち請くと、此時にいたりて、常とは各別かはりて、かひなくしく、亭主是に力を得て、いさみくゝて立ち出でしが、程なく立ち歸りて、首尾残る所なく、敵は是そと其首手桶に入れて、刺蓋にて隠し、あたりの人此事をしらず。夫婦さしのぞけば、撫でつけあたまの大男十面つくり、目を見ひらき、無念貌にふくませける。是門田番蔵とて、日頃は武の達者なるが、利劍にとめける。先祖蔵人殿へ手向け奉ると、血刀添へて観念するをみて、此女泪に袖をひたしぬ。亭主此有さま合點ゆかず、扱は此首によしみありと見えける、ありのまゝに語れと、男は俄に心置きて夫婦の間に替りぬ。女はすこしも動轉せず、只何心もなし、手ばしかき御働きを嬉しさのあまりと、不斷の機嫌になほせど、男一圓同心せず、その仔細を是非に申せと聞きかゝる。女迷惑して語りける、わたくしも親の敵を眼前に見ながら、女の身のかなしさは、無念の年月をおくりぬ、此度かくおぬしさまとかたらひけるも、御心底を見定め、嬉しや此事を頼み、討ちてもらはんとおもひ入りし、折ふし敵ありとの御物語、それにさし合せては申しかねしに、けふ首尾よくかたせ給へば、我がかたきもあのごとくに、うち取りたきよと、心底外にあらはれ、お目にあまれるなみだの袖、かゝる目出たき折ふし、萬事は御ゆるし給はれといふ。男も聞きもあへず、今は我がためにも親なれば、其まゝに置くべきやと、此はじめをつどくゝに語らせて聞き届け、其者は今ほど西の京といへる所にまぎれ、白坂外記とい







へる名をかへ、天原流波とよびて、面むきは手習の指南して、今も武藝おこたらぬよし語れば、亭主様子をのみ込み、茶漬食をくひて、つい宿を出で、行きしが、其日の七つさがりに、此首もうちて歸り、女にみすれば、是れぞこれよ、左のかたの額に切痕、昔にかはらぬ貌ばせ、憎やと死首ながら、守り刀を切りつけ、又此恩わすれ難しと喜び、今は眞言泪にくれぬ。一日に敵二人までうち取る事、前代ためしなきはたらきなり。此親類のとがめも有るべしと、跡の事は最前のたばこ切にまかせ、奈良にまします母をも一所に引越し、其夜のうちに所を立退、本國にくだりぬ。

(二) せめては振袖着て成さも

伏見の城山は、桃林に牛馬の捨置きとはなりぬ。むかし此の處の警昌、諸國の大名屋しきたちつよきし時、和州の内の城主にめしつかはれし、室田猪之介といへるは、その頃の美少にして、形よわくとして、心ざしつよく、さながら女かとうたがはれ、秀吉公の御女藤の花か、おちよぼか、此二人の艶なる風俗にも見まがふ程なり。主人も一入ふびんかかりて、外の前髪よりは、御寮間ちかうめされ、出頭時を得て人もうらやむ仕合せなるに、いかなる者か是をそねみて、戀によせての落書、猪之介身のうへの事、あらはにしるし、御目通に張付け置きしを、横目の役人見付け、善悪事包まず申あぐべき神文なれば、此段言上申せば、御愈もとげられず、一筋に御腹立あそばし、猪之介には何の仔細も仰渡されず、御國元へつかはされ、母親に

御預けあそばされ、屋敷は閉門申し付くべしと、岡澤三之進といへる留守居役人に、急度仰付けられ、御意の通りに、門を閉ぢきびしく番を付け、懸類かぎつて、出入かたく改めける。猪之介親子何とも御料の程わきまへがたく、切腹すべきやうもなく、是非もなき仕合せにて、取籠りしが、下々はわたり奉公の者なれば、かかる時節を見捨てて、身の大事を思ひやりて、ひとりも残らず立ちのきぬれば、世のうき時にひとしほかなしく、朝夕の煙も絶えなく、母は子の事いたましく、手なれぬ米をかき給へば、猪之介はみるもかなしく、せめては井の水を釣りあげ、摺鉢の音さへしのびて、せつなきけふを暮らし、明日の事をも命あるゆゑ、なさけなく、日をかさね、夜をかぞへ、月も覺えず、年もわすれ、軒端の梅を曆に、さては春にも成りけるかとおどろき、只現に動き、夢に物いふこちして過しぬ。今はたくはへもつきて、おのづからかぎりの身とせまるを覺悟して、親子最期のいとまごひ、これらは武運のつきぞかし、我は女の身自害の見くるしきも、死後にも人もゆるすべし、汝は後悔ある身なれば、母より先に死貌を見るべし、さあ、今ぞ思ひのこすなど、いさめられしに、猪之介御意にしたがひ、そそけし髪を撫でつけて、随分ゆたかにかしまり、諸肌ぬぎて、小脇さしの鞆ぬきはなつ處へ、人の手飼と見えて、まだら犬にむらさきの首玉入れて、紙袋ふたつ左右へわけてむすび付けられ、物いはぬばかり尾をふりて、ちかく寄りけるほどに、ふしぎに思ひ、母これを明けて見られしに、ひとつの袋には白米入れて、命はかるしと書き付け、又ひとつには種々の菓子を入れ、義は重しと書きしるして、主はたれともしらすおくられる。是に親子の人思案して、此心ざ



しに相果つべきは、いつとても成る事なり、是は定めて諸親類の、誰かあはれみと知られたり、此犬は見しりもなきと、脊筋を撫でさすれば、嬉しげに立歸る。其行衛をみるに、藪疊の破れよりくゞりぬ。其後はあけぼの夕暮に人の氣を付けぬ折ふし、萬づの食物をはこぶ事、はや二とせにあまりぬ。光陰矢のごとし、弓馬の家すたりて、五とせに今少しの程こそたらね、なか／＼の閉門たいくつして、病氣もさしをこり、やみやみと此まま果てたん事をなげきしに、諸神御めぐみにや、殿御心ざしの有時、猪之介事おぼしめし出だされ、御とがめ御しやめんあそばされしに、有り難き次第と御請を申し上げ、次手ながら御訴訟申上ぐる、逆もの御事に、只今迄閉門仰せ付けられしお料の段々仰せ渡され、御ゆるしに預り申したき願ひ、大殿此義至極に覺しめされ、最前の落書ひそかにつかはされしに、しばらく思案をめぐらし、兼ねてふあひの仲間、豊浦浪之丞そねみにて有るべき事をせんぎ仕出だし、則筆者は町家に身を隠し、兵法の指南をせし浪人、岩坂金八に極まつて、兩人ともに切腹うち首に仰付けられ、猪之介長々の難儀ふびんに覺しめされ、げんぶく仰せ付けられ、貳百石の御加増あつて、御判役承り、出頭むかしよりは今ぞかし。世の聞え、面目すぎで、二たび國元に歸宅して、一門残らず參會の上にて、犬をかよはせられしころばせの方をたづねける、此人更にしれがたし。何とも合點ゆかず、さまざま氣をつくしぬ。有時屋形町の末々まで見めぐりに、日比かよひし犬のいねふりて、さる屋敷の門前に見えける。是はと嬉しく立寄り、いかなる御方の宅そとたづねけるに、岡崎四平といへる大番頭の人なり。おもへば此人は我に執心かけられし事、御前を勤めし





うちにも、すこしは忘れもやらず、殊更此たびの心づかひ、一命にかへても、此恩を報じがたし、今でも此人の身の上下の出来なは、神以て我ひかじと心底に偽りなし。其夜ひそかに人つかはし、四平を手前に申し請け、親子ともに涙をむすび、嬉しさ數々の禮儀をのべ、母は勝手に入らせ給へば、其跡はしめやかに語り、まづもつて犬のかよひの事をたづねけるに、殿御國人の時分はこなたにあこがれ、夜々屋形のうらまで立ちしのび、かなは胸を晴らしてかへるに、いつとなく其大宿よりつきて、戀の道をわきまへけるとかたれば、猪之助赤面して、是非もなや、姿の花の枝を折られ、今の古木見せけるも口惜しけれど、もはや歸らぬむかしなり、心は替らぬ我なれば、いふも恥かしけれど、見捨てさせ給ふなど、常の居間に入りて、着ぶるしたる脇明小袖に身を替へ、枕ひとつに貳人の夢をむすびぬ。其年は猪之介二十二歳成に、たはぶれのあまりに、廿一歳と年のほどひとつかくされしは、武士にはなき事ながら、懸路なれば憎まれず、これぞ衆道しゆどうのまことなる心ざしぞかし。

③ 恨の數讀む永樂通寶

とらの年にはかならず洪水と語り傳へり。むかし駿河の國、安部川のわたり絶えて、十日の雨やどりして、旅人の難儀せし事有り。其比は諸國の大名屋形たちつづきて、商賈人は抓み取りありて、其時代小判とぼしからず、渡世をなしける。爰に北國の城主の中屋敷、はるか府中をはなれ、はるか西のかたの野末にありし

が、是には一年替りの國主の長屋住ひ、千塚太郎右衛門といへるかたへ、雲馬茂介といふ人、降りつづく五月雨の淋しさにたよりて、世の咄しもかさなる雲間に入日の影わづかに、こがらしの森移ろひ、けふこそ氣も晴れけると、遠山ひさしふりにて詠め、傘ほせ、庭の溜り水かへ出だせなど、小者に申し付けしに、此水竹縁の下にほそく流れ込み、千丈の堤蟻穴より崩るが如く、見しうちにめいりて、柱もゆがみ壁もこぼれ、是はふしぎの事ぞと、此土中ころもとなく、鋤鎌はやめ上土のければ、死人形もくづれず見えける。貳人念比に見届け、是は年ふりたる死骨にあらず、およそ四五年の埋みものなり、いかさま仔細有るべしと、先兩人心を合せ内談して、とかく御役人衆送申入るべし、折ふし参りあはされ、見えわたりたる通り證人と申せば、茂介聞届け、いかにも一所に上屋敷へまるるべし、私宅に歸れば、時節うつれば、いざ是より同道申すべしとつれ立ち、御門に至れば、役人錠しめける。兩人斷りを申し、私の用ならず、老中まで申し上ぐる事ぞといへば、何事にもいたせ、今晚御門は明けがたし、各ははじめて此御屋敷入り、ことに此程御國より御越なれば、かやうにきびしく仕る仔細を御存知あるまじ、去々年の十二月廿三日に錢寶御門は入りしが、其後出でざれば、色々御靈議あそばしけるに、其有所しがたし、親類是を御歎き申上げ、世の取沙汰もよろしからず、ふびんや立鶴の布子着て毎日其男をみしに、金商人ゆゑころされけるや、其以後かく改め申すと語れば、いかにもく其義ならば明日の事にと又兩人長屋に立歸り、彼死人をみるに、立鶴の着物、是うたがひなし。扱其年頃長屋に住みける人をせんさくすれば、谷淵長六とて、家中廣きほうばいにも別して兩





人語り合ひ、殊更太郎右衛門とは縁類なれば、此事ひとしほ迷惑して、一思案の貌色、茂介見届け、此段は御自分と拙者の心にて済む事と申せば、太郎右衛門満足して、然らば隠密に仕れと、下々の口を閉ぢ、茂介は夜更にて我宿に歸りぬ。其夜も明けて五ツ時分御上屋敷より横目衆参られ、此前しれざりし錢寶の御せんさく在るべき御事と、ひそかに沙汰在りしを、太郎右衛門聞き付け、其まゝ茂介宅にかけ入り、夜前申し合せし甲斐もなく、さりとは卑怯なる心底、かく在るべき事にはあらず、まつたくそこを立たさじといふ。茂介騒がず、此段にいひわけにはあらず、神以てそれがし他言申せしにはあらず、されども外より申すべき人なし、是程分別にあたはざる事なり、是非もなき仕合せ、いざ時刻うつさじと茂介廿七歳、太郎右衛門二十三、たがひに聲かけて相うちにして、首尾残る處なく浮世の限りをみせける。此事また下々に御愈議あり、右の次第委細にしれける。此段茂介申せしにはあらず、御上屋敷の小玄關へ男一人あらはれ、わたくし事去々年しめごろしにあへる錢屋なにがし、今宵からだを掘出だされて、嬉しや十三兩の小判を御取歸してといふかと聞きしが、忽ち見えす成りにき、是よりの御せんぎなり。さては其錢寶が亡靈なるべしと此沙汰になりぬ。此事國元に聞え、谷淵長六が下々の仕業には極まれども、太郎右衛門茂介兩人が心底を聞きて、其身ものがれず、今年廿五歳の夏の夜の夢物語とは成りける。

④ 丸綿かつきて偽りの世渡り



房付枕も定めず、きのふ夢、けふは又思ひ川の瀬に替りゆく流れとて、いとしからぬ男に身をこらし、まんなら偽りの泪、待つも別れもそれからそれまで、いづれの女か勤めそめて、うき年おくるさへくるしきに、此程の遊女はむかしのごとく、かぶき者にはあらず、まづしき親の渡世のたよりに、身を賣られて、身を賣る女郎とは成りぬ。惣べていやしき女にもあらず、是に定る筋目にもなく、時節にしたがひかくこそなれ。過ぎにし關が原陣に高名其隠れなき、何の守とかやの孫娘、父浪人の身と成り、今の都北の山里、物のわびしき住ひ、煙の種に拾ひあつめし落葉の宿、名も埋れ木の風にいたみ、程なく病死あそばしての後、母のいたはりにて、十二の春の花にたとへて、小櫻と名によばれ、里のあげまきにむすびし金水引も、今の風儀の髪形になれば、ひなびたれども都の人も見かへる程になれり。有時諸國へ人肝煎の口鼻尋ね來り、此息女つねならねば、あたら美形をかくいたづらになし給ふもよしなし、幸ひ難波の大名の御母儀さまより、うるはしき御そばつかひ御尋ねにて、きのふもさるかたより、烏帽子装束を着させ給ふ人の息女さへ、行く末おぼしめしてつかはされける、此お子もいかなる武家の御前にならせ給ふもしれまじと、物馴れしが言葉にとを含ませていひければ、母人同心ましくて、娘が後の身のためとや、それをこそ願ひなれ、萬事はおぬしさま頼むよし、こつちへまかせ給へ、其明の日早く乗物さしむけ、御供申すと物事おもくいひなし、是は當座の御心付と、小袖に金判十兩、母に渡して、隣家の野夫をまねき、代筆に證文かゝせ、別れは親子の泪なるを、やがて正月には養父入とて、あはせらるゝも程なしと、息女を引取り、すぐに伏見の川舟に移し、





岸根つづきの里めづらしく、浪の流れの身と成る事は、浮鳥かたらず、口鼻もだまりて、大坂の色町、佐渡嶋屋の何がしの宿に是をわたして、其女房は京に歸りぬ。小櫻は何の差別もなく、遊女禿の大勢見えわたりて、しやれたる姿を嬉しく勤め、かへりの氣晴しに貝合、歌かるた取に花車のまじはりよろづにかしこく、然も心ざし悪まれず、兎角此子に松に極めてなるべき者と、すゑたのもしくおもひ、身の欲ながら外より大事に掛けしに、それまでは遊女に成るともおもはざりしに、小林といへる禿を、松山さまといはせて天職に仕立て、明日より水あげに出すといふより、我身の事と覺悟して、遊女に成るべき事口惜しく、それより作病おこし、あたゆる藥をのますして、食物を断ちて、親かたの歎きをかへりみず、無言になつて、人見ることもうるさく、眼をふさぎ、卯月のすゑより床にふして、五月闇のころ、まことに心も闇くなりぬ。人々是をかなしく、其身流れにはなさじ、無事の姿を見立、親里におくりまゐらせんといへど、今更それをも聞入れずして、我も武士の子成るものと、これを名残の一言にして、太夫に成る子を惜しやさて。



武家義理物語 卷五

目録

- 一 大工が拾ふ曙のかね  
美女の俄米屋もをかし  
相生みずじ縁組の事
- 二 同じ子ながら捨てたり抱いたり  
心ざしふかき女おもはく  
情しる武の道の事
- 三 人の言葉の末みだがよい  
花と花とのさかりくらべ  
最期に分別出づる事



四 申し合せし事もむなしき刀

同じ心もかはる世の中

武士は悪名残しがたき事

五 身がなニツ二人の男に

かたきにあひぼれの女郎

よく／＼思ひ入りて最期極むる事

① 大工が拾ふ明ほのゝかね

石田治部少輔世ざかりに、花園といへる艶女を、都よりまねき寄せ、寝間の友とも定めて、ふびんをかけさせられしうちに、籠城ちかづきぬれば、身の果つべき事をいたはらせ給ひ、何となく京の親元へおくりかへさせ給へり。其後主君討死あそばしけると、世の沙汰を聞きながら、元町人の娘なれば、御跡をしたひて命を捨ててもやらず、身も墨ころもなして、其御方吊らふべき、心ざしを極めしに、是も母の親なげきて、無理に世を立てさせける、父の仕馴れし商賣、わづかなる米屋を、一條堀川のほとりにて、親子もろともにけふを暮し、すゑ／＼はいかなる人にも入縁を取るべき願ひなるに、世間のさがなく、此宿を治部米屋といひけるほどに、家主聞くを憚かりて、此宿をかへさせける。其さきも又聞傳へて追出し、ひろき都に身をせばめて、はや二十五ヶ所かはりて、さりとて難儀にあひぬ。せんかたなく伏見の片陰に草葺を才覺して、其處を又人にしらるゝうたてく、京海道を朝とく諸道具をはこばせけるに、高家に在りし時、くだし給はりし金銀大分たくはへしを、荷物の數々わけ入れ置きしに、銀四貫目寝道具のうちへ人しれず置きけるに、やとひ人肩を揃へて、道をいそぎしに、松原通因幡やくしの前にて、暫く休みしが、此銀夜着の袖よりぬけ落ちて、堀のはたにあるともしらず、皆々伏見にゆきける。其朝大宮の九左衛門とて、家大工有りしが、この男むかしは筑後にて歴々の武士なりけるが、義理につまりて牢人して、思ひの外なる職人と身はならはしに



て、渡世はかしこく、今朝の初霜いとはず、上京長者町へ毎日かよひしに、自然と此銀を拾ひ、ひそかに宿に歸り、我が女房はじめをかたり、是仕合せの天理なり、親類かぎつて此沙汰する事なかれと能く／＼いひふくめて、其身はつねにかはらず、細工所にゆきぬ。其跡にて女つれあひをうたがひ出し、大分の銀おとし有るべき仔細なし、いかなる難儀にあふべきも定めがたし、我身の外、一門の迷惑と、女心のはかなく、此事を家主に内證かたれば、其女のいふ事なれば、おどろく断りぞかし。宿老に通して一町の沙汰と成り、九左衛門隠し置く所、曲もの也、とかく我々の愚智にはおよびがたし、近道に御公儀へ申し上ぐるに極め、九左衛門に僉議をするに、幾たびもかはらず拾ふたるよし申せば、いよいよ後日をおそれ、此段言上申せば、七口に高札立てさせられ、此落し手出でぬ時は、九左衛門にせんぎ有り、それまでは一町へ御預けなされける。其二三日過ぎて、治部米屋の親子御訴訟に罷出で、おとしたる袋の中の品々を申上げ、此銀主出でざれば、拾ひて迷惑いたさるゝのよし、此難助けたき願ひに申上ぐる、其銀は一たび落し候物なれば、ひろはれたる人にとらせ申したき望み、前代なき事と、女氣に欲のはなれ、かんぜさせられ、はじめをたんだへさせ給ひ、流石石田の家にめしつかはれし程こそあれと、御褒美あそばし、其後かの九左衛門めしよせられ、まづ銀主出でて其方が仕合せなり、もししれざる時は、思ひよらざる難にあふべし、もと此あやふき事は、其方が女房、身のうへばかり思ひ、夫婦のよしみかつてなし、このうへにも以前のごとく、つれそふかと御たづね有りし時、九左衛門御意有りがたく涙にくれて、かゝる不心中の女、何とてすゑ頼みがたし、御

節よりすぐにいとまとらすよし申し上ぐる。さもこそ有るべけれ、夫の身の上を歎かざる、悪人に極る者なり。又治部米屋の親子に仰出だされしは、其方ども女ばかりにて流浪なするなれば、あの九左衛門を聲として、是に萬事を頼むべし、拾ひし三貫目は、則ち數銀なるべしと、御意親子とも御請けを申せば、一町の衆中是を取持ち、大工は米屋にかはつた入聲。たがひにむかしを語れば、女は武士の家そだち、男は武士にまぎれなく、さもしき心ざしなくて、此母に孝をつくし、家榮えて住みけるとなり。

② 同じ子ながら捨てたり抱いたり

江州姉川合戦、永祿十二年六月廿九日に敵味方暫く矢留をして、つかれをはらす時、陣小屋の片陰より、夕日の移りに見る人の目を忍び落ち行く佛、遠見の役人、木田丹後旗の下より是を見付けて、笹しげれる野道を横手に追かけ、其ほどちかくなれば、たくましき女のひとつ刀をさして、七ツばかりの男子をあゆませ、又ひとりはいまだ乳房をくはへし子を、ふところに抱いて、はしり行きしが、若者急に見えし時、抱たる乳のみ子を、用捨もなくなげやりて、あゆむ子を肩にひっかけ、二町あまりも逃のびし。捨られし子の泣くを此中にもあはれみ、取あげて見しに、美しくき娘なり。此子を抱くものあれば、先を追かくるも有りて、けはしく成る時、柳の葉がくれに彼子をおろし、双物ぬきかさし男まさりの勢、さりとは氣なげなり。されども大勢かけあはせければ、のがるべきやうなし。中にも物に馴たる人の下知して、其女の命取る事なかれと





聲かくる。いづれもすこしの手は負ながら、終に生どり、何さま仔細有るべき女と、あらくあたらず、主人の陣處に引出し、段々はじめを申上ぐれば、丹後此女にむかひ、いかなる者の子なるぞ、有のまゝに申せと、ひそかにたづね給へども、只口惜やとばかりいひて、さしうつむきて涙をこぼし、兎角の事を申さねば、いよ／＼不思議に存じ、もし大將の子息の事も、しばしためしてみらうちに、七つばかりの子が、母の袖にすがりて、とよさまの所へいいたいといふにぞ、扱は末々の子とはしれける。汝何もの妻なるぞ、こゝろざしにやさしき所あれば、了簡して一命を助くべし、殊更一人の子を捨やうに聞く事有り、ふびんはいづれか替らざる物なるに、乳をのめるを捨て、歩めるをいたはりしは、頓て用にも立、身のためにおもふゆゑかと問ひ給へば、時に此の女、貌さしあげ、心に有りのまゝを語りける。我夫は竹橋甚九郎とて、昔は小知もとれる者なりしが、浪人して後此里の野夫なり、以前の乗馬を牛に引きかへ、鑊は鐵の柄となしてものつくりせしに、此の度御下の百姓迄もかりこまれしが、夜前夫のいひ聞かせけるは、此軍迎も勝手に成りがたし、我は最期を爰に極む。汝一所に命を捨てて何のせんなし、急ぎ立ちのき、我とおもひかへて、二人の子を随分成人致させ、名跡をつがせよと、さいさん頼まれけるに、是非もなく別れて、かく摺とは成りける。又妹を捨てて兄を助くる仔細は、二人ともに夫婦の中の子にはあらず、年月かさねても、子孫のなきを物佗しく、親類のうちより養ひ得たり、兄は夫の甥なり、妹はわれらが姪なれば、相果てし跡にても、身をおもふ取り沙汰にあへるは、女ながら口惜しきと、義理つまれる心底を深く感じ、人しらず脇道より下人に



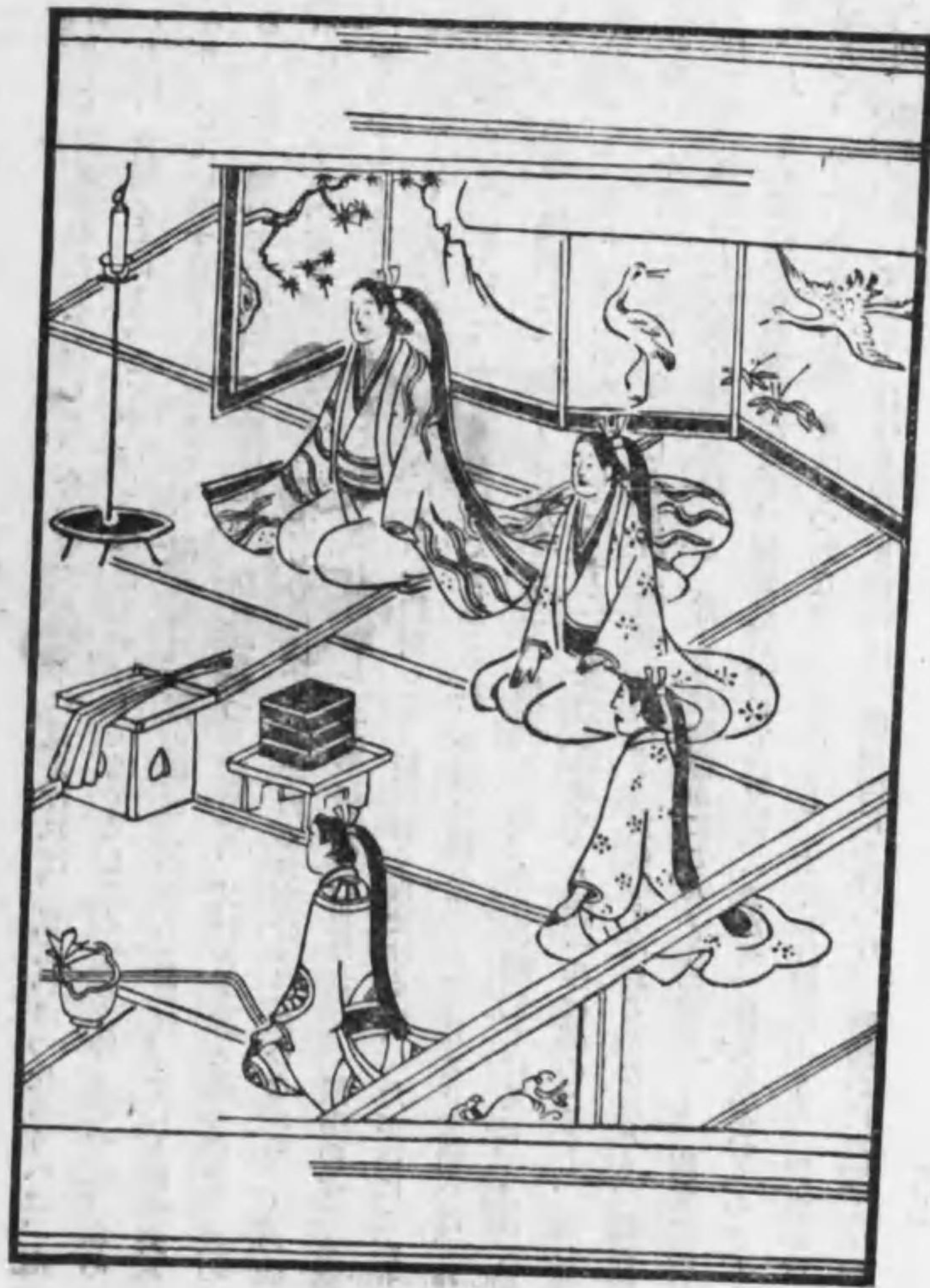
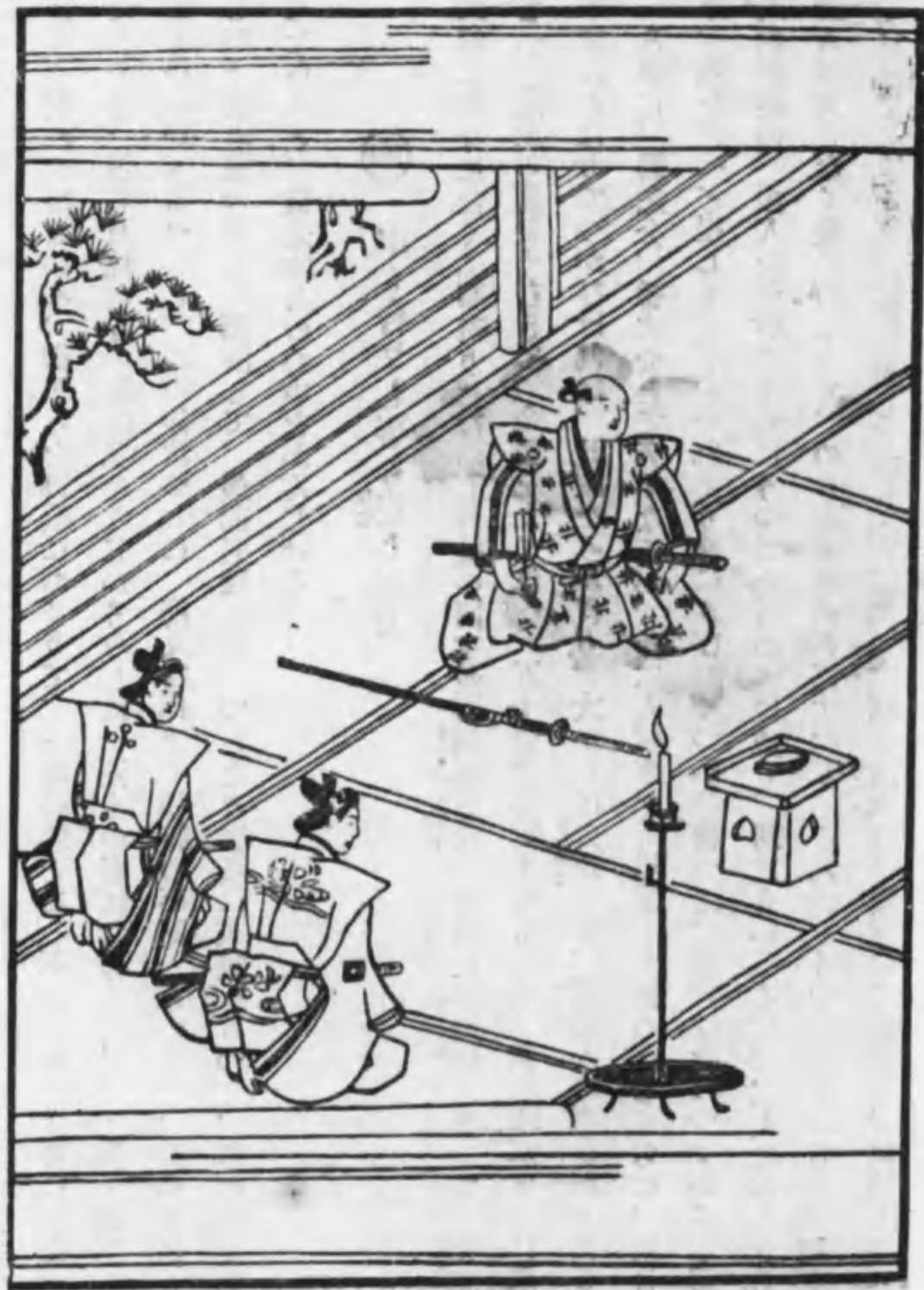
おくらせ、命を助け給へり。

③ 人の言葉の末みだがよい

物には類の集る道理あり。むかし讃州の城主につかへて、細田梅丸とて、南枝若衆の美花、物ごしは初音鳥も奪はれ、ちうの聲も出でず、まことに梅の風大袖にもれて、行き違へるさへ、人に魂なかりき。さるによつて、主君殊更の御寵愛ふかく、春にはあへど、此梅の匂ひ聞く事もならず、見る事猶たへたり。されども人に盛りのかぎりあつて、片手の指を四たびをれる年の名残に、元服仰せ付けられ、前髪跡をみしに、美男京細工の物いはざる業平に同じ。又岡尾新六といへる人の娘に、小吟とて十四歳になれり。いかなる生れかはりにや、かくも美形なる女の世に有る事ぞかし。いにしへの美人揃は見ぬ世の傳へ、よもや是れほど有るべからず。ひとつくいふにたらず、いづれか身のうちに、毛頭ふそくはなかりき。此男女を牛若丸淨瑠璃御前のごとく、世上よりいひなして、夫婦のかたらひせしと、取沙汰いたしぬ。娘の年も縁付ころなれば、あなたこなたよりいひいれけるは、うるはしき姿なる徳ぞかし。此息女、見もせぬ梅丸思ひこがれ、男をもたば此人ぞと、一筋に極めて、外への縁組中々親たる人の心をそむき、何とも是にあぐみて、此事打捨ておかれぬ。また梅丸も小吟をみぬ戀して、外よりの縁は取りあへず、年月過ぎしを或る人聞き付け、これは似合ひたる事と取持ち、娘の親岡尾新六に内証申せば、早速同心すべき事成るに、存じ寄る仔細あれば、

かねて此方より御返事申し上ぐべしと、合點せざる様子に見えければ、私あいさつ仕るうへは、御前も首尾よく申し上げ、世間ともよろしくすべし、聲にあそばしてもくるまじき侍と申せば、私の聲には過ぎものなり、じたい申すはよの義にあらず、梅丸事は大殿の御恩ふかき人なれば、今にも御死去あれば、御供申さるゝ心底、兼ねての覺悟と見請けたり、然ればいつと定めず、又ひとり身と成る事を、親のふびんにて、愚かに行くすゑの事を案じけると、武士の心にはすこし手ぬるき申分とは思ひながら、人の親の身となりては、世のそしりをかまはず、まよふも断りぞかし。其事は無常の世なれば、無事の身にも愁は有るなり、此縁是非にとすゝめければ、其人にまかせ約束して、姫をおくらせけるに、たがひにこがれし中なれば、ふかく契をこめしうちに、大殿御病氣にならせられ、次第に頼みすくなく見えさせ給へば、今更おどろく事もなく、追腹の覺悟して、妻にも此事かたりて、道理をつめ、今生の暇乞しけるに、ふかく歎きぬべき事を思ひやりて、ひとしほふびんなりに、すこしも其氣色なく、人間一生は夢のごとし、殊に武の家に生まれさせ給ひ、主君のために一命をしませ給ふ御事にあらず、女の申すはおろかなれども、御最期いさぎよくあそばされ、名をすゑの世に残させ給へと、常よりは物靜かにこんくの盃事して、梅丸に満足いたさせ、て後に、わたくし事は女心の定めがたし、御最期の跡にては又縁にまかせ、後夫を求むる心ざしといへば、梅丸聞きて、思ひの外なる心底、女ほどつれなきものはなしと、すこしは恨みふくみ、眼色かはりて、其座を立つ時、御氣色俄にせまり、只今と告げきたれば、御城内にかけつけ、物靜かに拜顔して御言葉をかは







し、かぎりの別れをかなしみ、御からを御墓におくりて、一時の煙となし奉り、物の見事に切腹の首尾のこる所はなかりき。流石日比の身の取置世をみじかみしに、逆もの事に女房もたれずば能き事なるに、残りし女のおもひふかゝるべしと、この沙汰せしに、梅丸首尾よく切腹の事聞くといなや、腹かき切り、夫の供をいたしぬ。書置段々見し人感涙して、最前名残の時、つれなき言葉に夫氣をもつて、妻の事をおもひ切らするためならんと、彼是此人の心中をかんじける。

④ 申し合せし事も空しき刀

悪心は眼前に其身にむくふ事有り。むかし丹後の國主長岡幽齋藤孝の家中に市崎猪六郎とて、大酒を好み作病をかまへ、武士の道をそむきて、金銀をたくはへ、五十餘歳迄妻子ももたず、世を我がまゝに暮しぬ。下人用捨も常にかはりてつかひければ、此家をみかぎり、大かたは欠落して、朝暮人の事をかゞれし。手ぢかうつかへる者に、勝之介、番之介とて若年なるが、此一人何事をも堪忍して勤めけるうちに、毎日主人恨みかさなり、暇を乞へど出しもせず、それより殊にきびしくつかひ給へば、兎角は身のつゞかさざる道理につきまゝ、兩人内談極め、主人を今宵のうちにうつて立ちのくに成り、勝之介いへるは、二人ながら立ちのかずとも、此輩人は何となく後にのこりて、のきたる者の料にすべし、それがしうつたる分に極め、兪議をはつて後、其方は何となく年内は爰に暮し、正月十八日に、都の清水の子安堂にて出合ひ、同道して西國にくだ

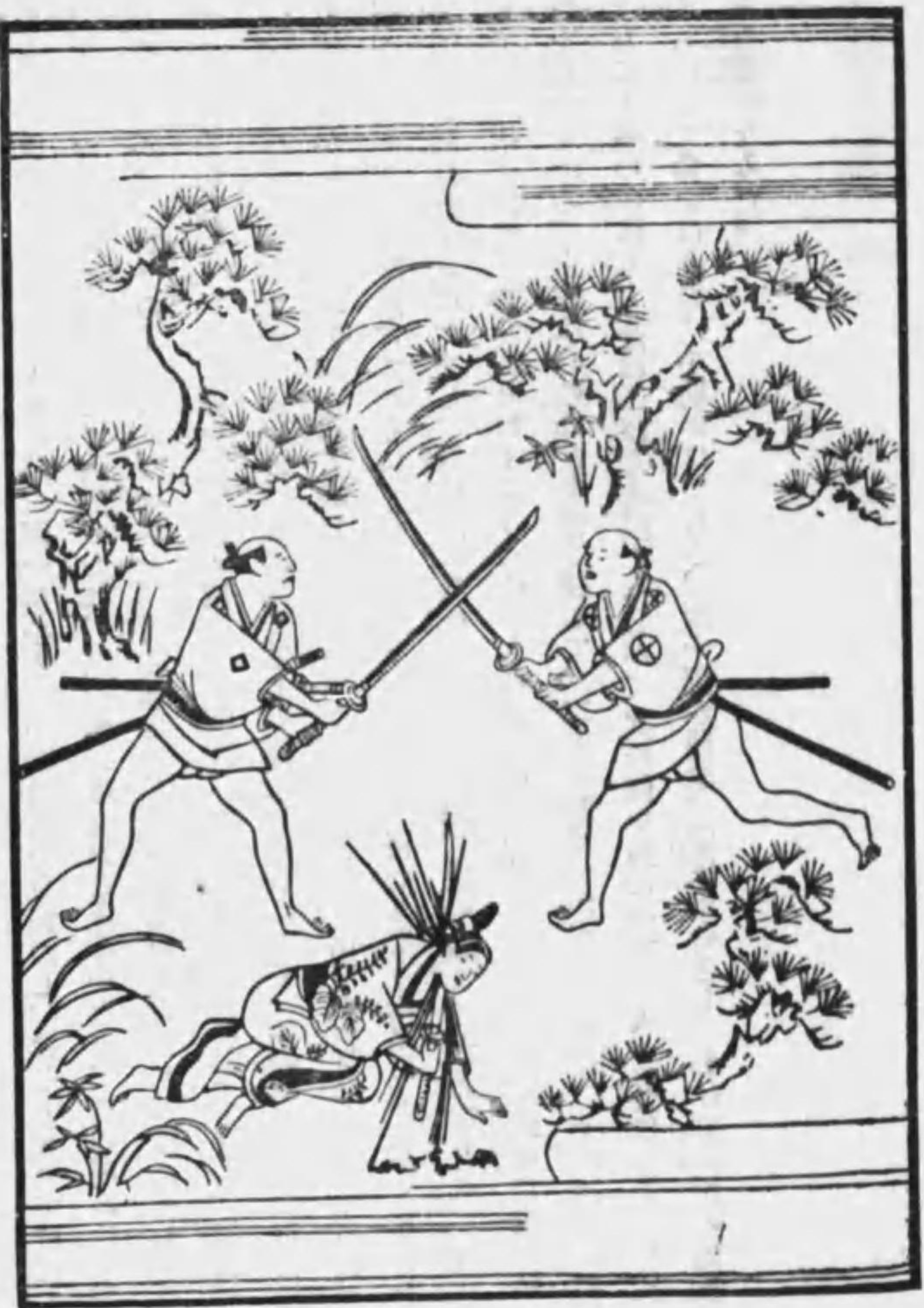
り、名を替へ奉公を勤むべしと、堅く申し合せて、其夜半に子細なく主人を打つて、勝之介は立退きける。其明けがたに番之介さわぎで追つかけしが、はや行きかたしれず、いよく勝之介の仕業に極る所に、方々御改めあそばしけるに知れがたし。つねく悪人なれば、吟味の役人も大かたにして事済み、後日の御沙汰に成りぬ。此猪六郎家に持ちつたへて、平家侍越中次郎兵衛がさしたる、こがねづくりの名劍有りしが、番之介是を取り隠し、はき庭の木陰に埋み置きぬ。御吟味の時、不斷勝之介が預り居たるよし申しあぐれば、扱は是ゆゑ主人をうちけるよと、はつと此沙汰有りける。番之介が心人には、兩人浪人のうちのたよりにも成りぬべき物と、出来分別成しが、此事勝之介傳聞きて、さりとは無念盗人の名を取る事、末代の恥辱なり、爰はのがれぬ處とおもひさだめ、京都より二たび歸りて、番之介が親のもとに晝忍び入りて、名乗りかけて切りふせ、其身も即座に相果てしが、書置のこして、段々はじめの所存願れけると也。

⑤ 身かな二つ二人の男に

うかれめの身は定めがたく、つなぐ舟にたとへて浪の枕を千人にかはし、紅舌萬客になめさせ、ひとつの心を其日の男好るに持なり。笑ふ時有り泣く折有り、さまざま替つた浮世の物語り、聞き流せる年月を、なげきながらの歌のふしにおくりて、下の關のつとめも今一とせにたらずなりて、生國筑前の蘆屋なる親里に歸るを樂みに思ふ折節、穿人らしき男の言葉は關東の人めきて、世をしのぶなりふりして、いつの比より



か、かりそめにあひなれ、いとしさ又もなく、戀をかさねしうちに、此男今は心底のこさず語りけるは、我本國は出羽の庄内の者、荒嶋小助といひしが、子細あつて、ほうばいの億住源太兵衛うちて、首尾よく所を立ちのき、今爰にしるべの町人を頼み忍びけるは、一子源十郎我をねらひ、諸國をめぐるに聞、かく身隠し遊山所も憚かるなりと、段々物語して、天理にて源十郎にうたれても、有時は、ぼだいをとひ給はれと、春日の御作の守り観音給はりければ、かぎりのやうにおもはれてかなしく、涙にしづみて別れしが、その後は日日にうとく成りて、たづね給はぬは、世にうき浪人ゆゑかとおもひやられ、いとゞ口惜しく、日毎に状態して、たまさかにあふ時は、枕もさだめず涙にして、一日を暮らしぬ。其後又、旅人の雨やどりの浮暗しに、酒の友と成りけるに、此男も亦此定家ていかにふかくなじみて、長崎までくだれる舟よりあがり、主なしの身の樂は、是ぞと爰に日をおくり夜をこめて、女郎のためによき事ばかりつゝのりて、定家も亦おのづから氣を移して、小助事は忘れし。是不心中ふしんちゆうにはあらず、つねの女さへ時にしたがふならひなれば、まして流れの身として、定家はきどくの女ぞかし。小助尾羽をからして、あふべきたよりなきを、女郎のかたより、揚屋の首尾をとゞのへしが、今は了簡りょうかんつきて、親かた吟味つよく、しのびて逢ふ事も絶えたり。又源十郎も此處の遊興ゆうきゆうに路金ろぎんつきて、跡へも先へも行きがたし、諸神に大願かけて、敵打身かたうちのふかくぞかし。是も契をかさわてから、仔細をかたりて聞けば、小助身のうへの事にうたがひなし。定家身ていかみにふるひ出でて、それも又此人もいとしさ替る事なし、何ともさしあつてのめいわく、大かたならぬ因果なれば、先此事小助殿に通じ





て、此處を立ちのき給へる文したゝめし時、源十郎小者、小助有家を見出だし、はしり來りてけはしくやうすかたり、女郎とおもひ何の遠慮もなく内談せしは、其の家野ばなれこそ幸ひなれ、松の茂みに木隠れて、人家を出して名乗かけ、願ひのまゝにうつべきと、着込鉢巻して刀の目釘をあらため、けふぞおもひの晴らし處、女郎も此身をいはうてたべ、敵をうつ縁と成り、此程爰に足をとめたる仕合せぞかし、追付めでたう御げんに入るべし、首途盃さし給へといふ。是非なく常より機嫌なる貌にして、三獻の酒も心を付けて、大事の前なればとひかへて、祝儀をふくみて暇乞して、いさみくつて揚屋を出でて行く。程なう町はづれの木陰にしのび、小助がやうすを見合せけるに、時節と借家を出でて、何心もなう松原にさしかゝりしを、源十郎進み出でて、小助見わすれはせまじ、億住源太兵衛が一子源十郎、親の敵うつ太刀なりと、飛びかゝれば、小助しさつて抜き合せ、暫く切りむすぶうちに、女の歩みにはかひなく、定家此中に飛び込めば、兩人目と目を見合せける。定家は心のほどを書き残して、二人の勝負つかざるうちに、すみやかに自害して果てける。互に大事の中にも、是はふびんと涙くみしが、其死骸を脇にみて、入り亂れて手を負ひ、兩人ともに相うちにして命をはりぬ。小助がはたらき、源十郎が残念、定家が心ざし、わけて三所の面影残り、見し人は世談のなみだ。

武家義理物語 卷六

目錄

- 一 筋目をつくり髭の男  
     蜷川のながらにござし  
     まことはあれはれ出づる法師の事
- 二 表向は夫婦の中垣  
     年寄男も縁かや京住ひ  
     神鳴の夜業平の昔を思ふ事
- 三 後にぞしるゝ戀の闇打  
     主命と親の敵いづれか  
     西の宮の落馬養生の事



四 形の花とは前髪の時

萬里へだて、心中の程  
たのもしき侍、大坂に有事

① 筋目をつくり髭の男

山城の宇治の里に身を隠して、住める浪人あり。當分の世わたりに、壺の入り日記など書きて、あなたこなたの氣に入り、年月爰にかさねけるに、むかしはいかなる人ぞとゆかしかりき。ひさしく先祖の事を語らざりしが、有時所の人の集りて、紫野の二休は名僧成りけると、咄しのついでに、蜷川新右衛門は文武の人と聞き傳へて譽めぬれば、彼浪人すこし歌學有りて、其身花車にそだちければ、風と出来心にて筋なき事を申出だし、それがしは蜷川新九郎とて、新右衛門が孫なるとかたりぬ。兼ねて新九郎と名をよべば、自然の道理に叶ひ、おの／＼うたがひはれて、扱は蜷川の流ほど有りて、萬事しほらしく見えけると、それより後は世間に此人をおろかにせずして、新右衛門孫といひふらしければ、いよ／＼新九郎仔細を作りて、蜷川代々の系圖をこしらへ見せける。此事世に沙汰して、岐阜中納言秀信公に身體すみて、武藝は外になし、歌道専らに心がけしが、これもまことすくなく、蜷川のすゑといへる、名聞ばかりに面むきをみせかけ、内證は色にまよひ、もとより悪心の侍なり。其の比蜷川次郎丸とて、新右衛門筋目にまぎれなき人、わがみひとつを浮世と捨てて、十八歳より出家して、津の國金龍寺の山蔭、古曾部村といふ處に、南を見晴し草莽をむすび、笹の細道わけかねて、木末の夏と成りにけり、能因法師の眺め残されし、生駒の山を雲の峯かさなつて、北は櫻の盛りと氣色をうたがふ入相のかね、涼しき風に無常を觀じ、あながち佛のみちも顯はず、朝暮







和歌に心をよせ、折ふしは笙の音を樂しむ、無我にして山居のおこなひ、殊勝さ此人の心ぞかし。其比都白河のほとりに、是も身を歡樂に取り置き、明日の事をしらす、けふまで暮されける、星合主結といふ人、入道して星薄坊と申せしが、此法師の男さかりに、我若道のむすび、世にあるよりふかかりき。其よしみて今も忘れず、爰にたづねて、過ぎにし事を語りなくさみ、落葉は煙の種と成り、釣釜に素湯沸らして、咽喉のかわきをやめて、貧家の氣散じ是ぞと、宵の間もなく明けがたに別れ、京都に歸りさまに宇治に住みたる浪人の噂、蟻川氏の筋なき事をいひ立てにして、岐阜秀信公につかへて、高知をくだし給はり、我世と心にまかすよしを語り、いかにしても悪き仕方といひ聞かせけるに、次郎丸入道何となくうち笑ひて、世の中にはかゝるまぎれ物おほし、我等の先祖の名をかりて、武家を立つるも口惜しき所存なれども、その者が身をたすかるたよりにならば、あらたむる事なかれと、大やうにいひ捨て其通りに濟みける。其後に彼新九郎身を作りものなれば、諸事に武家の作法ちがひて、一家中是をうとむ折から、天命つきて大寄合の座を惣立ちの時、岩田外記之進刀とさしかへて屋形に歸りぬ。外記之進は跡役にて心靜かに立出で、刀かけをみしに、我刀にはあらず、是は誰の腰の物ぞと、茶の番の坊主にたづね給ひしに、革柄に蟹の目貫、無地の鐵鍋にくり色の刻み鞘、ふだん是を見馴れて確かに蟻川新九郎殿の刀といふ。然らば汝ひそかに行きて、其斷りを申し、替へて參れといひ付けられ、既に新九郎屋敷に立ち越え、此有増を通じけるに、あやまつて何の子細もなき事を、此刀さしあつての無分別、それがしが腰の物にあらず、近頃卒爾成る事を申しけると、存知の

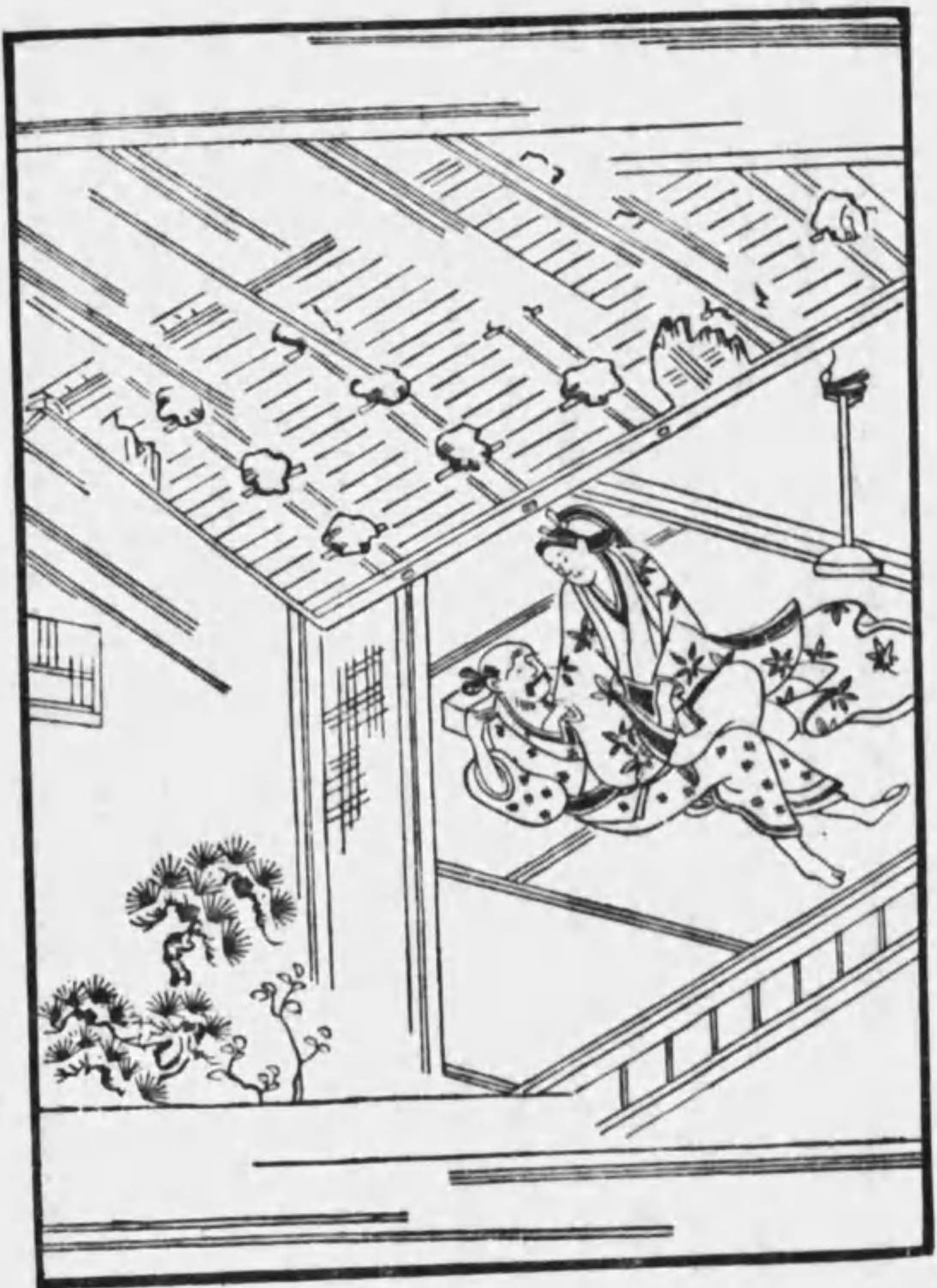
外成る返事に、使の坊主迷惑して此段外記之進に申せば、堪忍ならず、吟味役人にいひ届けて兪議になりぬ。然も外記之進刀は來國光が作なり、新九郎刀は平安城義國と、銘は有りながら正しからず、彼是不首尾に極り、新九郎義切腹仰せ付けられ、皆指をさし、籠乗物に押し入れらるゝ面影を笑ひぬ。かゝる時此のり物のむかふより、出家一人かけつけゝるを、おのゝあやしく思ひ、申々命乞は叶はざる事なるに、無用の法師の出所と、先をはらへば、案の外なる訴訟人。わたくしは蟻川新右衛門が子孫、次郎丸といへる者の入道なり、然るに此新九郎筋目跡かたもなき事を申上げ、御家に住む事心外ながら、此身なればゆるし置く處に、此たびの悪事先祖の名をくだす事、末代家のちじよくなれば、堪忍ならず、是ぞ我家の系圖と新右衛門自筆の物さしあぐれば、また此義御せんさくあるに、是も新九郎悪名にまぎれなく、御仕置替つてうち首にあひけると也。

㊦ 表むきは夫婦の中垣

文祿の頃、都のにし東寺のほとりに、常にかはりてふしぎなる夫婦の人あり。縁ほどをかしき物はなし、其男は七十餘にして、かしらに黒き筋なく、浦嶋がいにしへを、今みる親仁なるに、其女は、二八にまだしき春の山、花の口びるより物いふかとあやまたる程の艶女、すこし物ごしにこなまりあつて、四國そだちとはしれける。京の女ならば形慢じて男にくみをすべきに、田舎人の律義さ、見苦しき人に添て月日をおくられ



けると、是かんずる人はなく、其美形をせめてみる事をなげきしに、此男年はよれど、行義に暫時も油断せず、鯨鞘の中脇指常住反かへして目にかどを入れ、命をなんとも思はぬ有さま、人おのづからおそれて其内にとたよるものなかりき。朝夕のいとなみ何するとも見えず、米をかしぎ釜の下焼くまで、其女の手にはかけず、男の業にはあはざる事をもして、女をいたはりける。そもく此夫婦と見えし人の牛國は、豫州の武士成りしが、金子合戦天正のみだれに、此息女の父柳井右近うち死し給ひ、妻子流浪あそばしけるを、我腰ぬけ役の留守番頼ませ給へば、せめての働に人々隠國いたさせ、世しづまつてのち播州人丸の里にするべ有りて、一とせを暮しけるうちに、此母御病死。うき世とは存じながら、是ほどかなしき事、身をおもふ日影者の、何處へも道せまく、此姫子をつれて、老の浪のよるべ定めず廻國して、やうく今の都に来てうき住ひ、世間は夫婦分にしたせしもおそれなれども、姿すぐれさせ給へば、諸人の執心うたてく、戀をやめさせんがために、かく夫婦とは申しならはしける。晝は女房どもといへば、息女もかしこくて、且那くといひなし給へり。此心やすきより、姫いつとなく、まことの妻のごとくおもひなして、うちとけさせ給ふも、此男身をかため、武士の心底を立て、ゆめくそれに氣をうつさず、さりとはむづかしきあひ住の年をふりぬ。折ふし夏の雨しきりに、宵より鳴神ひびきわたりて、つねさへあばらや、殊更にこぼれて、軒の雫もいたくふり込み、南風はげしく、板戸もかけがねはづれて、外のひかりのおそろしく、内のとぼし火影消えて、女心にひとしほ物かなしく、頼む人として親仁なれば、ゆたかにふしたる懐中につけ入せ給ひ、こはやと





しがみつかせ給ひ、やごとなき御肌の身にさはれば、観音經をどくじゆして、随分心を移さざりしが、鳴神も落ちかたしれずおさまり、雨もをだやみて、壁下地のしのべ竹に、白玉の取り添ふも、物あはれやさしく見えて、むかし男の女をだまし、鬼一口にかみ殺されたしと思ひ入りたる闇の夜も、正しくこんな面影ならめと、親仁老をおこして、人のしる事にはあらず、りちぎも物によれと、左の足をうちもたせけるが、弓や入まんあやまつたり、いかにしても道をそむけり、扱もあさましき心底かなと、我と悪心ひるがへして、それよりむき起にして立ちさり、観念のあかり窓のもとにして、其夜を過こし、其後はいよ／＼おられて、此御息女を見立てまつりしに、其比高家のかたより、美女御たつねあそばされしに、都の事なれば、美君有るべきもの成りしに、いづれもすこしづつのさはり有りて、みやづかひの望み絶えける。然るに彼息女御たつねの年の程なれば、ようぼうつくろふまでもなく、御目に掛けしに、是につづきて又有るべからずと、愈々極まりての後、筋目をただし給ふに、父母ともに歴々の武士なれば、是に仔細はなかりき。されども此親仁夫婦のかたらひなしけるとの取沙汰、第一のさはりと成り、此首尾かはりて、彼息女を歸させ給ふに相見えし時、此親仁所存のだん／＼言上申せど、是ぞ縁者の證人と、誰か取りあげ給ふ御方もなかりし。身に過まりのなき事は、後日にしるる御事あり、此度官女にそなはらざりしは縁づくなれども、下人の不作法とは、世の聞えめいわく至極の處なり、是非に今一度御取持頼みたまつる、わたくしなき誓文なりと、ひだりのかひなを自らうち落して、泪に沈みぬ。此心ざしをかんせさせ給ひ、御うたがひ晴れさせられ、此美女御て

うあひの御枕のあした、なほなほ身の疊をさつて、月の都の只中に住み給ひぬ。

③ 後にぞしる、戀の闇打

何事もさし當つての分別はかならず後悔、或人のいへり。けふを明日の沙汰に延べ、其道理至極の時、是非をただすをまことの武士といへり、それも事に依るべし。其比加賀の國大正寺の城主、山口玄蕃頭家來に、千塚藤五郎といへる男、十六歳の時、父藤五左衛門の闇うちにあひて、其時分いろ／＼御せんさくあそばしけるに、相手しれがたく、其通りに此沙汰をはつて後、藤五郎に仰渡されしは、随分思案をめぐらし、父をうつたる者、相しるる節、此本望をたつすべし、汝が身にしても、是非もなき仕合せなり、すこしもひけたる所なし、敵住居見さだめ次第に暇とらすべし、先それまでは藤五左衛門名跡相違なく、大番組に入れて相勤め申せとの上意、有りがたく其通りに人もゆるして、若年にして大役つとめかぬる武士にあらず、流石千塚の家を繼ぐべき心ざし見えけると、各々すゑたのもしく思ひぬ。程なく六七年すぎて、血氣さかんなつて、親うちたる者の行衛を朝暮心がかりに過ぎし。是をうたでは武士の一ふん立たざる處と、諸神に宿願をかけて、此事ばかりを祈りて、今に定まる妻子も極めず、現にも夢心にも親の面影をみる事千たびなり。ある時思ひもよらぬ事に、闇うちの相手しれける。我が母人相果てられし後、父藤五左衛門いまだ流年さかんなれば、後婦はもとめずして、美形の妾者を置きて、老樂の寝屋の友として、おもしろ酒も折ふしは亂に



および、日ごろは武道の男なれども、女にはよはき心ざしをみられ、いづれ智愚のわかちもなく、色道にまどはぬはなかりき。そもく此女は京そだち成りしが、丹波の笹山に縁組して、尾瀬傳七といへる浪人とかたらひしに、次第に尾羽うちからして、渡世成り難く、此女の手道具まで代なして、今は了簡つきてむごき仕かたは、暇乞なしにふみ書捨てて、其身はいづくに行きしもしれずなりにき。女心にかなしく、是をなげくに甲斐もなし。道を立ててひとりくらせば、かつめいにおよび、身を墨染になす事も、一心より致らぬ出家もいやなれば、世渡りのたよりばかりに、又奉公勤めける。傳七二たび丹州にかへり、女の成行物語を聞き、なほ執心やむ事なく、何とぞ主人の手前を出でかへり、縁はつきせねば、此事はやくとたよりをもとめ、忍びてふみ遣はしけるに、此女見るまでもなく、かいやりて、年比のうらみ、殊更別れさまの難義、思ひ出だすさへ身ふるひして、さりとは其男うらめしやと、むねをいたためけるも、道理につまれり。さるによつて、返事せざる事をうらみ、扱は今勤めける主人、てうあいのみあまり外をせきて、其身を自由させぬと見えたりと、一筋に思ひ極め、段々有家たづね、加州に立ち越え、おもひもよらざる藤五左衛門恨みて、打つて退きけるが、此女主人是非も浮世の別れに、其なげきやむ事なく、年月の御厚恩わすれず、せめては御ぼだいとはんため、都の下加茂に、柴の戸をさしこめ、姿のかざりを切つて捨て、後の世を願ひしに、傳七又爰にたづね入つて、かく佛の形の衣をけがし、むかしを今もつてなげく。思ひよらずやと、あらくいへるを取つて押へ、さし殺し、其儘草薙出でて行く。此女の弟大藏といへる者、前髪さかりの小草履取、東山南禪

寺の末寺に奉公せしが、是を聞き付け、深くなげきぬ。しばらく思案して、此程卑人の傳七、此所に無理入りせしと、姉の語られけるが、正しく此者の仕業うたがひなし、扱は藤五左衛門殿うちけるも、傳七に極まれり。命を取る事小腕に叶はざれば、是より行きて、藤五郎殿に申合せて、敵をうつべしと、加賀の國にたづね行き、はじめの仔細をかたり、尾瀬傳七生國は播州龍野の者なれば、かならず國元に住居さだまつたる事なれば、いそぎ播磨に御下向あそばし、傳七うち取り、御本望達し給へ、其男たとへ墨をぬればとて、それがし日比に目じるし有りといさめければ、藤五郎よろこびかぎりもなく、今宵のうちに用意して、明日は御暇ねがひ罷下るべし、旅用意仕れと、ひそかに跡の義申し付ける所へ、家老中御用ありとの御使、早速登城仕れば、備中の福山へ御使者仰せ付けられ、初めての役目有難き仕合せと、御請を申すうちにも、敵の事を飛び立つほどに思ひ入りながら、主命なれば是非もなく、先此たび相勤めて、後日の沙汰と彼大藏を同道して、備中にくだりしが、津の國西の宮の宿に付けば、所の人立ちかさなり、落馬して旅人のあやふかりとて、氣つけよ水よといふ聲さわぎぬ。大藏是をみて、あはれかたきの傳七なりと身をふるはして申し上げる。藤五郎も是はと、さしあたつて分別し、主命の御用の時、たとへ無事の身なりとも、うつべき處にあらず、殊更かゝる難病なほもつてと、大藏に義理をいひ聞かせ、處の人に妙薬ををしへ、此うち身には鹿の袋角を紺屋の糊にて摺りませて付けて、其まゝいたみさる物と、念頃病人の事をいたはり、正氣付くに仔細はあらし、其時分これを見せよと頼み、文書き残し、難病はうたずに命を助け置くと、右の段々うち付書







にいひ置かれける。其後病人驗氣の時、彼文をあひわたしければ、傳七此心底を感じ、まこと有る武士は各別なり、世界にながらへてせんなし、もと某が悪心身に覺えて、加賀に立ち越え、其身の悪事、西の宮の首尾さりと是有りがたし、それゆえ御親父様をうつたる處にまかりて、自害仕るなり、とどめをさして給はれと、心中の通り札に書きしるゝて、おもひ切りたる最期、藤五郎がうたざるは、うつにまさりし武道と理をせめて、天晴神妙なる心入れと、國中に是を譽めける。

④ 形の花とは前髪の時

人もひと盛りは花。木村長門守めしつかひに、松尾小臈とて、形を奉公の種として、衆道時めく十六歳より此家に勤めける。牛國は石州濱田にて、杉山市左衛門といへる人と、念友のかたらひをなしけるが、出世なれば、別れ惜しき戀路を見おくりて、市左衛門すゝめて上がたにのぼしける。其心ざしたのもし。山海萬里はへだてつれども、文にて契をこめて、朝夕其人の事を忘れずして、ひとり目はあはず、過ぎにし戯ふれ枕ゆかしき折ふし、鳴野宇右衛門といへる侍、執心をかけて狀付けられしに、情心はなれて存ずる仔細あつて、外への念比おもひもよらず、かさねては此義御無用、御返事も仕るまじきといひやれば、宇右衛門せきて首尾見合せ、小臈がへやにたづね入り、是非を極めて身のさゝはりを、無理に吟味をする。小臈すこしも驚く氣色なく、我おぼしめしての御事、あだには聞かず、されども國元にていひかはせし人有りて、誓

紙も是見させ給へ、いかにしても此義理立てける、そもくの事ども内證ともに語りて、今より其方さまを頼み入り、衆道のともかなひがたし、誠の兄弟ふんにおぼしめされ、御引き廻しに預りたきと理をつくして申せば、宇右衛門是を聞き分け、それよりして如才なく、小臈うしろみを格別なる心づかひをいたせり。又玉水茂兵衛といふ侍、これも狀を付けてなげくらちに、宇右衛門したしく語るを見出だし、以前より執心かくる我等事は捨置き給ひ、後に申せし人と、御念頃あそばす事、いかにしても心外なり、何ほどいひわけ有りても、堪忍成りがたし、とかういふにおよばず、うちはたすべしと、思ひ切つて見えし時、小臈も今は了簡なく、さやうに仰せらるゝとて、此方には毛頭くもりなき事也、されども命を惜むにあらず、いかにもお相手に成るべし、しかし小臈なれば、其方の御太刀下に懼成は知れたる事、跡の義は見るしからぬやうに頼み奉つる、扱出合はいつ比と申せば、茂兵衛いよくすゝみて、十九日の夜こそ宵闇なれ、初夜より前に玉造の芝居に参り合ひ、死出の旅路の二人づれ、浮世の月をみるも、ひとへ二日なれば、身の取り置き心静かにあそばせと、たがひに禮義をのべて立別れぬ。程なく約束せし十九日の夜に入りて、小臈人をもつれず、身ごしらえして、申し合せし野邊に行きてしばし相待ちぬれど、人かけも見えねば、すぐに茂兵衛長屋に行きて、此せんぎせんと忍びなくに行きけるに、跡に人の足おとすれば、竹垣に見添へ爰を大事と隠れける。其人を誰ぞとおもへば、念比せし宇右衛門成るが、目のはやく侍にて、小臈と見付け其まゝ立寄り、是は何とも合點まららず、只ひとり忍び給ふは、茂兵衛に情かたらひと見えたり、さもあれば此男中々一分





立ちがたし 其上は茂兵衛其方兩人を相手成りと、すこし腹立道理なり。小臈さわぐ風情なく、是は入り組みし仔細ありと、初めの段々かたれば、いよ／＼うらみ有、念比とはかゝる時の事なり 後づめには此宇右衛門たのもしき山ありとおほしめし、茂兵衛うち給へと、小臈に力をそへて、屋形に案内させて、門に立聞きすれば、茂兵衛分別かはりて、いまだ書置に取りまぎれ、延由申すなり。爰にまた相談あり、宇右衛門と御念比あそばさねば、此方に何のうらみもなし、それにうち果し所にもあらず、此方にはすこしも申分ないといふ。こなたにいんぶんなきと仰せらるゝうへは、此方も其とほりと、何のせんもなき茂兵衛がしかたなり。それより宇右衛門と大笑ひして立歸り、なほたのもしき侍、外より思ふには格別 義理一べんのかたらかひ、小臈がすがたの若松、ちとせの春をかさね、すゑ／＼武の家さかえ、太刀ぬかずしてをさまる時津國久しき。





東京町通大塚上丁

山形市

印自中橋万町角

美濃町



三月

二月吉祥日



大坂心算場筋御所町南入丁

安井如意堂

入給

為野織為

吉野入



西鶴織留序

風は形無うして松に響き、花は色有つて物云はず、眼に遮ることは心に浮び、思ふ事云はねば腹が脹ると云ふは、昔やつがれが小き腹して拙き口をあけて、世間の由無言を筆に續て、是れを世の人心と名づけ、難波の吳織織留むる物ならし。

元禄其月其日

難波

西鶴松壽



西鶴生涯のうち、述作する所の假名草子、棟に充ち、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代藏、本朝町人鑑、世の人心、是れを三部の書と名づく、尤も尚職人の関するに、日用世をわたるたづきに心得べき鑑たるべき物にして、永代藏は其の功なりて後、町人鑑世の人心半書遺して、過ぎし西の葉月に此の世を去りぬ、されば兩部の名のみにして空しく三部の関けたらんには、ぬしの本望もかなはず、かつは巻いて紙虫の家ともならば、珠を淤泥に隠すにひとしからんと、書林の某の歎に應じて、兩部の書残されし半宛を、とり合せて一部となし、彼に與ふるついで予に序を乞ふ、此の書の功の終らざるに別れしを思出でて、涙を墨にして筆を添へ侍りぬ。

元祿七年

戊

卯月上旬

難波 俳林

圓 水 誌

滑稽 堂主

西鶴織留 本朝町人鑑

目錄 一

- ① 津の國のかくれ里  
四千七百貫目は聞耳のとく  
上々吉諸白大明神
- ② 品玉とる種の松茸  
謠のうけ賣庄屋殿ふ機嫌  
灰もつもりて山となる小判
- ③ 古帳よりは十八人口  
煙とる時から淺黄漬物  
挑灯に釣鐘かけあはぬ事



④ 所は近江蚊屋女才覺

數百人はごくむ千貫松  
勢田に馬はあれど穿人心

① 津の國のかくれ里

神武此のかた世の人艶女に戯れ、無明の眠の中に其家の亂るゝ事數をしらず。近年町人身體たゞみ分散にあへるは、好色買置此二つなり。損銀仇銀年々相積りて、才覺の花もちり、紅葉の錦紙子と成り、四季轉變の乞食に筋なし。是を思ふにそれ／＼の家業に油断する事なかれ。爰に津の國伊丹諸白を作りはじめて家久しく、毎年の勘定銀五貫目延びも縮みもせず、うまれつきたる小男の仕合せと、月日をおくるうちに、子ども成人をして、然も惣領よろづにかしこく、親の古風とは替り、當世仕出しの衣服に身を飾り、是より女郎くるひにそまり、我里より忍び駕籠をいそがせ、都の島原通ひつれば、すこしの望姓残りすくなく成りて身上あぶなく、二親なげきて異見するにとまらず。有る時約束して丸屋の七左衛門かたに太夫の吉野を揚げ置き、つねよりけはしく六枚肩にてのぼりけるに、丹波口にて夜半の鐘、とからするまに入つ門明きて、宵より夢見し客、名残惜しさは、朱雀の細道うたひ連れて歸る。我は今來て太夫が待ち兼ねぬ見も、戀に深き所の籠れり。先づお行水よ、白粥よ、味噌酒麩の跡から、岩花のお吸物出して、鴨の板焼は火鉢をすぐにお座敷へ出すぞと、勝手は煙立ちつゞき、亭主は置炬燵を仕掛け、女房は濃茶立て、お氣晴しにとあげける。引舟女良に髪撫で付けさせ、禿に足の裏をさすらせ、吉野に手の指を一つ／＼引かせ、餘所の投節をこちの肴にして呑みかけ、此葵花大名もならぬ事、願はくは我が聲聞けと、京中八十二人の末社、出口十七軒







の茶屋までも、霜夜に裸で起きて、且那の御上京なされたと、嬉しがる程物とらせたし。兎角ほしきは金銀ぞかし。算用なしに遣ひ捨てば此遊興のおもしろさは限りあらじ。目前の極樂とは爰の事寝た間は佛と、三つかさねの蒲團の上に樂枕して、吉野と一つ二つ物いふうちに、門の戸けはしく明けて、お宿より御狀がまゐりましたと、隣の床の客へとよけるに、何事かといふ聲して、これは目出たや金銀抓み取りの内証、江戸の手代より申し越した關東筋大風ふきて、八木俄あがりなれば、是れより大阪にくだりて西國米大分買込み、あがり請けたらば、太夫を根引にして我等が奥線にする事ぞと、此たびの仕合せを祈れ、夜が明け次第に爰を立つぞと、今すこしの別れ惜み、床を離れかねける。時に伊丹の人此事を聞耳立て、いまだ帯もとかぬに起き別れ、おもしろき最中をおもひ捨て、我里に失念したる事ありとて、首尾かまはず立ち歸り、早駕籠いそがせ伏見より飛脚舟かりて、其日の四つ前に大阪の北濱へつきて、問屋をひそかにかたらし、米大分買込みけるに、はや晝よりあがりて、只一時のうち三拾八貫目丁銀にて儲け込み、此思ひ入に油買込み、又四拾四貫目あがりて、機嫌よく伊丹に歸り、親に小判の山を見すれば、世間に金のめづらしき時分なれば、是れ長者の心なり。さるほどにたま／＼逢ひにのぼりし女良を捨て、身過ぎ大事にして利を得たる所、分限に成るべきはじめなり。其後は江戸酒借銀田島を求め、棟高作りて住みなし、心よき春をかさね、元日の嘉例とて、父親は胸前垂して蓬菜を丸盆に組み付け、代々伊勢海老なしに祝ひける。母親は芋大根ばかり雜煮を盛りならべ、餅の入るのを忘れたる年より、仕合せよしとて今に其通りなり。扱親仁の書初

に毎年さだまつて遺言狀をしたため、箱入にして封印付け、持佛堂の下へをさめおかれしが、そも／＼は右銀五百七拾目なり、年毎に書き増して四十二の春より、八十三歳にて相果てられしに、五十日に一門集り、書置狀を開き見るに、財寶の外に四千七百拾九貫目内蔵三所に入れ置かれ、此銀子の大分に成る事、一とせ物領が米油の買入れよりの分限なれば、残らず兄に渡して、弟ども是次第に身體をまかすべし。殊に末子は町人の家業なる天秤のかけひき帳面見る物にはあらず。其子細は一生美食を好まず、世に時花うたをうたはず、鬘付も髪結次第にかまはず、夜ありきをする事もなく、人の無常を觀じ長うもない世界に、善心なくては人間の甲斐はなしと、常住の身の取置き、うつけ者のやうに見えて、又かしこき所あれば、よき娘ありて且那の多き御一家の御堂を開立て、銀三百貫目付けて養子にやるべし。又中男子が義、親の目にも見とどけぬ者なり、さしあたり利發萬事を人の跡に付く事にあらず。惣じて音曲鳴物四座の直傳をならひ請け、連歌は新座池「○新在家」へ立ち入り、俳諧は難波の梅翁を里にむかへ、立花は池の坊に相生まで習ひ、物は紫腰をゆるされ、茶の湯は金森の一傳、物讀は宇都宮に道を聞き、碁所に二つまで打ちなし、楊弓は一中かゝりて大金貝の看板、十柱香は山口圓休に聞き覚え、有職の道者にしたひ、此外琵琶琴は葉山、小歌は岩井嘉太夫ふし、彌七が文作、あふむが物まね、をかし中間の事までも口拍子にまかせ、かゝる器用人の有る事、此所の外聞と皆人もてはやせば、其身渡世の事をつてしらず、殊に肝大氣に生れつき、當座に思案なく、金銀手にもたせ置けば、おそろしき虎落どもにかたられ、新田金山芝居の銀本、博奕の筒にかゝ



り、何ほどあつても手を拂ふものなり。既に七歳の春の比、はじめて小判壹兩盗みて紙馬の糸を買ひ、はや九歳のとき、ちひさき前巾著の中に、一步廿三入れてさげける。子どもの時より錢も白銀もぬすみ、大膽ものなれば、菟角商賣さす事無用なり、住み所京大坂のうちに物好に座敷を作り、妾女一人、小性ひとり、男女ともにめしつかひ七人、我ともに八人、一生擬ひ世帯にして、毎月六百目づつ晦日に相渡し、此上に奢は一錢にてもかまふまじ。我相果て命日なれば迎、精進にてもするものにあらず、此のたび病中にも世間のおもはくばかりに、跡や枕に夢程の間もあくびして、次の間にてうき世咄しも、また親仁もよい年なれば、尊い所へまゐられたがましで御座る、長いきに一つも徳のない事、目がかすめば花が咲くやら、耳が遠ければ郭公もきかず、齒がぬけたれば肴に味なく、足がよれば座敷に杖つき、煙子にあかるゝ身と成り、一日も娑婆ふさぎ、藥代のつひえぬうちに、此世の境が明けがたと、四五度いふ事聞きける。これ悪人に極まれども、親の因果は是れさへ不便に、身の行く末の事共を書置にのせけると、さりとは跡恥しき親の心入れ、是れ人間と形に見える甲斐なし。されば世上にかゝる心ざしの悴子多し、天命盡きずしてあるべきや。親分限なれば不孝者も隠れて知れず、親貧なればすこしの悪も包み難し、貧福の親の遠ひ損徳の二つなり。富貴の家にうまれ出るは前生の種なり。菟角人は善根をして家業大事にかくべし。池田伊丹の賣酒水より改め、米の吟味、麴を惜まず、さはりある女は藏に入れず、男も替草履はきて出し入れすれば、軒をならべて今の繁昌。升屋、丸屋、油屋、山本屋、酢屋、大部屋、大和屋、満願寺屋、賀茂屋、清水屋、此外次第に榮

えて上々吉諸白、松の尾大明神のまもり給へば、千本の相葉枝をならさぬ時、津の國の隠里かくれなし。

二 品玉さる種の松茸

神國の日月まことを照し給へば、世に萬人の心すぐなる道に入りて正直の頂をさげ、恐るゝ人には禮儀をただし、順ふ者にはあはれみをかけ、我が物喰へば龜將軍といへど、京も田舎も住みなせる町人、其所々の作法一つも漏るゝ事なかれ。むかしの人間はかしこき人はすぐれ、又愚なるはあらはれて、鈍智の二つ各別の相違ありしに、今時の人は相應の智徳をもつて産れ、習はずして其道々を知れる貞つき、見た所のうときは一人もなかりき。此時における賢僧、かたり、陰陽師のたくひ、大かたの文作事にては合點せぬ時世になりぬ。只白化にはうかしまでも品玉とる種の行き所をさきへ見せ、辻談義も佛のまねの口をあき、つまる所は喰はねばひだるい／＼といふにぞ、ありのまゝなる法師とて、人皆勤進をとらせける。萬事に偽りなき御代の掟を守りけるためしには、よろづの賢掛、あるひは當座借の金銀、手形なしの事なれば、借り請けぬといふとてもむつかしき出入なるに、心覚えの帳面ばかりにて請拂を済ましぬ。此以前舟著の間屋に世間並にすぐれて銀拂ひの悪しき人有り。大節季の夜に入りさもいそがしき中にて、人の手代に銀八百目渡しけるに、請取帳に名判をしるし、其銀子を袋にいれずに歸る。跡にて亭主取り隠し、後日の沙汰にも、いよく渡したといひきれば、此手代身のせつなさのあまりに、湯玉のごとくなる泪を溢し、諸佛諸神を誓文に入



れ、不念を託言すれど、中々聞きいれざれば、手代是非なく、頼みし淨土寺にまゐり、親方へのいひわけに、銀ゆゑの自書、扱はとらぬに極めて、世上よりいひ立て、次第に商賈うすく成り、内義幾人か平産せしに、手のなき形をあらはせ、一とせ道頓堀にて見せ物にせし徳利子の萬太郎は、其人の子にて世に恥をさらし、つひには此家目前に絶えたり。無理なる欲は必ずせまじき事ぞかし。ならねばなるやうに世渡りはさまざま有り。然れども望姓持ため商人は随分才覚に取り廻しても、利銀にかきあげ、皆奉公になりぬ。よき銀親の有る人はおのづから自由にして、何時にても見立ての買置、利得る事多し。唐柜の根の南の方へ高うはえあらはるゝ年は、二百十日の風確をも吹きちらすと、東方朔が傳書にも見合、今年は俵物買年、思ひ入はありながら、無い物は銀にて、さる程にせはしの世や。節季々々は六十日の立つ事夢のごとし。正月の掛鯛の山草すこし枯るゝと思へば、はや落賣る際、軒の花蔦蒲、今も所々に見ながら、灯籠出す暮に胸も踊りて、蓮の葉の食ぬくもりもさめぬに、又菊の酒屋の書出し見れば、思ひもよらぬ酔の出るもをかし。世に住む付届とて、塗漆に小鯛魚一連、又は干鮮二十居て取り遣りするは、今年は粟が高いと見えて算用づくの人心さもし。九月を過ぎて大暮までは百日に餘れば、すこし爰にて息をすと思へば、常の物前と違うて、大分の拂ひかた、心常ほど商ひしてから、足らぬ所見えて、日比言葉で目を掛けらるゝ門徒寺の手前よしに、此行先の師走には銀子五百目御借し給はれと、機嫌のよき時女房どもに言ひ出させければ、何と三百目にては仕舞はれぬか、其内分別して、お取越の寄り銀次第、御用に立つ事も、盃持ちながら呑みもきらず

噛みもきらぬ返事を、無理に旦那のお蔭といひかけ、それより毎日の輕薄茶のたばこのと馳走して、五日に一度づつかるい遣ひ物して遣ひつくばひ、初松茸一斤四匁五分する時調へて、嵯峨の親類どもよりまゐりたる由、霜前の土くれ鳩を態とつとにして、山家からくれましたと申し遣し、孫子の豕を祝ひ、おふくろ様の御法體に、丸頭巾を進上申し、自身番の夜半替りを勤め、棚から落ちて猫怪我したまでに騙け付け、餅春にも夫婦まゐりて、かゝは大釜の下を焼けば、男は水風呂に水を汲み込み、一代にした事ない骨を折り、十二月廿日比より、御無心申しかけし銀子の事を頼み奉り、やうく大晦日の夜四つの鐘の鳴る時、利足は一分半の手形を極め、何時なり共御用の時分すましかね候はば、ひとりある娘を遊女町へ賣て相濟し申すべしとの約束。人が聞かねばこそ無念ながら此度の御恩わすれ難しと、内のものどもにまで禮を申し、そこへ年をとりて、明るる春の四日に棚おろしの勘定をして見しに、わづか五百目の銀子借らうとて、目に見えぬ費はのけて置いて、八十四匁六分五厘が物をつかひける。まことに貧者の手づまる事、かゝる物入りのありけるゆるぞかし。其年より夫婦内談して菟角銀が銀をまうくる世なれば、折角かせぎて皆人のためぞかし。外聞を捨てて身のたのしみこそ老先のたのみなれと、奈良草履屋を二足三文に仕舞ひて、大坂を離れ、女房の在所住吉の南遠里小野に身を隠し、夕暮よりは油を賣り、すこし手を書くを種として、所の手習子ども預り、我がまゝそだちの草を刈り、野飼の牛の角文字より教へけるに、誦しらねば迷惑して日毎に大坂へ通ひ、むかしの友に習ひて又里の子に教へけるに、やうく蒙平一番覚えしに、小原御幸の源太夫のと、外百



番を好めば、師匠の知らぬとはいひ難く、是さへ一日のばしに何なりとも望み次第にうたうて聞かせうといふうちに、節用集に見えわたらぬ難字を庄屋殿より度々たづね給ふに、一度にても埒をあげねば、何とやら首尾あしく、はじめは麥秋稲時新米の初尾とてくれければ、商ひしたよりましなりと思ひしに、ひとりく寺をあぐれば、又悲しくなりて、明暮渡世を分別するに、錢三十づつまうくる事の何にてもなかりし。或時宵に焼きたる鍋の下に其朝まで火の残りし事、これは不思議と燒草に氣を付けて見しに、茄子の木犬糞の灰ゆゑに火の消えぬ「○原本」事をためして、是れは人の知らぬ重寶と思ひ付き、手振で江戸へくだり、銅細工する人をかたらひ、はじめて懷爐といふ物を仕出し、雪月比より賣りける程に、是は老人樂人の養生、夜づめの侍衆の爲と成り、次第々々はやれば、後には御火鉢御火入の長持灰とて看板出し、大分うりて程なく分限に成り、通り町に兩替店出して、何萬兩とも藏入の奥を知れる人なく、林勘兵衛といふ名はひそかにしてのたのし屋なり。むかしより言ひつたへし駿河町の三谷をはじめ、其外の兩替ども黄金の山を見せるに、中々あひも劣らず、諸大名の御用何ほどにても事をかゝず、家榮えて今妻子は下々の見る事もなく、上野の花見駕籠、隅田川の舟あそび、柳櫻をこきまぜて、都の心になりて一生の安樂する事も、憂き世帯の時男によくつかへて堪忍をせし身の上、天是をあはれみ給ふなり。天下の御めぐみなほありがたし。わづかの灰より分限になりて、富士の煙の絶ゆる時なく、たしかなる福人也。

## 二二 古帳よりは十八人口

富貴は悪をかくし貧は恥をあらはすなり。身體時めく人のいへる事は、横に車も退いて通し、世を暮しかぬるものゝいふ事は、人のためになりても是をよしとは聞かず。何に付けても金銀なくては世にすめる甲斐なき事は、今更いふまでもなし。諸町人其合點はして居ながら、身の一大事をわすれ、いつも月夜に釜をぬかれ、借錢乞と無理の口論、大節季の鬮とは元日よりはや知れけるぞかし。今の世に商ひ事なきと人毎にいへり、是は大きに算用違ひ、むかしとは各別諸商賣多し。其のためしには大坂の堺筋に、椀折敷重箱よろづ塗物屋ありしが、親の代置永年中の古帳出して見るに、一年の賣物七貫にたらず、此利合にて上下六人口を過ぎて、それ／＼の正月きる物、餅も世間並につきて、萬の請け拂ひも極月廿五日より廿八日までにしまひ、晦日には年わすれとて、隙なる年寄友達をよびあつめ、小鴨の汁に鱈の焼物にて振舞ひ、酒のうへの大笑ひ、すこしも心にかゝる事もなく、内證しまはれけるに、今我代になりて親仁の時よりは商ひ大分にしまし、毎年四拾貫目餘の賣帳、人も其時とはまして十八人口になれば、以前より世に商ひ事のないとは言はれざりしに、年々手づまり、兩替屋より日借の小判二日切の手形、銀二割の利銀をかまはず、先づ請け込みて當座拂に埒をあげ、門は禮者の通るまで天秤をならし、やう／＼仕舞うて、嬉しやと革袋枕に、残る物とて懸銀ばかり十八匁、戸棚掛視には錠もおろさず、錢さしの塵もはかず、掛乞ひの呑み捨てたるたばこ益じだ



らくに、ともし火はかはらけの中に燃え入り、我身を覺えず薪をかき、夜の明けがたまで目のあくものはなかり。母親隠居の戸をあけて下女をおこし、大豆がらにて鍋の下へ焼き付け、膳だてするも良ふくらかし、久七に若水汲めといへば、お家久しき人に汲ませよ、半季居は御作法しらず、餅が煮えたら身祝ひに喰はうといふ。手代も主の事をかまはず、久七に足をもたせ、ひとり目の明くまで我を起すな、向ひ殿の若い者は我等よりは三年遅う奉公して、はやことし日野絹のおしきせ、脇指までもらひしに、いかにしても算くづしの布子で立ちならぶもはづかし、晝の内は門へは出ぬぞといふ。小者めまでも同じやうに口をたゞき、ことしはゑびす殿に憎まられたかして、鹽漬なしに難煮すわるといふ。その外の下人ども絹帯を櫛帯の不足、又は雪踏のかはりに皮草履、少しの事に嬉嫌わるく、用いふ事も餘所に聞かせ、大勢の人をつかへる甲斐はなし。これ親方のすべき事せざるゆゑと、母の親元日さうく涙をこぼし、過ぎゆかれしつれあひの事思ひ出して、持佛堂に香花を取り、長生しての後悔と、大膽あげて歎かるゝに、いづれも目覺して罵きける。是れ不孝第一なり、母の悲み其身の事にはあらず、我子を人にあなどらせ、世間の外聞かたぐい口惜しきとばかり、思ひつめられしは、女心には道理千萬なり。親の時より次第にしにせたる見世にて、今大分商ひ事ありながら、何とて節季々々に手づまり迷惑する事ぞといへば、母親愛はいひ所と、男の如く膝を立て疊をたゞき、我等が世帯の時は、雀の鳴かぬうちに鐵漿を付けて髪を結び、下女が水汲むうちに茶の下へ焼き付け、米糶ぐ間に寢床をあげ、でつちに行燈掃除させて、其油紙にて煙管を琢かせ、其跡にて敷居の溝を

ぬぐはせ、捨てる所は塵籠、角々までも氣を付け、芝居近くへの使には朝食より前にやり、遊女町の近所へやる時は、用事俄にいひ付けて帯も仕替へさせず、鼻紙入れを取りまはす間もなく、庭よりすぐにつかはし、一つ釜の加賀米にはしらかし汁、餠菜も同じやうに居りて、主下人のへだてなければ、朔日廿八日に贈せぬ事もあらためず、精進日には香の物にて朝夕お主のお蔭と箸箱をいたゞき、風の吹く日さむからぬも新しき綿入れの布子ゆゑと、衣裏のよごるゝをも厭ひ、萬事おろかにせざり。我等もふだんは花色染の木綿さる物に袖の帯一筋にて姿を作り、舞取振舞の時も淺黄にちらし菊の絹の物、しゆちんの帯に紫革足袋にて花をやりしに、今是れのおかたの常住の風俗を見るに、肌著に白小袖をはなさず、中には鹿子、上には黒羽二重のひつかへしに、藤車の紋所を確程にして付けて、役者のきさうなる袖口、百品染の白しゆすの帯を腰の見えぬ程まとい、すき通りの瓊瑤のさし櫛を銀貳枚であつらへ、銀の筭に金紋を居ゑさせ、珊瑚珠の前髪押へ、針金入りの髪髻を掛けて、素貞でさへ白きに御所白粉を塞の水にてときて、二百へんも摺り付け、手足に袖の水を付けてたしなみ、炬燵に紫ふとんをかけ、茶糶子の引敷、延の鼻紙に壺打のやうじ取り添へ、たばこの火に伽羅を焼きかけ、煎じ茶を豪天目にてはこばせ、手もとに源氏物語、いたづらに氣を移す事を年中の仕事にして、花見紅葉見の駕籠、芝居の替りくりに棧敷をとらせ、中居腰元お物師つれて、針を藏につみたればとて、たまる事にはあらず。諸事に付けて内證の奢より身體つつぶしぬ。おかたは我が男ひとりに見する姿を遊女の如く作り、男は又一代連れそふ女に、ない物もある身して萬づ隠し、うちの肌



著に不斷緋沙綾の下帯かく事、人のしらぬ費なり。傾城ぐるひするには、我も人も全盛所なれば風俗作るもことわりなり、これさへ今時はかしこく常の衣類にて通へど、揚銭の濟む事をよろこびける。されば人の花煙といふは、親にかゝりの部屋住のうち、又はよぶと其のまゝに世帯請けとるも、わづか一とせのほどは互ひに堪忍しあひて、男の氣を取り御隠居におそれ、下人下女が身のうへもよしなに言ひなし、もしさられては大事と、只心一つに此家の榮え行く末を祈りしに、程なく惣領産れて尤も手前よろしき人は、乳母を取てそだてさせけれども、はや女の身もちおのづから自墮落に成りて、俄にふるめき昔の形見覺して、戀も餘所に成りければ、女房は殊に恪氣つものり、二十にたらぬ口から言葉荒して、親里よりつれたる女を相手にして、我身は果報のすくない者ぢや、伏見町の呉服屋からもいうてくる、天満の酒屋からも人を頼み、是非よびたいというたに、仕合せのあるが中に、こんな塗物屋へかたられて、跡からはげる事を、念佛講の同行平野屋の久齋様にだまされた。是程氣がつきては頓て死ぬるに間はない、金入りの鳳凰の小袖は打敷、花車の縫の袷は天蓋幡にして、お寺へあげて手道具は焼いて捨てて、うき世の塵も灰も残らねば、何か氣にかゝる事なし。ひとりある子も抱捨てねば命も定めなし、あれが事さへ不便におもはずと、其後は鼠の喰ふ物も取りおかず、麻袴の皺の寄り次第、亭主の留守には夜食好みして、大方是れのはげが歸る時分ぢやと、油火の灯心をほそめ、御所柿の皮を知れぬ所へ捨てさせ、なんの事もない座敷を、家鳴がするといひ出し、人の心をなやませ、此家の衰微をよろこぶ女の心、其時々に移り替りおそろしき物ぞかし。其男の身にしては

覺うるさく、後にはする程の事目にあきて、暇書きて將を明けける。世に女房さる程、身體のさはりになる事なし。女も又二たびの縁付、必ずはじめには劣るぞかし。菟角世間の外聞かまはず、聲は目下なるを取てよし、煙も又我よりかるき方より迎へてよし。挑灯に釣鐘かけあはぬ事すれば、内證の火の消ゆるに程ちかし。此庵屋もよい男に萬事まわて身上をたふれける。

#### 四 所は近江蚊屋女才覺

煙人道具の品々、世間にすぐれて念を入れれば、限りもなくむつかしう國士の費になる事多し。上京中長者町の仕立物屋の弟子手間とり、針筋を揃へて薄絹の蚊屋を縫ひけるに、都は目廣き所ながら、立ちとまりてこれを見る人次第に押しもわけられず、黒木賣りくる女の難儀愛通るかぬのみ、しれたる姿を笑はれける。櫛の二布糊こはくとして、やうく我身を隠すもあるに、此蚊帳を見れば、四角に赤地の唐織を菊の花形に切りあはせ、紅の大房に匂ひ玉をむすびさげ、珊瑚珊瑚珠の筋り、銀の鑑、金の輪、小縁ひとまひとまに鈴の音なし、乳母に五色の房を付け、裾におし鳥のたはふれをさまざまに縫はせ、岸の柳に雪をもたせ、冬川の氣色見てさへ涼しきに、あの中に寢ば夏を忘るべしと浦山しく、爰は内裏ちかくなれば、いかなる高家の御物好、皆人極樂と聞きおよびし佛様の寢所も、何としてこんな事あるべし、扱も是れはと驚きける。時に亭主此中へ入り手枕して、ゆるし給へしばし假寢の夢、是に浮世御座、長枕、聲に成る人の果報



は前の世によき種時きて、今はえ出る懸草のはじめ、町人にもかゝる煙入蚊屋、公家も大名も大かたの業は成るまじ、此一釣に貳貫六百目入りける。いかに分限なればとて是は奢の沙汰といへり。面々の身のぐためなれば、近江布の蚊屋に赤根染の乳縁付けしを釣りても、無理に蚊がはひりもせずと、ちひさい氣からいへば、一疊づり程になりて身の置き所なし。そもく近江蚊屋の出所は八幡の町より仕出して、是れ諸國に廣まれり。中にも扇子屋といふ人、昔はすこしの酒片見せに米商賣しけるが、内義才覺にて手づから釣けか辨を持ちて、米酒に限らず、わづか一升買する程の貧者には、利徳かまはず斗よくして手びろう見せける。ほどなく一國によき事いひふらして、在々所々山家の末までも、此町の市に立つ人歸さに此家の兩口より群集して、萬を調べて歸れば、一日に錢の山白銀の洞も出来分限、後には大かたの暖氣には藥の代に爰の諸白にて直しぬ。其家富貴に成る時は、諸事吹き付るやうに心涼しく扇に家の風ぞかし。其後は江州の布高宮買ひとりて國々に出見世、殊東京都四條東の洞院の店には、毎年島布ばかり千駄つつ賣拂ひける。疊の表は大坂に見世出し、次第に大商人と成りぬ。是より年々仕出しの蚊屋何程といふつもりなきに、世界の廣き事思ひやられける。毎日蚊屋縫女八十人餘、乳縁付る女五十人、大廣敷にならびたるは、さながら是れ女護の鳥のごとし。されども是れ程の中に都めきたる娘は一人もなかりき。玉に疵、すぎに出尻、たけが口の廣さ、朝夕の食車とて飯櫃に車しかけて、六尺三人引いてまはり、手盛の杓子百足の足の如し。鞍馬毘沙門もかゝる事所を守り給ふべし。年中の事なるにそれくの人つかふ智恵もあるものかな、二度の仕着もひとりく

の願ひ、染色紋所まで付けて取らせける。此外手代あまたなれば、はや八月より正月物をこしらへし、萬事は手まはし次第なり。是れ迎もやうく且那といはれて、親子四五人の口を過ぐる外なし。しかし一人のはたらきにして數百人をはごくむ事、大方ならぬ慈悲ぞかし。此心の徳ゆゑ下々も草木も醒きて、昔より住みなれたる庭に枝ものふりたる松有り、北野の千貫松淡路の萬貫松にも劣らず、是れ千歳の眺めなり。されば人の渡世ほどさまゝなる物はなし。片田舎にさへかゝる人もありけるに、萬屋基平とて出生京の寺町通三條にて育ちければ、腹の内より都の水を呑み、諸人のかしこき事を聞きなれ、身過は何にしても五人三人は世を渡るべき事なるに、やうく女夫の口をすぎかねしは口惜しき事ぞかし。然も此男手は帳の上習する程なり、算用はむつかしき刺物も將をあげ、銀は兩替より折節は見せに來る事有り。何にても一分別させて事のすまぬといふ事なし、長口上あざやかに、少し料理も心がけ、謠も人の跡につかず、碁將碁も人の相手になりかねず、我一分の外、人の役にも立ちける。されども勝手あしく、所にて商賣成り難く、春は慰み本、夏は扇子、秋は踊道具、冬は紙子、其時其時の物を仕込み、此廿年ばかりも江州にかよひ商ひ、宿には一とせを廿日ばかりも女房共の良を見る事ぞかし。京にはやる咄し小歌を習ひ覺え、商ひする御機嫌取に夜晝あそびものに成て、つまる所は夫婦の口を喰ひて通る分なり。幾年か貳百日の質、のびも縮みもせず年を越えけるに、千本通に母かたの峽ひとり過して暮されしが、いとしゃ頼死いたされしに、我ならは跡申ふものもなければ、此時の物入に銀三十目あまりつかひしが、随分始末しても四五年此銀まうけかねて、何とぞ







昔の貳百目に成る事を願ひしに、旅宿の亭主に頼まれ、在所へ養子を肝入て、思ひの外なる銀六拾目禮をと  
りて、一代の仕合せ、此のたびと喜び、極月廿五日に江州八幡を立て、京都に幸ひの道づれ、爰の間屋より  
拂ひがね持ちてのぼる人、是れ程飽なる事なし。道中いそぎけるに、草津の宿の矢倉といふ所は、姥が餅の  
名物、勢田矢橋の追分なり。近付の茶屋にしばし休みて景色を見るに、鏡山の曇晴れて松に風絶え、海に浪  
の音なく、けふこそ渡し舟の乗日和といへば、甚平中々合點せず、おのくは御勝手次第、我等は步行路へ  
廻り行く、其子細は人の命に替なし、殊に金銀の荷物を定めなき舟につむ事なし、兎角大事の身なれば渡し  
はいやに極めける。間屋若い者立して、はるく道づれ爰までまゐりて、此日和に何の氣遣かあるべし、  
我等は小判千三百兩持ちて此渡しに乗りける、此身其方の身とて何程の替りあるべし、大分の銀持身を大事  
にかけ給へといひ捨てて、矢橋のかたへ行きける。茶屋甚平に申せしは、いつも舟にのる人が、何とて此大  
氣に用心し給ふといへば、このたびは仕合せよく五六拾目も銀子のばしければ、身が大事に思はれて、いか  
にしても舟に乗られぬと、胸おちつけて勢田にまはる。大津のもどり馬はあれど、是にも乗らず行く程に、  
石山の晩鐘聞く比粟津野を行くに、松原より浪人らしき男二人出て、近頃無心ながら今時分の事なれば、よ  
くよくさしつまりたる事とおぼしめせ、年取る物を申し請けると、荷物に手をかけしに、色々詫びても聞き  
いれねば、是非なく肌につけたる銀取出し、二人に入拾目ばかり取られて、扱も物うきひとり旅、身の程う  
らむより外はなし。我一生何程かせぎても、銀三百目より内の身體に極る所を覺悟して世を渡りぬ。

西鶴織留 本朝町人鑑

目錄 二

- ① 保津川の流れ山崎の長者  
仕合せと猿の口より金目貫  
商ひの元手に片一枚
- ② 五日歸りにお袋の異見  
梅は二代もなれどかなしきは老母  
國にひろがる一卷の唐織
- ③ 今が世の楠の木分限  
無用のなつ道具  
本でへらさぬ評判



④ 鹽うりの樂助

島のさいふ書付相違なし  
かくれなき都の聖人

⑤ 常流のもの好

猩々變じて出る目出たき御代  
世間にかくれなき小川屋のながれ

① 保津川のながれ山崎の長者

本朝は天照太神元年より、今元祿二年の初春まで二百卅三萬六千二百八十三年、此國豊に續きてなほ君が代の松は久しきためし、富士を常住の蓬萊山、不老門の東に武蔵野の満月、外天のひかりに同じからず、御紅葉山の木ぞも千秋の色をまし、萬歳まんざいの海龜うみかめさゞ浪靜にすめる、江戸は天下の町人北村、奈良屋、樽屋をはじめ、諸國の惣年寄、金座、銀座、朱座、此外過書くわしよの舟持、世上に名をふれて、これ皆町人の中の町人鑑といへり。時に都の嵯峨の角倉は其家榮えて長者の如し、然も二十餘人の子寶祝ひの水の高瀬川にすぐなる道橋みちばしのわたり初して、此流れに一棚舟たなふねをかよはせ俵物たわもの新をのほし、洛中のたすけと成り龜の煙けむりにぎはへり。又保津川のながれは丹波の龜山につゞきて、嵯峨まで二里あまりの所近代切りぬきの早川、是を自然と乗り覺えて船人力も入れずして岩角いゝかくよけて瀧をおとし、ひだりは愛宕、右は老の坂、此山間の詠め松島を近うしよて見るぞかし。或時山崎寶寺やまざきたからでらのほとりに油のうけ賣して、山家やまがかよひの商人あきんど、此舟に乗りてくだりしに猿さる飛とといふけはしき所を、群猿ぐんざる數かぎりもなく渡りしに、二疋つれたるこけ猿が、栗の梢を傳ひ、此川を渡りかねたる風情見えしに、折ふし狩人のまはり來て鐵砲にねらひよれば、先に立たる猿の身をもだえて鳴きさけび、跡なる猿に指をさして教へければ、狩人笑つていかにおのれが身を助けんやと、火蓋ひたばたを切れば、あはれ二疋ともに落ちけるを立寄りて見しに、一疋は丸に當り、又一疋は身に子細なくて、手に一尺あまりの木



のきれを持ちける。是を不思議と見るに、ふびんや目くら猿なるが、泪を溢し殺されし猿の事を歎くありさま、是がためには子猿と見えける。親に心をつくし年久しくはごくみけると思はれ、早船をさしとめ、各是を悲みしに、狩人は彼の目くら猿も即座にたゞき殺すを、山崎の商人錢二百文に買ひとり、我里につれ歸りて、二とせあまりも備ひ置き随分いたはりける。その年の暮になりて此油賣わづかの事に仕舞ひかねて、借銭の方へ有る物をわたして、身替たゞむ談合を、夫婦ひそかに極めて、朝は所を立ちのく十二月廿七日の夜ふけて、猿にも人間にいふごとく、浮世とて我かく成り行けば、獨ある子をさへすつる時節なれば、汝は此家に残し置く、自らを恨む事なかれと、せめて春までの喰物あるにまかせて、節分の煎大豆のあまりに、黒米すこし手もとに置いて、夜の中に爰を出て行く用意して、炬燵のあげに子を入れ、片荷に小鍋一つ、纏々の袋に粉麥小豆など取りませ、女は持佛堂を明けて珠數取り出して手につけて、辻のぬけたる葛笠を被き、住みなれたる我宿の名残誰かは爰に世帯せん、思へば惜しき香の物桶、かくなるべきは知らず、此夏の瓜茄子鹽の辛い物を喰ふとて無用の水の呑み置き、菟角に欲過ぎたる事はせまじき物と、おかぬ棚までまぶりて鐵漿壺をうち溢し、見ん程萬こゝろにかゝれば、すこしも早く家を出給へと、泣き出せば、男も泪ぐみ、さりとは無念なる世間や、聞けば此程も京には町人分として、壹萬八千貫目の借銀十年切の年賦にして利なしに済ますも有り、此家の年中の豆腐の通ひにメ八百三拾丁、此代七貫七百六十貳文の拂ひ、家に應じて諸事の物入り大分なり。我等は此豆腐の錢を持てば、ゆるりと年を取りけるに、扱も是非なき仕合とひそ

かに立ち出るを、最前の目くら猿女房の裾にすがりて歎く風情、人に別るゝ心地に良を見かへれば、此猿口のうちより虎のかたし目貫を取り出し、内儀に手わたしたいしぬ。男是を見れば金目三奴あまりのむかし目貫なり。是はやさしき心ざしの嬉しや、昔日舞太夫の幸若越前より都にのぼる時、山中にてむら猿、舞を望みて後、太刀を一ふり褒美に出しける。是れ猿太刀とて幸若の家へ傳へり。今又是を我に與へしは天の道にかなへり、是にて節季の仕舞はなる事ぞと、又分別替りて、夜ぬけの事は沙汰なしにして、彼の目貫を兩替して、買掛の方へすこしづつ渡して、世をかざり松もゆがみなりに年を越えて、明けの年は商賣に油斷なく、それより次第に家榮えて、後には手前にてしめさせけるに、おのづから正直の首に付る髪油もよく關の明神へ燈明あぐれば和光の影清く、十四五年のうちに山崎の長者と成り、内蔵にはよろづの寶寺、うち出の小榎は目前の油榎と心得て、桶の木分限といふ物にちくく延びて朽つる事なく、一人の男子も十六になりぬ。渡世の智恵付けに年玉の扇箱をのせたる片一枚に錢二「○原本壹」文添へて、是をわたし、汝が工夫にて商ひの元手にせよといひ聞かせける。一子しばらく思案して一錢にて紙調へ、一錢に糊を買ひ、件の片を張り立て、黒星を書き付けて、鐵砲的の角に仕立て見せけるに、親仁中々同心せず、思ひつきはよき細工なれども、是は賣れの遠き物なり、これを二つに割りて袴の腰板一枚にせよとの教へにまかせ、京の羽織やの店にたより、はじめて錢六文に賣りて歸り、それより我と才覺して富貴になりぬ。親の譲りの金銀にて身を過ぎけるは、武士の位牌知行取て暮すに同じ。されば人出生してより、毎日錢一文つつ溜めて、百より



一割の利を掛けて、六十歳の時は六拾貫目になりぬ。是を思へば萬事に始末をすべし。銀子を借して利銀のかさなるを思へば、これよりよき事はなしと思案して、銀一貫目有る時、山崎の親の跡を捨て置き京にのぼり、大名借の銀親へ頼みて、是を預け置きしに、元壹貫目の銀を一分の利にして、三十年其のまゝに借し置きけるに、元利合せて二拾九貫九百五拾九匁八分四厘一毛になりぬ。此丁銀箱入にして請取り、是より次第に借し掛けて、程なく千貫目持ちと成り、それより一代のうちに七千貫目儲に有り銀、廣き都に三十六人の歌仙分限の内に入りぬ。そもく親の手前より片一枚錢一文もらひしを、かく長者になる事町人の鑑なり。洛陽分限袖鑑の第二十八番目に、山崎屋と見えしはこの人の事なり。子孫つゞきて棟をならべ門の松を飾り目出たき春をぞかさねける。

## 二 五日歸りにおふくろの異見

六分にまはれば大屋敷買うて借家賃取る程儲なる事はなし。火難一つの氣遣ひ、それは百年目、十四年には本銀取返し、地は永代の賣ぞかし。近年分限なる者ども我が名代にして家を求めても、借屋の出入をむつかしく、たとへば百貫目にても其高に應じて帳切銀さへ才覺すれば、何程にても銀子取替へ家の主となし、年寄五人組の連判にて賣券状の上に、利銀は家賃分にして是たしかなる借物なり。又借人の心せはしく、然も内證にて濟む事にあらねば、町所へ外聞を包むにもあらず、何が勝手になる事ぞといへば、西國を引請けて

新問屋する人、又は請判に立つ人、あるひは在郷より數銀の付く養子、又は親をよび入る思案にて、先づ居宅見せかけにして、自然とよい事をしすましたる者も有り、今時の縁付仲人十分一取るによつて、大かたはかたり半分なり。娘の親のかたには偽りいふにしてから、二十二三迄も振袖着せて置て、十七の八のと年を隠す分にて別の寒なし。男の方に偽いふからは頼み云ひ入の絹巻物、包銀も當座借りにして婚禮調ひ、數銀を請取るといなや乞ひつめらるゝ手形銀を濟し、はや五日歸りより物毎に品あしく、仲居お物師もけふまでの約束と、祝儀のすくなきに不足いひて、親御の乗物より先に立て歸る。里へのみやげ物に菓子屋へ相重取りに遣しければ、前々の銀子大分なれば、又其上には掛商ひならぬといふ。肴屋からはある鯛を無いとておこさず。やうく紙屋を文作り何にも角にも杉原を進上物に親をおくれば、介(○原本貝)添お乳は歸りく不首尾一つくおふくろに告げて、まだも足下あかいうちに御分別をあそばし、荷物取返しにといふ。女の身の悲しさは爰なり、はや自由ならぬ事ぞ、世の聞えも宜しからねば、何事も沙汰なしにして歸しさまに、數銀の事は是非もなし、衣裳手道具を借せというて、質に置かれては取返しなし。何事も母人に問はねばなりませぬと、小袖一つも借す事なかれ、もし姑がつらく當らば、此方へ見舞にくるたびごとに、二つ三つ鹿子の物を知れぬやうに風呂敷に包ませ、幾度にも長持を明がらにして、縁を切合懸に身を取りまはしたがよいぞ、とかうする中に身持になればむつかし。子ない時に餘の男を持ち替へたがよい、男に飽かるる仕掛は朝寝して髪結はず、氣が盡きて立ちぐらみがあるとて、費も高枕して物いはず、朔日廿八日にも無理に負



つきをして見せ、鮎焼物も口にあはぬとせよと著して、忙がしき中に汁粥を好み、一門づきあひにも阿頼形氣に見られ、三日に一度づつかまさま見舞というて歸れば、後にはいか成る男も退屈して物云ひする時、御氣に入らぬ女房を一日も見て御座るが悪い、さらりと埒の明く事ぢやに、世界に女早はず、お物好きな當世娘が何程にても御座る、わたくしが横ぶとりて風俗の悪いは拾貫目の數銀と、今でも阿希様のお果てなされましたれば、新地十間口の家、然も酒にて裏に借蔵まで建ちつづきを所務わけに取ります、此家と銀とで見てもらひますと、我がまゝに云ひつゝのり、まことのつまりには此方から埒明けて、せかすとも黒髪先すこし切りてなげ付け、近所へ響きわたるほど泣き出し、人集めしてそのまま立ち歸れ。親の身として世帯を大事にかけよといふべき物を、男惡みして戻れと惡事をいひ含めけるは、よくく聲の仕方よろしからざる故なり。女の大事愛ぞ、母が言葉一つも忘れなといへば、娘も是れを至極して、其心に成て男のかたに歸るに、一日づつ夜を重ね、なつかしげなる心たがひに通ひ、いかに親の御意なればとて、又男を持ち替ゆるも人の本意にはあらずと、母の手前を背きて、内證の勘當かまはず、男と一つになつて、身の裸になる事は扱て置き、後には手せんじする事、世にあるならひぞかし。昔の名残に有る程の小袖一つく質に置きあげ、人の帷子時に古給を身につけ、世上に輸入着る時、ときあげ物に風をしるぎ、世に有る時の形はなかりし。物毎後には合點の行く事あり。貧者になつて當座のがれに質を置き、請返すといふ時節なければ、當銀に賣り捨てて渡世すべしと、年久しき小世帯人の語りぬ。菟角年々つもつて恐しきものは質屋の

利銀ぞかし。生平の蓄ふるし一つ加賀の茶小紋の夏羽織、此二色をそもくは元銀七匁五分借りて、秋より明くる年の夏まで預け、元利揃へて毎年請出し、置いたり取つたり十九年に拾七匁一分の利をすまし、近年は次第に元銀さけて、やうやう五匁五分づつ借りて今に預けける。又家質の事もよき商ひを見掛け、手まはしのために借る人は各別、親代より其宿質にて世を暮せし人、子の代に成て無用のつゞくり普請、又はおのれに過ぎたる萬事の奢より内證さしつまりて、同じ軒をならべて我物喰へば何か恐るゝ事もなきに、加判してもらへば、五人組年寄に口をたれ、はや町中の思ひ入替りて、町代も外程には腰かどめず、髪結もおそくまはり、心掛りの事どもいと口惜し。物見花見にも友はかはらずさそへど、何とやら肩身すぼりて、覺えたる世間咄さへひかへて、おのづから人のまじはりとし。此家質置く時より何して済ますべき分別なしに借りければ、程なく利銀一つ書き込み、手形仕替へて年をかさねしうちに、賣出しも残らぬ程に成て、其の切を過ぐれば、借主より催促せられ、埒のあかぬ事に幾度か町内へやかましき事を聞かすれば、最前はいとしやと悔みし年比別して語りし人も、後にはうとみて借かたのせりたつるやうに内證いひて、是非なく家を渡せば、老母ひとしほ歎きて、此町に井戸の一つもない時より、此屋敷を求めて、二代も手のかゝらぬやうにとて節なしの六寸角、此年まで此大黒柱にもたれかゝつて、水もらひにくる者に、かみさまとて腰をかどめさせ、茶事の座敷へも三番とさがらず、つれあひの蔭にて人にもてはやされしに、一人も一人からと悴子が一心わかきゆゑ、今となつて穴のはたを臥きかゝり、葬禮は此家から花をふらして浮世のかどで、中戸の上







の高いは玉の興の自由に出るやうにと、こんな事まで氣を付けておかれし所を、別かるゝ事の悲しやと、明藏を詠め、杓子掛を引きはなち、庭に豊後梅の花落ち比なるに、是もうらめしさうに、毎年五月には三斗四五升も取りけるに、思へば惜しやと、枝々をたゞきおとし、此木我涙枯れいかしと、無理なるしかた、女心には道理千萬といへり、さぞ離れがたき心底思ひやられし。一子覺悟のあしきにかゝる憂きめを見せける。しかし人の身體智恵才覺にもよらず、其のまはりあはせにて、其家たたむ時は他國して二たびかせぎ出し、古里に歸り妻にも錦を飾らせてこそ本望なり、女房に心ひかれ其所にて指をさゝれ、幽なる住居するは人間にはあらず。其比大坂の西濱にて商賣せし人、數年おろかなく渡世大事にせしに、さまざまふりかへても思はず、いまだ此身無事のうち遠國に立ち越え、身過ぎなるべき所を見立て、老の樂みは金銀なりと思ひ極めて行くに、中國路は上方に近ければ諸事都に替る事なし、四國の内もおもはしからず、九ヶ國のうちを残りず廻りて、薩摩國の城下につきしが、長々の路錢につきて、旅寢の宿を借るべきたよりもなく、和泉屋町大小路といふ所は船着に近く、何時によらず米味噌鹽を賣るために、燈火家々にいまだ寢の宿も有り。せめて餅屋をたづね、門の戸をたゞき餅買といふ。夫婦ながら今ねたと聞えて、鼠の荒るゝを追ひ廻しけるが、かゝが聞き付けて餅はいくらがのといふ。五文がの賣りてくだされといふ。亭主が睨して、寢てからは五文や十文がのは賣らぬとて、其跡は返事もせず。扱も此所かせぎて見たき湊なり、五文が餅を賣らぬからは、商事のあり餘ると見えたりと、身上爰に極めて一日暮しに年をかさね、わづかの油賣より質仕出

して次第に家榮え、是と申すも佛神の御めぐみなりと信心ふかく、田の浦といふ所に祇園の立たせ給ふ、是れに日參して祈りぬ。此濱の景色諸木岩組常に變りて、古代より仙家有りと云ひ傳へり。ある夕暮に參詣けるに、十四五なる艶女の近寄り、懐よりふるき絹一卷取出し、母を養ふたよりにいたせば、是れ何程なり共求めて給はれと云ふ。心ざし不便にそれまでもなしと、折節有合せの銀廿匁あまり渡せば、只は申し請けじと、是非絹を置いて歸る。然れば取て戻り、見る人に見せければ、是れ小蔓といふ唐織、世に稀と云ふ。其後彼の女の許を尋ね返しに行けど知れ難し。扱は祇園女御の興へ給ひし果報とて、都の人に黄金八十枚に代なしてより、次第に分限と成り、子四人それ／＼に棟を並べ、世渡りは衆も溢さぬ油屋と、家名其の隠れなし。財寶の外隠居分とて有銀三千貫目、大坂より爰に來ての住家、人皆見および其身一代のはたらき、是れ町人の鑑ぞかし。殊更正直を本として、すゑ／＼目出度はそなはりし仕合せなり。是を思へば商の道をしるる人の、うかくと身を持ちくづし、貧乏神とあひ住みして世を果つる事、人の本意にはあらず、合點して見給へ。

## 二

いまが世のくすの木分限

吉田の兼好が東隣に同じ北面の侍榎木原信道といへる人、屋形ならべて住みける。いかに禁裏の役人なればとて、五十餘歳まで錢に文字ある裏表をも見しらず、然れば短冊の上下をも覺えず、公家にも俗にもな



らず男、明暮暮に打入て、三百六十日の立つ事を忘れ、大年の晦日には借銭に乞ひたてられ、其時代も覺悟  
わるき人の迷惑、今の世に變る事なし。留守つかうて戸をたゝかれたる有様、松など灯し連れて夜の明くる  
まで酒屋で御座るといふ聲、せはしき人の心を習き残せり。又武藏坊辨慶が馬大豆八斗の借狀尼崎にあ  
り、伊勢三郎義盛が頼帳の百姓に五百貫の借手形もあり。これらは義經につかへて、然も辨慶は藤重けれ  
ども、無用の七道具をこしらへて身體ならず、義盛は始末して手前よろしきといへり。世に貧福の二つは  
是非なし。昔日京に吉文字屋といふ家久しき手代二人、數年親方のために私なく内外ともに勤めければ、  
主人にそなはる仕合せとはいひながら、此二人がはたらきゆゑ、有銀壹萬貫目と惣勘定を仕立て、正月初帳  
に移し見せける。親方も兼ての願ひ、一萬貫目に叶へばこのうへに望みなしと、身のよろこびをなして、け  
ふより諸事をつぎの手代にわたさせ、先づ兩人は別家を持たせ。一日替りに出入奉公と定め、よき所家屋  
敷普請までして、銀貳百貫目づつとらせ、兩方ともに兩替見世を出しける。元より道を知りたる事なれば、  
借入の取りまはし、小判の買込み、錢の賣置き、一厘も損するといふ事なく、年々分限になる事、其身才覺  
ばかりにあらず、是れ皆且那より望望もらひしゆゑなり。一人はいまだ十年立たぬ内に、はや五百貫の身  
體になりぬ。又一人は親方に渡されし貳百貫目今に延びず、やう／＼渡世をして暮らしぬ。此兩人の内證を  
聞合はせ、同じ銀子を請取ても、手まはしによつてあの如く成る物ぞと、指さしせぬばかり、手代仲間にて  
沙汰しける。親方此事を聞き付けて、何か愚智のおのれら、身すぎにかしこき者の事を評判いたしけるぞ、

あれなればこそ今に本銀へらさず世をわたりぬ。其子細は我が世になつてこのかた、仕合せつゞきて一つも  
さはる事なし。又一人は世帯持ちて其年より、人の氣つかぬ物入り相つゞき迷惑しける。何の考へもなく人  
の身上を沙汰いたす事、おのれが了簡の及ぶ所にあらず。このもの女房の頼みをやりける宵より、あら氣の  
毒や、最早いかほどかせぎたり共銀も延ぶまじと、高くくりに思ひしなり。汝等も知ることく舅は八百貫目  
と世間に指したる分限者なり、娘は年若くしかも町でも沙汰する程の器量よし、われ知らずの物入り有と  
は、あたまから知れたり、舅は年中壹分の利合にしても八拾貫目の男なり、甥は漸う貳拾貫目、たとへば大  
勢の敵を、小勢にてふせぐに勝利を得る事はなし、つひには追ひ倒さるべき事なれど、桶にも劣るまじき商  
ひの軍法者なればこそ、いまだ本銀にて城郭を堅めけるは、よき大將ならずやといはれけり。手代ども聞て  
寔に一生に一萬貫の身體となられける、天晴よき大將、智有り仁有り勇有りと、みな／＼たのもしく奉公を  
勤めける。

#### 四 鹽うりの樂すけ

栗田口神明の宮のほとりに、軒端に手のとどく笹葺の庵をむすび、夫婦すみ侘びて六十餘歳まで子のなきも  
の、ゆくすゑの悲しさは、女房は男の手業の杓を作りて、窓の奥竹に結び添へ、大津に通ふ馬方に賣りて、  
渡世のたよりとなしぬ。男は毎日京に行きて斗鹽を商賣して、やう／＼けふを暮らし、明日の身の上をかま



はず。宿に歸れば栗栖野小野の萩柴を折りくべて、山科の里芋に勤修寺の煎じ茶して、樂み是に極めて、世にある人の榮花もうらやむ事なく、只年中を夢の如く、正月に餅もつかず、盆に鱈もすわらず、九月の節句ちかづけども、栗菊酒の用意もせず、取り集める掛銀もなく、人に濟まする借錢もあらず、扱もかろき身體外より見ての苦み、内證の樂介各別ぞかし。折ふしは九月八日我人物前とて足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女も、とりなりかまはず道いそがしき世間憚りなく、中立賣の中程にいつれの御服所とは知らず、表口拾五六立つどきたる家普請、けふ棟あげの祝儀とて、暮うちまはして金屏毛氈色をあらそひ、庭には樽肴持ちつどひて帳付帳もなく、臺所の役人それ／＼にうけたまはり、一門の女中花をかざり、表客は松竹の島臺まはして、酒宴はじまり、さまざまの藝づくし、いづれも七盃機嫌の大笑ひやむ事なし。番匠は烏帽子装束をあらためて、白幣をかざし、鬼門よける弓矢をそなへ、拍子をそろへて棟の榎をうちそめ、萬歳樂と言葉をかさね、五百八十の餅を蒔けば、是れを拾ふ人大道もせばかりき。立ちとどまりて見る人ごとに、かゝる作事をして世を渡るこそ長者なれ、あのごとくして子孫に渡したき願ひなきは一人もなし。財寶に望みなき人は、何となくうち詠めて通りぬ。立ちとまる程の人は、皆人の費をかぞへて、殊更内蔵に目を付けけるは、何の用にも立たぬ欲なり。此のあるじも二十年以前までは挑灯のはりがへして、火ふく力もなかりしが、何から分限にならぬといふことなし。すこしの事に氣をつけて、盞油にきらを引て、雨夜のちやうちんといふを始めて、今七千貫目持と世間のさしづに違ひなし。おさかきたこの手せし人にもあ

らねば、都にも昔は大かたに吟味して、歴々の縁組せし事、言ふもくどけれども、菟角世は銀の光ぞかし。彼の鹽賣りばかりは家作りの望みもなく、よき障して小歌にひやうし踊を面白くしばらく吹きて、見物皆々立ちのきける時、奥島の財布を拾ひあげて、是れおとしたる主はなきかといへば、年の比五十あまりの法體の人、我おとしけるにもらかし給へといふ。成程返し申すべし、しかし疑ふにはあらねど、中には何が入りけるぞといふ。こまがね百目ばかりありといふ。鹽賣大きに顔色をかへて年にこそよれ、扱もさもき心底なり。中は金子なれば其方の物にはあらず、これおとしたる人、我が宿にたづね給へと、まぎれなく所をふれて歸りぬ。その夜室町通り西行櫻の町菱屋といふ絹屋の手代たづねて、小判百貳拾兩西國問屋より請取り、主人の手前迷惑仕る段々ことわり申せば、百貳拾兩との書付に相違なしとて、何のをしげもなうくれける。手代泪を流し喜ぶ事の限りもなく、外の手に渡らばよもや我には歸るまじ、すぐに欠落の身を二たび京都に歸る祝儀とて、そのうち小判五兩禮物に置きければ、鹽賣中々是を請けず。是れは其方の金子にあらず、主人の物我にわけらるゝゆゑなし、申し請くる事思ひもよらずと、たび／＼返せば是非なく取りて京に歸りぬ。此手代其恩を忘れずして、それより後は雨風雪の日の難儀、鹽賣京に出かねる日は人を頼み置き、定まつて鹽を二斗づつ買ひに遣はしければ、鹽屋は天のあたへとよろこび、彼の手代がはたらきとは知らずして過ぎぬ。厚恩を忘れぬ心から、手代も其後は我が世の仕合せ續きて、近年書繪小袖を仕出し俄分限となりぬ。其比又上京に鹽れもなき名醫のありけるが、名人は必ず氣隨にして、御所方への御出入をむつかし







と、是れも粟田口に引込み、靜なる片原町に物好の生垣奥ふかに住みなし、爰も東海道なれば、諸大名の下上りにも王城の忝さは、高腰かけて鼻歌うたへど誰とがむる事もなし。此法師或時夕立しての後、下駄はきながら我門に立て遠見せられしが、彼の鹽賣夕ぐれに京より歸るをみて、内にてけり給ふを、おの／＼不思議を立、あの鹽賣などに何として恐れ給ふぞと尋ねければ、あれは今の世の聖人なり、聖人にあしだはきながら對面するも恐れあり、又ちかづきなれば下駄ぬぐまでもなし、とかく御目にかゝらぬがよいと申さるゝ程に、あの者を聖人とはいかなる事ぞといへば、それを知らずや、今の世金子を拾うてかへす事が、そもや／＼廣い洛中洛外にも又あるまじ。是程の聖人唐土も見ぬ事と仰せられける程に、いづれも尤と合點して、彼鹽賣におそれ侍るとなり。

五 當流のものすき

名利の千金は頂を摩るよりもやすく、善根の半銭は爪を離すよりも難し。されば今の世の萬人身過ぎの家業是れさかんの時、諸事をうちばに構へ、利欲を捨心に成りけるは、近年世間に佛道を聞き入れ、自然と氣力うさつて、只當分の暮らしを樂み、すゑ／＼の事までの願ひはなかりき。此心底からは富貴になるべき子細なし。福徳祈る商人の家に世の無常を觀し、人の歎きにかまふ事なかれ。商賣に付ての偽りは言葉をかざり、跡からはげる塗物店、江戸に軒をつゞけ門をならべし中に、大森小川此兩見世はすぐれて諸道具念を入

る事聞き傳へて、其家名次第に榮えける。そも／＼小川屋のあるじ正直を本として、わづかの世わたりなりしに、繁昌に成りける始めは、正月に閏のある年、元日に大雪降つて、通り筋人馬のかよひ絶ゆるほどの曙に、大釜に湯を沸かして我が門の雪を消して、慈悲の道をすこしの間なれども付け置きけるに、往來の人爰におのづから立ちとまりて、年玉の遺ひ物、火箸間鍋または餅あぶり網など、買ひよる人蓬萊の山をなして、一日五十兩あまりが當座賣り、まことに天下の入り込みなれば、近付の外人同じ良にあらず。その夕暮に五十ばかりの法師、麻の衣の袖まくり手して、竹笠を西行被きに雪打ち拂ひ、彼の店下に立ち寄り、盃一つ望みのよしいひける程に、色々取り出して見せける。この御坊酒好きと見えて、盃ちひさきをなげき、我常住の樂みに是れを呑むより外はなし。むかし上戸ののみつくさぬとて名を付けし武藏野といふ大盞はないかといふ。二合入りにつきもりたる盃を見せけるに、いづれを見ても蒔繪に菊水、立田川、又は伊勢えび、是れらは目にしみてふるし、新しき仕出しもあるに、當流の物好きなるを見せよといふ。手代あくみて扱もしれたる御坊かな、漸う盃壹枚賣るといはいか手間人なれと、此見世に望みの盃なしといはれんも口惜しさに、切子の灯籠上に釣り、下に節季候爰をせんと舞ふ所を高蒔繪にしたるを見せければ、法師うなづきて機嫌なり。法師のいはくそれがしは唐土薄陽の江に住む猩々なり、今この朝に化身せり、わがたよる所は必ず家さかえ繁昌するぞかしと、云ひ捨てて立歸るを、手代まことしからず思ひて忍びてしたひみれば、築地の邊にわづかなる庵をむすび、行ひすましたる道心者なり。先づ猩々の事は偽にしてから、此坊主の言葉少し



もたがはぬは、亭主正直なるを天のめぐみ給へると見えたり。

西鶴織留 世農人心

目録 三

① 引手になびく狸祖母

算用なしの預り手形  
御前に正月の夜あそび

② 藝者は人をそしりの種

六月に雪ふらすも不思議にあらず  
今の世のはやり俳諧も一興

③ 色は當座の無分別

三匁惜みの千貫目しらす  
かなしき時のうり物



④ 何にても智恵の振賣

毎年師走のはたらき男  
猫の蚤取手がはり

① 引手になびく狸祖母

御代ちとせ山松は古今不易の名木、春の風しづかにして四つの海に立つ波もなく、今本朝の風俗しだゆづり葉を賣る山賊、ほだはら數の子を賣る海人までも、其心ざし皆和歌になつて八百日行く濱の眞砂はつきぬ道廣く、かゝるゆたかなる時世に住める萬人仕合せぞかし。されば近年人のありさまを見るに、いづれか愚なるは一人もなし。むかしは十人寄れば皆物毎にうとく、我が身の事ばかりも皆明くる者稀なり。ましてや人の事請取り出入の變ひ、又は内談などに、言葉ならべて物よくいふ人もなし。殊更公事だくみにして筋なき事を書き求め、相手に迷惑いたさせ、我が利欲にする事思ひもよらず、自然と義理につまれる言分にも、一つ／＼ありのまゝに書き付る筆者は、五町七丁のうちにもなき事なりしに、今時は物かゝぬといふ男はななく、何事にても外の智恵をからず、面々に諸事を濟まさぬといふ事なし。是れゆゑ悪心も思ひ付、人の難儀をかへり見ず、商賣あるひは借銀の事までも我が非分とわきまへながら、言ひ事の種を拵らへ、油斷のならぬ人心や。以前は借り請けたる金銀などにかうの出入する事なし、子細はそれ／＼の家業に付一商ひすれば、必ず利徳を得る事を見極め、この質のために其分際相應に借りて、思ひ入の商賣の後其のまゝ元利そろへ濟ましける。此程の人は何の分別もせず、はじめから相濟まする合點なく、奢の心より遊興所へつかひ捨つる銀にかりければ、此のかねの出所なし。然れば借しかたに難儀をかけ、云ひ事の種を作りぬ。此の善惡







明白に御扱あればこそ、恐れて我がまゝいふ事なし。たとへばいかなる悪智恵をもつてとやかくいへるにして、借りたる物一たびは取らずにおく事なし。是れをおもふに元日の祝儀しまひ、袴ぬぐといなや、又くる年の大晦日も月日の立つは今の事と、しばしも忘るゝ事なかれ。世に何がこはいぞといふに、酒の酔も道をよければ別の事なし、氣ちがひの抜きたる脇指にてあやまちをせぬ物なり。夜道ありかねば追刺にもあはず、思ひの外なる欲をはなれければ、かたりに逢はぬものなり。皆人々の覺悟にある事の中にも、第一身體を持ち崩して借銭こはるゝほど、恐しく悲しき物此外に又なし。さてもくうたての世や、身過ぎに仕合せありて、屋造も人がましくせし人のいへる言は、随分と愚かなる事にも、人皆耳をすまして聞届け、又手前淺間しくなりくだりたる人の一言に、利のせまりたる事を申すにも、誰か聞き入れける人なく、萬につけて口惜しき事のみ、心にもなき事に疑はれぬ。世を富貴に暮せし人は、人の金銀取り亂せしほとりへも何心なく居ながれ、又貧者は我と身を引てわづかなる亂銭のそばへも寄りかね、心にやるせなかりし。何程律義に生れ付ても、まづしき人には先より油断せずして、手元に有り合ける小道具なども、目に見えて取り直しける、此の下心のはづかし。申しても申しても貧にしてうき世に住める甲斐なし、いかなる前生の約束にて貧福の二つ有り、福者は招かずして徳來り、貧者は願ふに損かさなり、さりとはまゝならぬ世上沙汰、見るに付け聞くに付けうとまし。其身仕合せは町人にかぎらず、武家にありける事ぞかし。さる大名がたに御吉例とて正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかり召しよせられ、賈引を仰せ付けられける。ふす

ま障子の内より五色の長緒を數百筋なげ出して、手毎に一筋づつ引き取り、此緒のすゑに付け置かれし物をくだされける。小扨引出す繩に桑の木の檜木杖をかし、家老職の人引出す繩に銀錢一貫文、あるひは唐織の巻物を引出すも有り、又は御物ごしらへの脇ざし、かたはしには春白のふるきに取りあたるも有り、提重箱、なきなた、印籠、きんちやく、日傘、殿子の夜着ふとん、ふりじやくしを取るも有り、知行取りは黄金に引き當て、茶道坊主は乾鮭一本のぬしに成り、横目役の人に自然と目がねのあたるもをかし。ひとりひとりの果報を見るに、かるき者の重き物に取り合けるは一人もなかりき。爰に嘉例の年男とて、八十六歳になれる人、手をひかれてことぶきを勤めけるが、我も物の數とて人まかせに取てくれたる繩を引き出しけるに、奥上藤の中にも梅垣のと申して、都より吟味をあそばしおかせられたる大振袖をくだされ、是れはこれとは興をさましける。又男盛りの出頭人、然も色を好みけるが、人の手の繩より取にして、さまざま観念して引きたぐりければ、大殿様の時さへ古狸と名に呼びし百三つになる祖母を引き出せば、一度に春の初めの大笑ひ有りて、御機嫌の上島臺の酒事、萬歳樂とぞうたひける。

二 藝者は人をそしりの種

諸藝を鍛錬する事、それ／＼の家業の外は、ふかゝ其道に入る事なかれと、古人の言葉一つもたがふ事なし。唐土の鄒燕といふ人、筆に五十年來の心を盡し、七十餘歳にして妙を得たり。六月に冬の調子をふき



て庭前に霜をふらし、萬人此の音律に目をよるこぼしける。かくの如く學び得て程なら世を去りしに、身の  
一大事の覺悟もなく、子孫に傳へ難く、わづかの遊樂何の益なし。此外左慈道人、我朝の果心居士、これら  
が技術の法は亂のもとる、年月手練して何か世のたすけ身の爲にもならず、人間の第一は筆道執行の後、學  
文の外なし。今の世の人心分限相應より高うとまり、鞠場の柳陰に日を暮し、九損一德に早足がきけばとて  
別の事なし。闇き夜は挑灯もたせて靜に行は、霧へははまらぬ物も、殊更楊弓官女の業なり、いかにしても  
大男の慰み事にはぬるし。なほまた諸職人の鍔鋸を持ちたる手には似合はず、よし又百筋ながら當り、あ  
るひは大金書の看板に付てから何、此矢自然の時の用に立ち、せめて盗人を射とめるにもあらず、看引く猫  
にあてゝも更におどろく事なし。十柱香はいよく福徳そなはれる隠人の花車あそび、是れ聞き分くる鼻  
にて食のこげるを聞き出し、釜の下の薪をひかすれば、始末の種にもなるぞかし。茶の湯は道具にたよれ  
ば、中々贅者の成りがたし。萬事あるにまかせて佗たるをよしといひ傳へり、是れ利休の言葉にもせよ、貴  
家にてはおもしろからず、事の足りたる宿にして、物好をさびたるかまへにいたせる事ぞかし。しかじ世に  
住めるからは功者の中程に居て、人並に呑むほどの事は知るべし。又能はやし亂れ道成寺まで傳受して、其  
身太夫に望みなく素人藝には用なし。耳近き小諸覺えて、近所の祝言ぶるまひの間にあはすれば濟む事な  
り。地狂言は子ども時なり、髭のはえたる口から熊出たる者は、大いうつけの沙汰して、見る人汗をかきけ  
るに、此男の母親ばかり譽めける。立花は宮御門跡方の御手業なり。野邊遠き四季の草花品々を見給はぬ人

のために、深山木の松柏柴人の手にかゝるを集めてあそばされしに、近年いづれも奢る心より用捨せず、  
木の櫛をもぎ取り、鉢植糸の梅もどきを引き切り、靈地の荷葉を折らせ、神山の栢をとりよせ、我がまゝの  
ふるまひ、草木心なきにしもあらず、花のうらみも深かるべし。是れ只一日の詠め世の費なり。扱又小商人  
の基將基、侍の三味線、町人の兵法、出家の淨留利、百姓の諸禮がた、これ皆よしなし。世間に此類あま  
た有り。されば和歌は和朝の風俗にして、うぐひす蛙までも、其聲其姿なり、いはんや生ある人の此心ざし  
なくて有るべからず、時に連歌の掟をゆるがせにして俳諧といふも、これ歌道の一體なり。わかしは世を隔  
になす人、あるひは神主、又は武士のもてあそびにして有りけるを、近き年世上にはやり過ぎ、人のめしつ  
かひの小者下女までもいたさぬといふ事なし。惣じて藝事すゑの手に渡りて捨たれるためし有り。昔日  
の俳諧師は歌書を大かたに見わたり、遣しる人に禮式を習ひ、貴人法體の下座に付き、諸事宗匠の下知に委  
せて、心に誠あれば自然と神慮に叶ひぬ。いづれの連衆にてもよろしき付句をいたされし時は、座中肝に銘  
じ我をおぼえず同音に譽めて、持扇のはしに書付け、好ける人に是を聞かせける。また點取の巻してつかは  
しけるに、其比の點者は百詠一句々聞きかたを脇書にして明白なり。又作者も俳道のわかまへあつて、  
すこしの差合同字、見おとしの吟味をとけて、たがひの執行になしぬ。今時の點者といふを見れば、きのふ  
まで馬は生類になりまする、牛は闇に二句嫌ふかたとたづね、はなひ草口から四枚も覚えぬ者が、菓子袋に押  
すやうなる印判をこしらへ、軒誠にびくりさせ、一句一錢の點取に讀めぬ所は評書なしに付墨し、鹿のうち



こしに紅葉鳥をしらず、有馬の湯は水邊になる事も、鴟は俳諧やら、鳥は連歌やら、何を一つも聞き分くる事なし、作者唐人なればこそそのまゝに濟む事なれ。此點者に成て諸國に名を知らるゝ程の人は、まづ廿年をへて八百八品のさし合ひを中に覚え、是より見合文藝に當座の了簡かぎりなき物ぞかし。かりそめたがら此程の宗匠達、せめて席振なりとも見習ひ給へ。此の偽りの心からは住吉へ參詣し給ふとも、神は見通し内陣から誠なき俳諧師がまゐつたと、御貝をふらせ給ひて請けたまふまじ。此時の一座見るにたとへよき句をいたしても、氣に入らぬ貝つきして居るは、おのれがよろしからぬ句をいたせる時のためなり。扱下座より宗匠をさしおき、平連衆より差合の吟味、是れ法になき事なり。つらく思ふに點者愚にして徳のなきゆゑなり。作者の貧富にかまはず、誠をさばくをまことの宗匠なり、まことに和歌のはしくれなる俳諧さへかくすたり行けば、ましてや外の諸藝の師匠も是になぞらへて知るべし。さりとはかしこ過ぎて、今うたへの人心にはなれり。

二 色は當座の無分別

人間一日の遊樂あけぼのに生じ夕に死す。思へば夢のかり枕、よろづに心を移す中にも、遊君のたはぶれば和漢に古今やむ事なし。楓橋の夜泊に客絶えず、琵琶かきならして唐人歌をきけば、和朝の色里都の島原にうたふ投節に同じ。死なざやむまいと聞きしが、いづれ生きて息の通ふうちは、中々人の異見我が分別にて

も留り難し。諸國其所所の遊女にほだされ身體をつぶし、さまざまの難儀にあへるを、眼前に見およぶ事も其數限りもなし。かゝる事皆人の身の上のやうに覺えて、一日暮しに遊びて、有る程はからりちんとなし、からるる程は借り集めて使ひ捨て、跡へも先へも動かぬ時、石車を銀にしてはしやと願ふに、思ひばかゆかずして、自然と止らねばならぬ首尾になつて、彼の里がよひをやめける。其時は男の魂といふ脇指一腰もなくて、物の見事に身を丸腰にてをさめけるもかし。されば人間一生の中に、一たびは傾城狂ひに取り亂さぬといふ事ひとりなし。何とぞ面白き中程にて神佛の御ひかへあつて、此の遊興をやめさせ給へば、居宅も賣り残し、商賣物も小體にして渡世に取りつき、身を捨て、儲きければ、町内世間の人、親類のすゑくまでも、今迄は若氣と了簡してゆるしぬ。人として慎むべきは此道、今更いふまでもなし。昔かしこき親仁達も諸書に此事を残しぬ。其比難波の津に二代つづきて隠れなき人、銀が銀をまうけし兩替見世を出して、一つも替つたる事にかゝらず、仕付けたる家業ばかりして、段々に分限に成て、所のよき大屋敷ども求め、此宿賃ばかり三十貫目一年に取て、大和のうちには體なる田地を買ひ置き、この作得一年に八十石をさめ、財寶有銀三千貫目惣領に相渡し、すゑく兄弟は世間に笑はぬ程に身體わけ取らせよと、書置は一枚にして此親仁は相果てられたり。此の跡取親の心ざしにまさりて、萬にしはき生れ付き、五歳の春、着初め袴を我が手にかけて繰延ばして思ふまゝに疊み置き、玉ふりくの箔のはぐるを惜み、紙に包みてこしける。是より親も安堵して一生身を持ちそこなふ者にあらずと、手代どもにすゑく頼もしくいひ渡されし



に、いよいよ十七八の比、世の人に替りて菟角外へまじはる事なく、義理をかきてこまかなる算用ばかりして暮せば、大勢のめしつかふ者も、一日物見遊山に出る事もなりがたく、晝夜商賈の事のみ油断なく、此家の長くをさまる事をよろこびける。されば世の人心何時となく替り行定め難し。此の跡取二十一の年まで、つひに色の道をしらず、只一日の慰みには金箱の数を内蔵に入れてよみあそびしに、或時草履取あがりの若い者、折々の氣のばしに、蜆川にあそび、巾著銀をつかふと聞きて、其茶屋にたづねゆき吟味仕出して、ことごとく異見して、當座に暇出すといへば、此の若い者面目失ひてにげて歸りし跡に、此旦那を引きとどめ、お首尾はともあれ、酒代おかずにござりました、こなたさまより申し請くるといふにぞ迷惑して、此の座敷其のまゝ立ち難くなりて、連も銀出すからは只歸るは一代の損と分別極めて、此男はじめて分ある女の手におもしろき物といふ事覚え、是れより毎日かよふ程に、出合がしらに貧なる太鼓が付て、風呂屋者をすゝめ、是れもさもしき所ありとて、おし出して十五女良を買ひ初め、又各別とおもふ時、禿の木綿布子目にしみ、又は襦袢の付たる衣襲も、後には氣の付く折ふし、天職のゆたかなる道中を見て、又是れに心を移し、次第に奢つきて、人も名をしる程の買手になれば、はや天神などまだるくなつて、太夫職になじみて此道にしやれるほど、揚屋の下々までもかゆき所へ手の行くやうに、ぐわらり／＼と嬉しがらせ、太夫を手に入、自慢して、外の男をせきて金銀の費をかまはず。無理なる口舌を仕出しても、一度も負くるといふ事なし。世界廣しと申せども、我にはりあふ買手あらば、おそらくは威勢くらべ、今日から十萬日にも慥に請

取るこの大じん、今の世の御の字の客、其の子細は若うて無事で銀を持ちて、親がなうて其身利發で、しわうなうて、情がふかうて酒のまいで一年中隙で何が一つ不足なし。揚屋は先銀わたして買ひまする、女良さまは断りなしに毎日なりとも御出なさるゝ、御内證の御用は何程にても、是れの内義に申し付けておきまする、外の太夫達は師走の廿四五日比まで、正月の男のない事を悲み、連も物にならぬ男のかたへまで、讀めば泪のこぼるゝ程の文やられしに、そんな事は一つも苦にせず、皆我にうちまかせ、いそがぬ事を多から來年の盆の踊ゆかたを染めさせ、菊の節句の袷の模様まで御申し付けなさるゝを、御好みの通り京都へ申しつかはしける。是程のたしかなる客には眠たくと目を明いて別れ惜む良をなされたがよし。喫も酒の吟味して飲まされて咎にはならぬ事、亭主もすこしは氣をつけて、寒のうちに鱸の焼物、是れは八九月の比はしりを喰うて世にふるし。しやくしであてがはるゝ客とは違ふべし。追付分散と見えすきたる人の紋目に出ようといふを、宿屋御無用と留めて、酒吸物を喰はれ損にして歸し給ふ人と、同じ口には迷惑なり。又女良も家賃置て借たる銀で節季拂ひを仕てもらひ給ふも、心のようにない事、随分たらし取り給へ、誰におそれず、此里の銀を千貫目にても、我が宿で拂ふ大じんは、我等が外には御座るまいと、思ふまゝなる事いふにも銀がかたきの世わたり、皆御尤にしてうけたまはりしに、此道に奢ればはかのゆく物かな、十四五年見およぶうちに、いかな／＼百錢も残らず、是程まではよろも／＼つかひ捨てける。昔は人を笑ひしが、今身の上は長町にかげかくし、花火線香して朝夕の煙ほそく、一人の母に手なれぬ質綿をくらし、妹はわけもなき所へ



奉公に出し、取替銀をうれしく、忍びく／＼に端女良ぐるひして、夜見せ過ぎて霜月の比、よし原町の五分女に、虎之助といふ局に火鉢移りに人の見知るもかまはず、我も昔は日に一筋づつ下帯かきかへたる男、今古妻木綿も恥しからず、人は知れぬものよ、あなづり給ふたと戯ぶれける。一つの心から女良買のなれの果、此男ばかりにはかぎらず。

#### 四 何にても智恵の振賣

大海の底に尾闕といふ穴あり、諸川の水日々夜々に入れども、彼の穴のうちにて失するがゆゑに増す事さらになし。人間に一つの口あり、この尾闕のごとし、一生のうち朝夕食物かぎりもなし。身過は八百八品、それそれにそなはりし家職に油断する事なかれ。今時は正直をもつて其身の骨を碎けば天理に叶ひ、それ／＼の渡世いたさぬといふ事なし。惣じて諸國の城下、又は入舟の湊などは人の足手かけにて、さまざますぎはひの種もあるぞかし。されば山城の伏見の里は七八十年も見およびしに、通り筋の脇々は昔繁昌の時の町並残りて、次第々々に物の淋しくなりて、何商賣するとも知れず、年月をおくるものその數しれず。是をおもふに千軒あれば共過ぎぞかし。近年は人の心さかしうなつて、大かたの働きにては中々身過ぎになり難し。すぎし年の師走に闇の上塗を仕にまはるを、手まはしの上き事と思ひしに、又今年の暮には達者なる男が、釜みがきにありきける。大釜五文其外は大小によらず貳文つつなり。又餅米あらひ買一斗貳文にて埒の明く

事、手前に人をもたぬ者は勝手よし。また表具屋の隙なる細工人と見えて、定木竹べら刷毛糊迄を持ちて、お座敷の腰張一間を壹文、あかり障子一枚二文、何行灯にても壹文にて掃除までいたしける。年徳棚を買ひければ釣木釘まで持ちきたりて、黒方をあらため釣りて歸りぬ。何にても自由なる世時になりける。是等は世帯の事にて、中より下の人のためにもなりぬ。又五十ばかりの男風呂敷を肩にかけて、猫の蚤を取りましよと聲立て廻りける。隠居がたの手白三毛をかはゆがらるゝ人、取れとて頼まれけるに、一疋三文つつに極め名譽に取りける。先づ猫に湯をかけて洗ひ、ぬれ身をそのまゝ狼の皮に包みて、しばし抱きけるうちに、蚤どもぬれたる所をうたてがり、皆狼の皮に移りけるを、大道へふるひ捨てける。是程の事にもそも／＼何としてか分別仕出し、身過ぎの種とはなりぬ。今程諸人かしこく物云はずして合點する世の中に、年がまへなる男、子細らしく小脇指に大巾著さげて皮立付を着て、何にはよらず世間に合點のゆかぬ事あらば問うて見給へ、随分人の身上にかつかしき事の談合相手になるべしと、口廣くいひ廻りぬ。心有る人は耳にも聞き入れず、大かたの人は肝つぶして、いかなる虎落大明神のおとし子にてもあるらんと、つらく／＼貝を詠めける。すぎにし秋の比三軒屋川口へ沙魚釣舟に出し人、酒に亂れて後釣りたる沙魚を丸焼にして數喰ふ事を手柄、各にあばれける中にも、殊更一疋一口にせし人俄に咽を苦めける。是はいかにと見るに、此の沙魚の腹に二寸ばかりの糸付て釣針あるを咽に立て、さまざましても抜ける事なく、此難儀すべきやうなく、船中鼓三味線も鳴りをやめて、つれ／＼に書き残せし法師の足跡のごとく迷惑して、命もあぶなく宿に歸り、醫



師に見せてもはかどらず、とやかく内談する折ふし、彼の工夫者の通りける程に、此事を語りければ、これは即座にぬく事ぞと、こまかなる珠数の玉をときて、かの糸へ一つく通しかけて、其後糸をしめてしづかにしやくりける程に、何の子細もなく抜きける。いづれも此の才覺を感じける。其座に物云ひ堪忍せぬ男のありけるが、我等もすこし御無心あり、近年商賈左前にて立所居所にて損銀かさなり、この様子大かた世間にも見および聞き傳へて、萬事賣掛せねば次第に手づまり、此の行先の節季何と分別いたしても、さし引算用して貳拾貫目餘もたらぬに極まりける。爰の談合相手に頼みたきといへば、女房衆の親許分限か、又は銀持の出家に弟はないかといふ。それは持ちませぬといへば、この談合は埒が明かぬと申して歸りける。

西鶴織留 世の人心

目錄 四

① 家主殿の鼻柱

心から九度の宿替  
別れをなげく中の喧嘩

② 命に掛の乞所

心を付る繪馬醫者  
我も人も子に迷ふ世上

③ 諸國の人を見知るは伊勢

千人まへの膾炙物  
うたがはれたる長崎の心根



一 家主殿の鼻ばしら

商人職人によらず住みなれたる所を替ゆる事なかれ。石の上にも三年と俗語に傳へし。世帯道具の鍋釜ぬくもりもさめぬに、又宿替の荷物程見ぐるしき事なし。惣じて類をもつて集り、商賣見世も二條通りに鮫、木薬、書物屋ありと、諸國の人も見および、烏丸に烏帽子折は年ふりたる事にて、伊勢神樂の勸進彌生、鹿島の事ふれ、あたまに烏帽子被くほどの者は知らぬといふ事なく、ありきやうがり舞まひまでも、入用の時は爰に行きて是を調へければ、醒なうして人を呼びよせ、居ながら渡世の種とぞ成りける。下京七條通りに小家をかりて、春夏は女房に扇子を折らせ、秋のすゑより冬中は男手もみの紙子をこしらへ商ひけるに、六條まゐりの道者、國みやげに買ひ調へ、手前次第に榮え、すこしの質を仕出しける時、隣あたりの茶呑み物語に、家主の内義の鼻は人にすぐれて、阿太子山の天狗の蝶鳥に見立てたと、扇子やの喉が笑はれけると、其座より追従につげ口する人あつて、屋ぬしの内義わめき出し、親の産付て置かしやつた鼻なれば、おれがままにはならぬ、借屋中の喉さま達にまかせます程に、何とぞ痛まむやうに鼻のとりあひよく頼みます、私の鼻柱を遊女の如く賣物にはいたさず、一代養うて置く男さへ堪忍して、十九年添うてゐますれば、外に別の事はないと思うたに、どうした事に皆さまの御厄害にはなりませんぞ、菟角けふの中によい程にとわだられけるに、いづれも是に迷惑して、一日もお家のはしに居ますからは、お主同前、お口が廣いといふも舌長な



事、お足のひらたいもお着物を長うめせば、誰見付る事はなきに、日比口がすぎてくと、皆扇屋の鼻にゆづりければ、いよく内義は腹立して、是れあふぎや殿、我等が鼻が高いによつて、こなたのさげをだれへ構ひまして、出入に難儀をします程に、家を早々明けてくだされといふ。女房けらく笑ひして、是れお内義京は廣う御座る、家賃さへ月々に済ましますれば、雨ももらず、鼻も大抵の所へ宿替ますといふ。是れおかた、昔も鼻の高い人に末摘というての后さまがあつた、そなたがいやしい人で源氏物語を見やらぬによつて、物の合點がゆかぬといふ。私も内裏様の娘に生まれましたれば、御所車にも乗りますといふ。是れ輿車にのりつけぬ者は腰が折れます程に、そなたは桶屋の娘なれば、親仁殿の手細工の棺桶に乗りやれといふ。いやありさまに人の先祖あらためてくだされいといふか、こなたも出雲の神主の頭のひとり子といはつしやるが、何として貧乏所へ縁は結ばしやつた、日本國の事さへ相應に取合せ給ふに、神も意知のわるい事ぢや、世間にはよう似たものが御座る、この前嵯峨の筆屋といふ旅籠屋に、天狗のこまんといふ人たらし女があつたが、どこやらの家持のお内義に生移しと見知らぬものはないが、今は京のどこにか御座るぞと、同じ事ばかりいへば、内義上氣して、此方の家さへあけてくださるれば、云分する事も御座らぬと、裏の戸はづして歸られける。扇屋の男迷惑して、おのれが口ゆゑ住みなれたる所を立ちのく事、身體の没落なり、爰は家主殿へ訛言しよといへば、女は氣色かへて、思ひもよらぬ事といふ。男の言葉をもどくからは暇をとらず程に、裸で出てゆけといふ。いかにも出てゆくべし、我追ひ出さるゝからは、そなたの姉御の頓死なされた

時の首尾を、世間へ沙汰してお暇申すと、身ごしらへすれば、男手をさげ、て我が女房と宿替る程の事が、思ひかへらるゝ物か、内々大屋の女の勿體に見あいた、此の次手に爰を替へんと、一條通り醒井町へ宿を替へしに、南隣の女房年月亂氣して、時ならず又物ぬきて、近所かけまはるに驚き、爰をも又かへて六角堂の前に住みけるに、此家むかしから逆柱のわざといひて、夜々虹梁の崩るゝごとく、寢身にひびきて魂を失ひければ、爰にも又居かねて、千本通りに越して物閑なる所と喜びしに、西風のだびくゝに野墓の煙かよひ、夫婦とも嫌ふに蟲あつてわづらひ出せば、此所にも住み憂く、また新町の上へ引越しけるに、家新しく然も一軒屋にて、北隣は椀屋の御隠居とて、表は格子作りにして物にかまひ給はず、南のかたは酒屋廻屋歴の御かた、今といふ今思ふまゝなる所へまゐつたと心祝ひせしに、其夜から御隠居に専修派の長念佛申し出され、明けがたまで枕にひびき、物いふ事も聞えず。又廻屋から蟬の大ききしたる油蟲ども、數千疋わたりきて、五器箱をかぶり、茶の水に飛び入り、衣類を喰ひ刻き、米だはらに穴をあけ、屏風、扇をばらくになし、肴かけをあらし、醬油の徳利にはひり、鹽籠にむさき事どもして、人のしらぬ世の費なり。古人も是をしらば家に油蟲、國に酒の酔と書くべし。さてもくゝ一夏を暮しかね、爰も程なく立ちのきし。二とせにも足らぬうちに、九の所住み替へ、少しためたる金銀残りすくなく、其後は松原通り新玉津島の社立たせ給ふほとりに、女房のために腹がはりの弟が住みけるが、このものが指圖にまかせ、其町へ替へける。此家鬼門角なる事を氣にかけ、殊更當年の金神にあたるといへば、此の末世に何の方あたり、こつちへまかせ給



へと、無理に移らせしに、萬心にまかさず、日夜におとろへ、身上は紙子四十八枚、ばら／＼となつて、それからは面々かせぎ、男は奥州の白石といふ所へ紙子屋が下人と成り、女は扇折る事を身過ぎのたねとして、平戸の島國へつれゆきける。東西へ生別れる事も、此女の無用の口のすぎたる故ぞかし。惣じて女たしなむべきは言葉なり。夫婦の別れをしばらく惜みて泪に袖を洗ひ、又いつかめぐり逢ふべし、さらばといふ時、此女分別しかへて、此男何をいひかはしたればとて、數百里へだてゝ益なし、心にかゝぬ暇の状と乞ひつめて、其跡はいさかひ仕舞に、おのれもひとりは何として堪忍してをるまい、おのれも女もたず居らうか、姉の銀盗人めとわめき別れぬ。まことにのけば他人、さてもおそろしの人心や。

## 二 命に掛の乞所

世間に繪馬醫者といふ事子細をたづねけるに、歩行醫者の田舎より大坂住居を望み、少しの貯へして、身體かためざるうちは、妻をも持たず、借宅の軒に竹の藁垣ゆひまはして、名苗字を筆ぶとに張札柱にあらはし、近所に急病あれかし、一手柄して見せんと、明けくれ時節待てども、呼びにくる人なければ是非もなく、宿にばかりも居られずして、難波の寺社をまはりて日を暮し、或時町内の自身番夜咄によばれて、今宵けしからぬ風は、霜月朔日なれば諸國の神歸りの荒れなるべし、天おそろしや化物の出さうなる黒雲といひける次手に、何と天満天神に掛け奉りし大森彦七が繪馬、山本文右衛門が筆勢、大きに出來物と沙汰しけれ

ば、彼の醫者十面作りて、いづれもお氣が付きますまい、あの彦七に一つのあやまり有り、掛鳥帽子の緒を書き落したりといふ。皆々手を拍つて、さりとほこまかに見咎められし事ぞと、此評判や事なく、其後さる大醫にたづねしに、畫師も物知らねばならざる事かな、彦七が時代までは髪に忍びの緒を付けて留めける、掛鳥帽子に緒を付け初めしは百年このかたと、物語いたされしに、是れは／＼と各又手をうちける。惣じて繪馬は萬人の目にかゝれば、假初ながら大事の物なり、都の清水に長谷川長藏が筆にて、五良朝比奈が力くらべを書けり。此袴のまちのひだ折れたる上に、心もなく舞鶴の紋がらを書たる所、猪熊の染物屋の下女が見出して、洛中沙汰になり、長藏一生是をわづらひけるとなり。又祇園の社に火ともしの大男、雨の夜凌わらの笠着て通ふを化物といひふらせしを、平忠盛くみとめ給ふありさま、別所權右衛門が書きける。大男の手より取り落したる土器の割ども、取り集めたらば四五枚ほどもあるべし、是れはあやまりと稻荷の前なる土鈴の細工人が見出して、是れも沙汰せし時、物に心得ある人のいへり、紋鶴とは各別の僉議なり、其の火ともしの男かはらけ五枚持ちたる事もあるべし、昔の事を今其男に問はれもせずと、大笑ひして果しける。最前の醫師も病人をこまかに見立る事はなりがたし、年中際なるまゝに何の用にも立たざる事も、合法が辻の石の鬘鬘王の肩のすぼつた、新地の中の町に公家の弟らしき人を見立て置いたなど、一つも役に立たぬ事ぞかし。此の際に見わたらぬ醫書を、才覺して寫し本にする程の上根なくては、この道の出世は成り難し。醫は聖人のまねながら、今の世は自然の道理をもつて、我が名をよびくる時もあるべしとは廻



り遠し、爰は方便なくては萬人思ひ付くべからず、むかし入れ残しの目薬屋の根元わづかなる事なりしに、此人才覺にて夏鈴の一升を三文つつの時、毎日一斗買うて近所へ是をつかはし、身を煮てまゐりて、數は此方へといひける程に、さてもく此の目薬大分に賣れけると、所よりいひはやらかし、それ世に廣まり、分限に成りけるを見て、今何軒か出來ける。又ある醫師は年玉に塔のあかぬ煉藥をこしらへ、金徳丹と銘を打ち、諸病によしと書きちらし、十徳の借著して、正月二日の夜のうちから、近付のかたは申すにおよばず、伏見のくだり船で咄したる人、あるひは旦那寺で参り逢うたる人、又は舞の芝居で同じ筵に居たる人、風呂屋へ一つに入たる人までも、所をたづね置き、一目しる人残らず年玉を唐への投げ銀とおもひて、二三年も勤めければ、此禮請けたる氣の毒に思ひながら、後には心にゆかり、下人の風引込む程の事には呼びにつかはし、いつとなく時花出、花色ちりめんの長羽織を武士の具足と思ひて拵へ、草履取の外に男を置いて、すこし勿體を付れば、人の思ひ入りもよろしく、其内に浪人の娘などの仕付所のなく、すこし數銀あるをよび入、この勢ひにちひさき駕籠こしらへ、一人は手前の男、又一人は毎日八分づつのやとひ轆轤、肩もそろはず昇れて息杖を見ぐるしながら、先づ乗り出してかけ廻れば、世の人乗物の棒を呑みて、養生ぐすりの一服貳分當てにせしも、はや五分づつの算用してお禮申しける。随分爰を大事と神農を祈るべし。又昔のごとく歩行にてまはり、乗物では療治の手まはし悪敷、下たとは言分もむつかし。そもく駕籠に乗る時一代の思案所なり。歩行の時は繪馬見ても日を暮せしが、乗物にのり出て行所のないは、迷惑して座敷楊弓の見

物、又は治部「○少脱カ」輔亂の長話、病人もなき所の茶を呑みあらしぬ。然れども世間のありさまを見るに、四五年目には必ずはやり病ある事なり、此時老醫上手の直しかけたる跡を請取り、心の外の仕合せめぐりて、是より名をあげ三人まはしに乗りつづくる事ぞかし。まことに藥師のうたてき事は、今少しの所に退屈して、病人を取られける。又取る事もあれば互ひ事と思ふべし。只醫者の氣をこらし年をよらす事は、宵に藥出し置き朝脈に見舞へば、昨日のお藥たべさせますと、腹にもやつきが出來まして、目まひ心に足が冷えまして、菟角物を申しませぬといふ。又そこへ見舞へばいよくくだりも留りませず、大熱がさしまし、佛様の所へまゝ喰ひにゆかうくと、上言を申しまして、夜の明けますを待ち兼ましたと、母親泪ぐみてかたる。又爰へ見舞へば胸がいたみ出まして口中が腫れまして、もはや寝かへる事もなりませず、是程俄によわりましよとは存じませなんだといふ。是さへ氣の毒なるに、勝手に親類あつまりて、今時は藥が人を殺す、はじめから無用というたに、ぶら／＼と掛けて置いて、寺へ人をやるばかりといふ臍骨身にこたへ、やう／＼爰をにげのき、何の因果に此身には成りけるぞ、渡世は八百八品といふに、醫者は其中のより屑なるべし、殊更むつかしき病生あてがはれ、推量の療治をするも心おそろしき事なり。されば大坂の廣き事は名譽の病人あまたあれども、いづれの手にかけても、直らぬはなほらぬなり。中の島に年十七に成るひとり娘、生れながらに白髪あたま、形美女にして、さりとては惜し。又玉造に十六に成る娘、四年此のかた大便おりずして、食物は常のごとし。又長堀に十九になる娘あり、誕生日に取立しての此のかた、晝夜横寢を



したる事なく、我が家を年中ありきて斗り暮しぬ。唐の書物にはかゝる事もある事にや。此親皆分限なれば恥を隠してなげきぬ。此内ひとり直せば銀五百枚は取る事なれ共無念なり。あはれ薬師の御夢想にて、此なる妙薬もがたと願ひぬ。薬代程高下のある物はなし、八十服もりて銀五匁取るに、三服にて銀五枚に樽看を取る人も有り。世の賈は醫者智者福者といへり。中にも醫者のなき里には住む事なかれ、二つなき命を翻む事ぞかし。一切の人間無事堅固になくて世に住める甲斐はなし、常々灸をたえさず、餽汁大酒をやめて、身をはたらかし、氣をなくさめ、養生は常の事なり。されば世の人の付合ひ、日比のよしみは病中の時知るるといへり。兼ては頼みにいたして置ても、それ／＼の家業の障りなれば、はじめの程こそ日夜に行き見舞もすれ、月を重ねてのわづらひになれば、いつとなく他人のあらはれける。身を分けたる親子の中さへ看病にあぐみて、互ひにあいそをつかし、さもしき心の見えすきける。身を頼みたる男の病中、女程大事にかくるもの外になく、自然の事あらば死人と一所と思ひ込みしも、後には心ざし替りて、かさねて持つ男は、此人のごとく弱々としたるに倦じはてたと、いまだ息も引きとらぬうちから後の事を分別して、我が手道具の外に男の物まで取り集め、其後は湯水もそこ／＼に取りあつかひ、埒の明くの待ちける。男も又女の長病にあぐみて、一日も早く最期願ひける。死にさまに看病おろかにいたさぬは、あとしきの望みゆゑなり。親でも子でも欲に極る世の中なれば、死跡に金銀を残すべし、是れを死光りといふ。死別るゝ中にも親より妻はかなしく、妻よりは又子は各別に不便のます物なり。一子など殺せし時は、世にながらへては居ら

れざる程に思ふ物なりしが、ふたりも三人も死なせて後は、心鬼のごとく成て、中々なげきも薄く、人の愁も心にかゝらず、火宅の門を横に車と出ける。さる程に子のわづらふ程世に物うき事なし、人々持たねば知らぬなり。ある人五十過ぎてたま／＼男子をまうけしに、然も生れつき百人にすぐれ、是を見る程の人、かゝる貧家にそだつる子にはあらずといふ。はや三歳にて習はずして花鳥風月の大文字書けば、大師の二たびと、是をおろかにせざりしに、その春より蟲を發して、糞薬かあたへけれども更に甲斐なく、けふを限と目を見つめ、とやかく歎く所へ、年中買ひぬる此中の銀子を今済ましてくだされいと、せはしく便を立る。亭主腹立して此の中へ鈍なというて歸しける。此使又来て、そなたの子が死なば銀取るまいと約束はせぬとわめく中に、此子おち入りければ、皆々泣き出す中に、亭主は彼の米屋をさし殺して置き、我も果てける。

### 二 諸國の人を見しるは伊勢

神風や伊勢の宮ほど有難きは又もなし。諸國より山海萬里を越えて、貴賤男女心ざし有る程の人、願ひの如く御參宮せぬといふ事なし。殊更春は人の山なして、花をかざりし乗掛馬の引きつづきて、在々所々の講まあり、一村の道行も二百三百人の出立、同じ御師へ落ち着きける程に、東國西國の十國も入り亂れて、道者の千五百二千三千、いづれの太夫殿にても定まりのもてなし、勝手いかなる才覺にて、このごとく成りける事ぞ、本臈ばかりか二の臈の品々居えられける。臺所に人の二百も働く者のなくては、二千三千のまかな







ひ成る事とおもへば、わづか二十人ばかりにての手まはしなり。先づ腕折敷に箸までうつて、皿小道具までを三人の請取りにて出せば、食は煮湯に籠をしかけ何の隙も入らぬ事、汁の魚をまなばしまな板なしに、大鍋へすぐに切り込む、切目とかういふ事なし。中にも贈はむつかしき物なるに、年の寄りたる男ども袴を着て、手毎薄刃一枚づつ布きれに包みて、贈の貫刻みにまはりけるが、一斗を貳分づつに極めて、一人して一日に一石づつきさみける、其の見事さ早さ、常の庖丁人十五人斗りしても是程は出来まじ。扱是れをあへる事大半切に入れ、鐵にて此の手ばしき事見て居るうちなり。これらはかくなるべき事なりしが、看は何によらず二千人の焼物。然もやき立てを出す事、あまり不思議なり。火鉢五十も有るか、又は廣庭に二十間も溝を掘りて焼く夏かと思ひしに、是も三人して鼻唄にて焙をあける。壁ぬる小手のやうなる物を十枚ばかり火鉢にて焼き置き、扱大釜に湯をたよせ、四角なる籠に看二十枚づつ入れて、ざつとゆであけて長板の上にならべ置き、最前の小手にて片身ばかりざらざらと撫でてそのまゝ出しける。伊勢の焼物を兩方焼くといふ事なし。よろづこの手まはし、さりととはく世間各別なり。此所は太神宮のお蔭にて、年中さまの身過ぎ有り、諸國へ初尾くばりの状、大相原一東を銀壹匁八分の贖買、中相原のざつとしたる状は、一東壹匁三分にて、隙なる醫者浪人の是れを書きぬ。惣じて神職のかたは云ふにおよばず、萬の商人までも、伊勢は人にかしこき所を見せずして皆利發なり。是れ程の人心にて何者かいつの代にはじめて、鳩の目の蒔錢百といふを六十つなき、壹貫に付てやうく壹匁四五分づつに賣りて、宮めぐりに是をまかせける。雨の宮より

風の宮へぬけ、又是はむすぶの神、すなはち是が腰抱くものなしに子安の宮、是は姑と中をよく守り給ふ神と口をたたき、若い男を見かけては、是なるが久離切られさしやる時、親達の堪忍なさるやうに後神に立ち給ふ宮と、其道者の風俗貝つきを見合せ、宮雀一人して小宮五つも六つも請取り、壹文に千貫の入れ替へよきを、くわつと投げ給へと欲ばりける。新錢をなぐる人は稀にして、年々伊勢中の損つもあり難し、是ぞ智恵ない神參に無用の智恵を付けける。近年は鳩の目法度になりぬ。又間の山の乞食、むかしは遊女の如く小袖の色をつくして、味噌こし提げたるをかき、其姿には似ざりき。中にもおたまおすぎとて、ふたり美女あつて、身の色を作り、三味線を引きならし、あさましや女のすゑと、伊勢節をうたひける。毎日の參詣あだぼれをして爰に立ちとまり、前なる眞紅の網の目より、白のうちを覗ひすまして錢なげ付けけるに、一度も當てたる人なし、自然と顔をよける事を得たり。ある時江戸より参りたる人百錢を投げつけしに、お玉が圓にあたり、額にすこしの痕を付けてよしなし。諸國より随分大氣なる人参りけれども、錢百文なげつけしは是がはじめなり、大かた世の人の心さのみかはらぬ物ぞかし。又明野が原明星が茶屋こそをかしけれ。いつとても振袖の女赤根染の裏付たる櫛着物を、黒茶にちらし形付けぬは一人もなし。扱日本に爰の女程白粉を付る所又もなし、同じ出茶屋の女の風俗住吉とは是れ各別の事なり。所によりて伊勢難波の替りあり、爰に心を留むるにもあらず、旅のしばしの慰みぞかし。此廣野錢掛松のほとりに三十四五年此のかた、道者に取りつきて世を渡る歌比丘尼一人ありける。所の人異名をつけて取付處の壽林古裡の青春といひて、通し